

## 第二章 遺構各説

### 第一節 7号竪穴

#### 1 竪穴埋土の様相と層序

7号竪穴の発掘調査は、現地表面で確認できた窪みに基づき発掘区を設定し、セクションベルトをグリッドの南北・東西方向に沿って設けて行った。埋土の厚さは住居中央部で約70cm、最も厚い南側壁際には約120cmであった。竪穴埋土の土層堆積は以下のとおりである（竪穴埋土の基本層序であるⅠ～Ⅳ層については第一章第一節参照）。

Fig.4：a-bライン（1～19が竪穴埋土、20・21は炉b内の堆積、22～26は竪穴外の土層）

- 1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（Ⅰ層）。
- 2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（Ⅱ層）。
- 3：暗褐色土。砂と炭化物を含む（Ⅲ層）。
- 4：暗褐色土。3よりやや色調が明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（Ⅳ層）。
- 5：黒褐色土。炭化物を含む。粘性がやや強い。
- 6：褐色土。やや黄色みを帯びた色調で、焼土のブロックを少量含む。5よりも土のしまりがよい。
- 7：黒褐色土。炭化物を含む。粘性がやや強い。5とほぼ同じ。
- 8：褐色土。やや赤みを帯びた色調。
- 9：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。6よりも焼土のブロックを多く含む。
- 10：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。9よりも砂を多く含む。
- 11：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。6・9・10よりも砂が少なく、粘性がやや強い。
- 12：暗褐色土。炭化物を含む。
- 13：赤褐色砂。
- 14：褐色土。黄褐色ロームのブロックを含む。
- 15：明褐色土。粘性が強く、炭化物を含む。
- 16：明褐色土。やや赤みを帯びた色調。粘性が強く、炭化物と灰を含む。
- 17：明褐色土。粗い砂を含む。
- 18：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。
- 19：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。黄褐色のロームブロックを含む。18とほぼ同じ。
- 20：暗褐色砂。

- 21：暗褐色土。砂と炭化物を含む。c-dラインの19と同じ。
- 22：黒褐色土。2とほぼ同じ。
- 23：暗褐色土。3とほぼ同じ。
- 24：暗褐色土。23より粘性が弱い。
- 25：暗褐色土。24とほぼ同じで、炭化物を含む。
- 26：褐色土。黄褐色ロームのブロックを含む。

Fig.4:c-dライン（1～18が竪穴埋土、19は炉b内の堆積、20～22は7b号竪穴床面より下層の堆積）

- 1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（I層）。
- 2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（II層）。
- 3：暗褐色土。砂と炭化物を含む（III層）。
- 4：暗褐色土。3よりやや色調が明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（IV層）。
- 5：焼土。上部に掘り込まれた攪乱坑と関連する可能性が高い。
- 6：灰褐色土。炭化物を多量に含む。
- 7：暗褐色土。粘性が強い。
- 8：焼土。黄褐色ロームのブロックを含む。粘性が強い。
- 9：灰褐色土。砂を多く含む。土層内に焼土が層状に重なるように挟まれているほか、層の下部に炭化材の層を含む。
- 10：黒色土。炭化物を多量に含む。
- 11：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。
- 12：黒色土。炭化物を多く含む
- 13：黒色土。炭化物を多く含む。12とほぼ同じ。
- 14：黒色土。炭化物を多く含む。13とほぼ同じ。
- 15：白色の灰。
- 16：黒褐色土。炭化物を多量に含み、粘性が強い。
- 17：白色の灰。15とほぼ同じ。
- 18：焼土。砂を多く含む。
- 19：暗褐色土。砂と炭化物を含む。a-bラインの21と同じ。
- 20：褐色土。やや赤みを帯びた色調。砂を多く含む。
- 21：褐色砂。やや黄色みを帯びた色調。
- 22：褐色砂。21と同じ。

竪穴の窪みの中央部付近には、約60cm×60cmの大きさで盗掘坑とみられる攪乱が確認されたが、深さは床面直上までで、床面は破壊されていなかった。また、第一章第二節で述べたように、III-39～40区のII層中位より長径70cm、短径50cm、深さ15cmほどの長円形を呈する焼土が2ヶ所まとまって検出されているが、詳細な時期や性格は不明である。また、同じくII層中では樽前a（Ta-a、1739年降灰）

とみられる白色火山灰がわずかに確認されたが、面的にまとまった状態では堆積していなかったため、層序内での正確な位置づけや、前述の焼土との関係については確言できない。なおこれらの焼土や火山灰については、セクションラインにかかる位置では確認できなかったため、Fig.4には図示していない。

竪穴は後述の7a号・7b号ともに火を受けており、粘土の貼床は熱でレンガ状に硬化している。Fig.6に図示したように、壁面には樹皮・板材による壁の構造材が炭化した状態で残り、一部の柱穴にも柱材が炭化した状態で遺存していた。出土遺物にも熱を受けたものが多くみられた。ただし確認された焼土は床面の直上に集中しており、埋土の上層や中層部分では確認されていない。これは屋根への「土葺き」があったか否かを考える上で注目される。

(熊木俊朗)

## 2 竪穴住居

### 2-1 建て替えの概要

7号竪穴 (Fig.3、PL.8-2) は、第一章第二節の1999年度調査概要で述べたとおり、大小2軒が入れ子状に重複した竪穴住居であり、2軒とも廃絶時に火を受けていた。これら2軒の新旧関係については、炭化材列の遺存状況や貼床と周溝の切り合いなどを根拠として、外側が古く内側が新しいと判断した。以下、外側を7a号竪穴、内側を7b号竪穴と称する (Fig.7)。7a号から7b号への変遷をみると、7b号は7a号から特に奥壁側の壁を大きく縮小しつつ、全ての壁を7a号の内側に構築し直している。そして壁の縮小と整合するように貼床や炉、骨塚も変更している。長軸の方向は同一であるが、長軸の位置はやはり縮小にあわせてわずかに東側に平行移動している。床面は、7b号は7a号の面の一部をそのまま利用しており、両者の床面の標高は同じである。

さらに7b号では、構築後にもう一度改築がおこなわれたことが確認されたが、それは奥壁側の壁をわずかに縮小し、支柱穴の位置を変更し、貼床の一部を切り直すという小規模な改築であった (Fig.7下)。この改築については7b'号という段階を設定し<sup>1)</sup>、建て替えとは異なる改築として扱う。以下、竪穴毎に記述する。

### 2-2 7a号竪穴

7a号竪穴 (Fig.7上) は、平面形が縦に長い六角形を呈しており、貼床開口部側の壁の頂点が強く張り出した形をしている。住居の壁の上端ラインは、北西部と西部の壁では確認できなかった (Fig.3に一点鎖線で示した部分)。理由は、北西部は崖の崩落、西側は別の遺構 (続縄文期か?) の存在が予想されたため、それ以上の調査を断念したためである。実際に住居の壁がつくられていた位置は Fig.7上に示した最も外側の周溝の部分と見られるが、それは壁の上端ライン、すなわち竪穴を掘り込んだ位置よりもよりのかなり内側にあり、特に北東部については壁の上端ラインより1m以上内側に周溝が認められた。この壁の上端ラインと周溝の位置の「ずれ」であるが、壁が傾斜して作られていたのではなく、

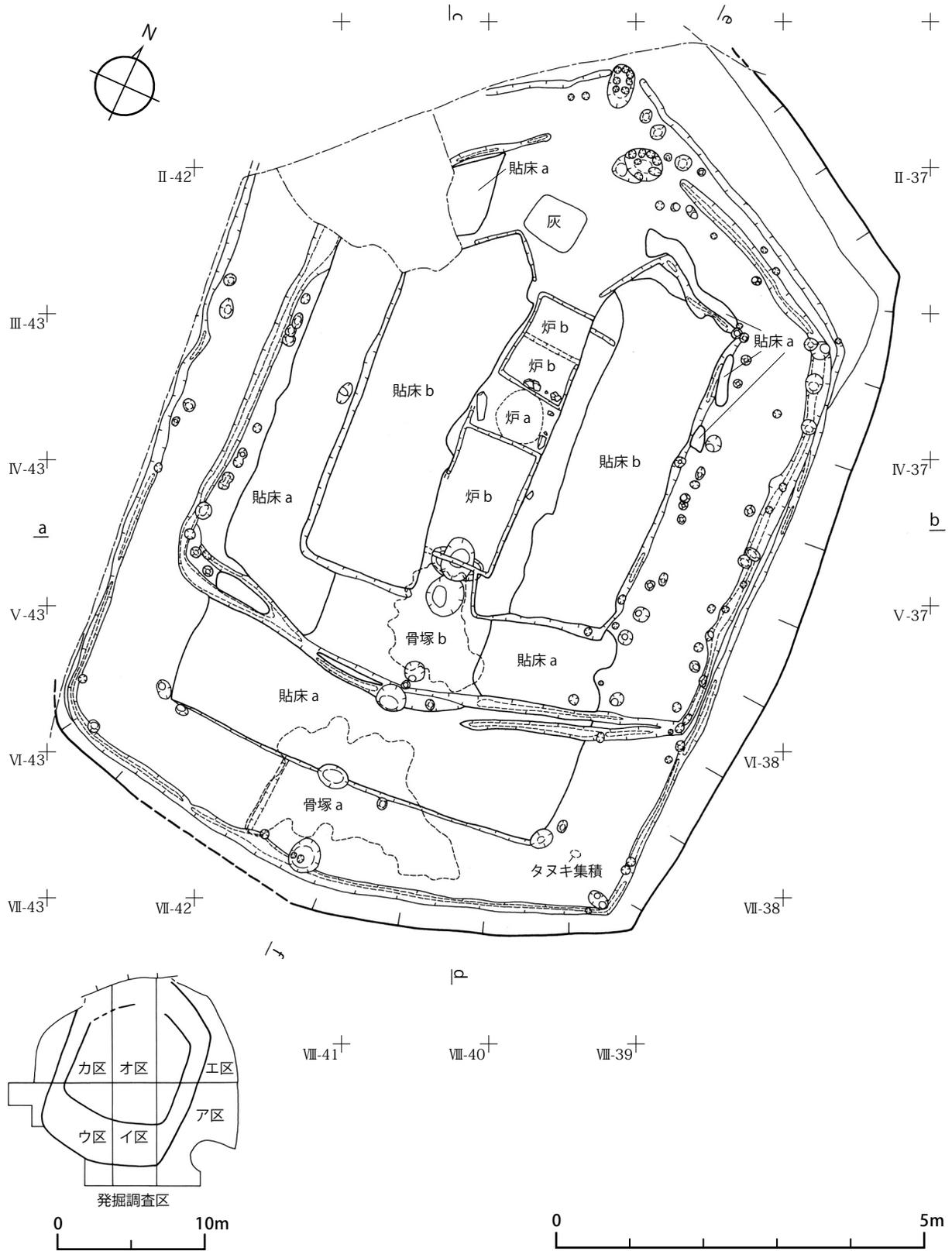


Fig. 3 7号竪穴平面図



Fig. 4 7号竪穴土層図・エレベーション図

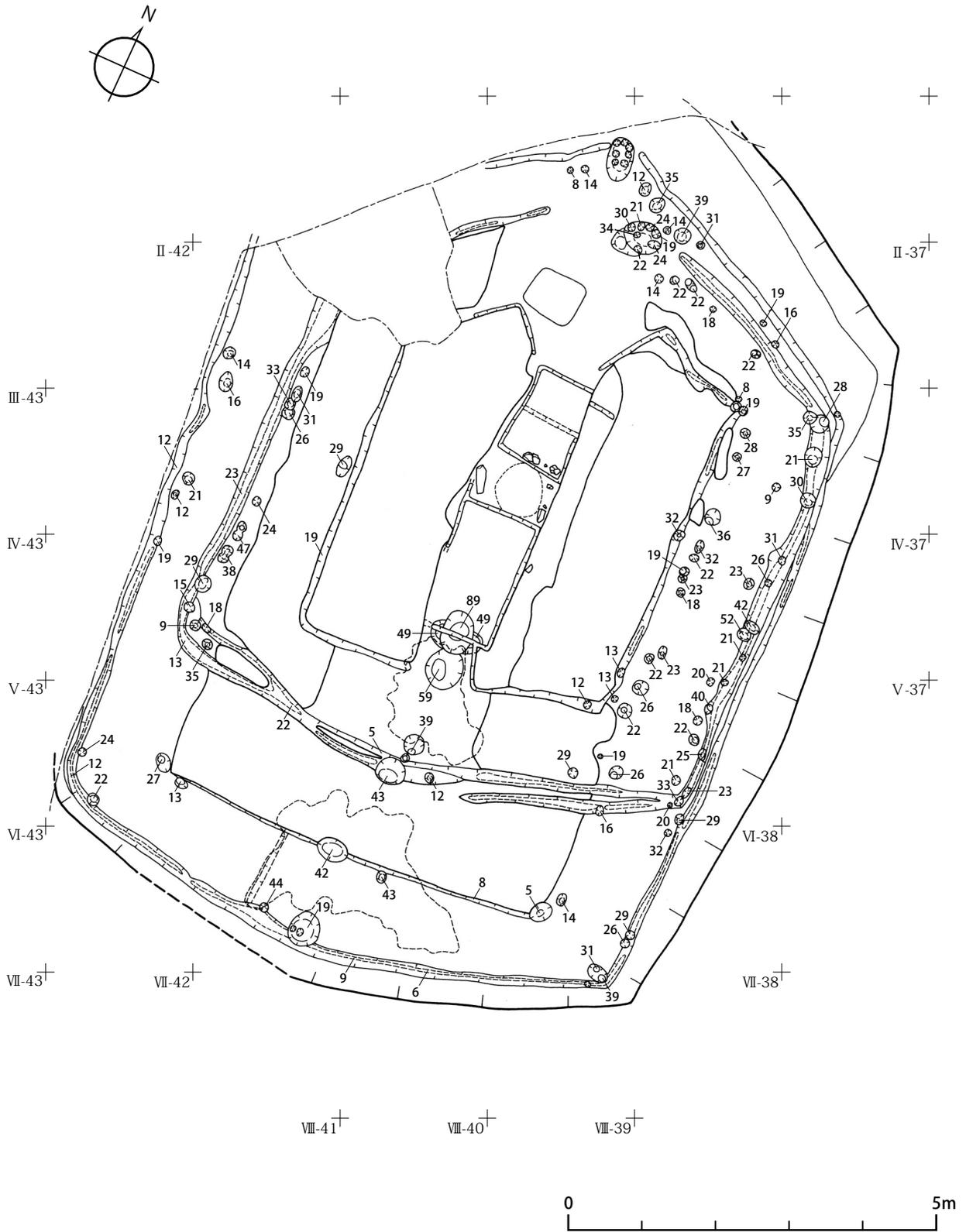
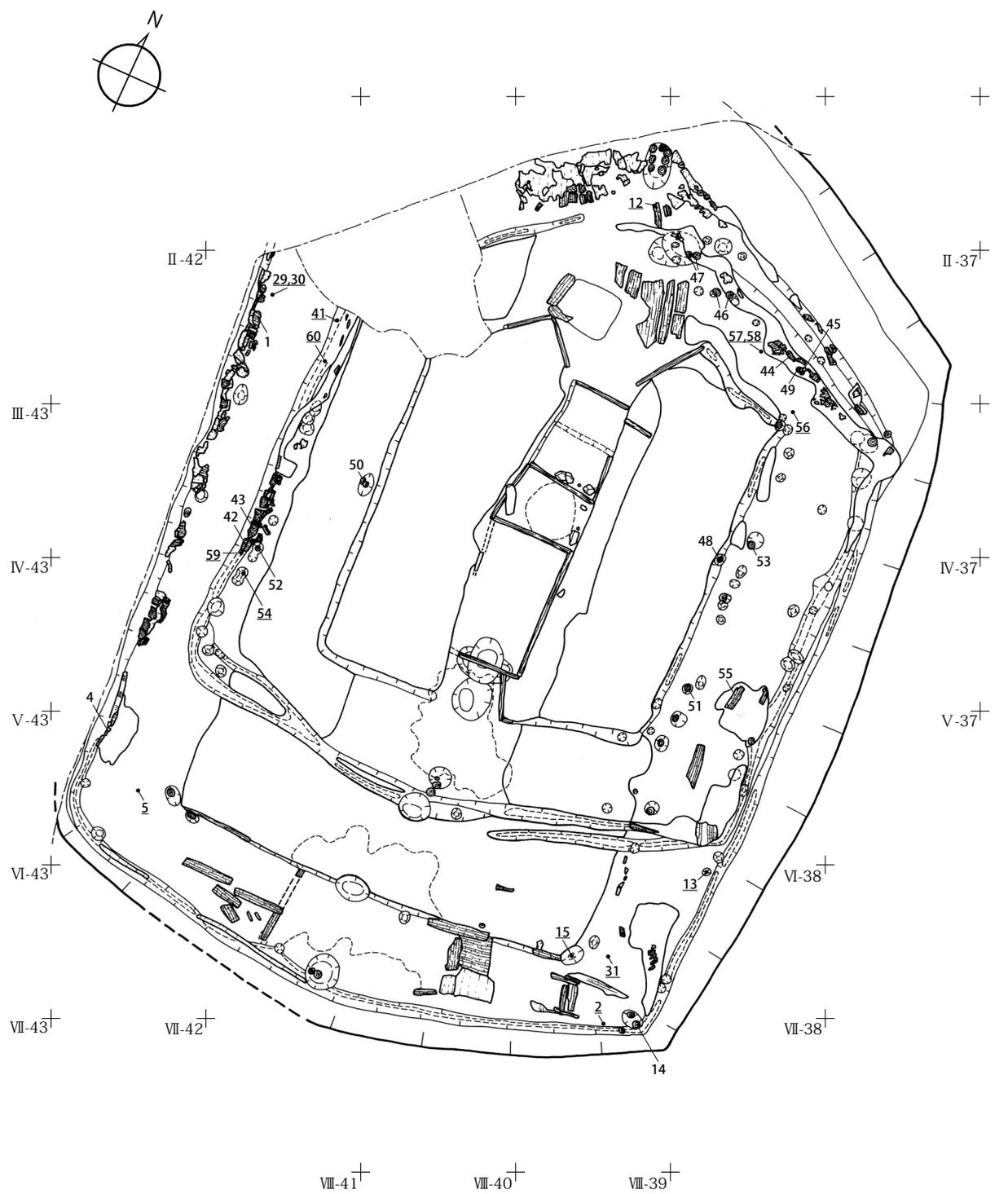


Fig. 5 7号竖穴柱穴の深さ（床面から—cm）



番号は樹種同定した炭化材のNo. (下線は出土位置のみで微細図はない)  
 (第三章第七節 Table1~2 参照)

Fig. 6 7号竪穴床面の炭化材出土状況

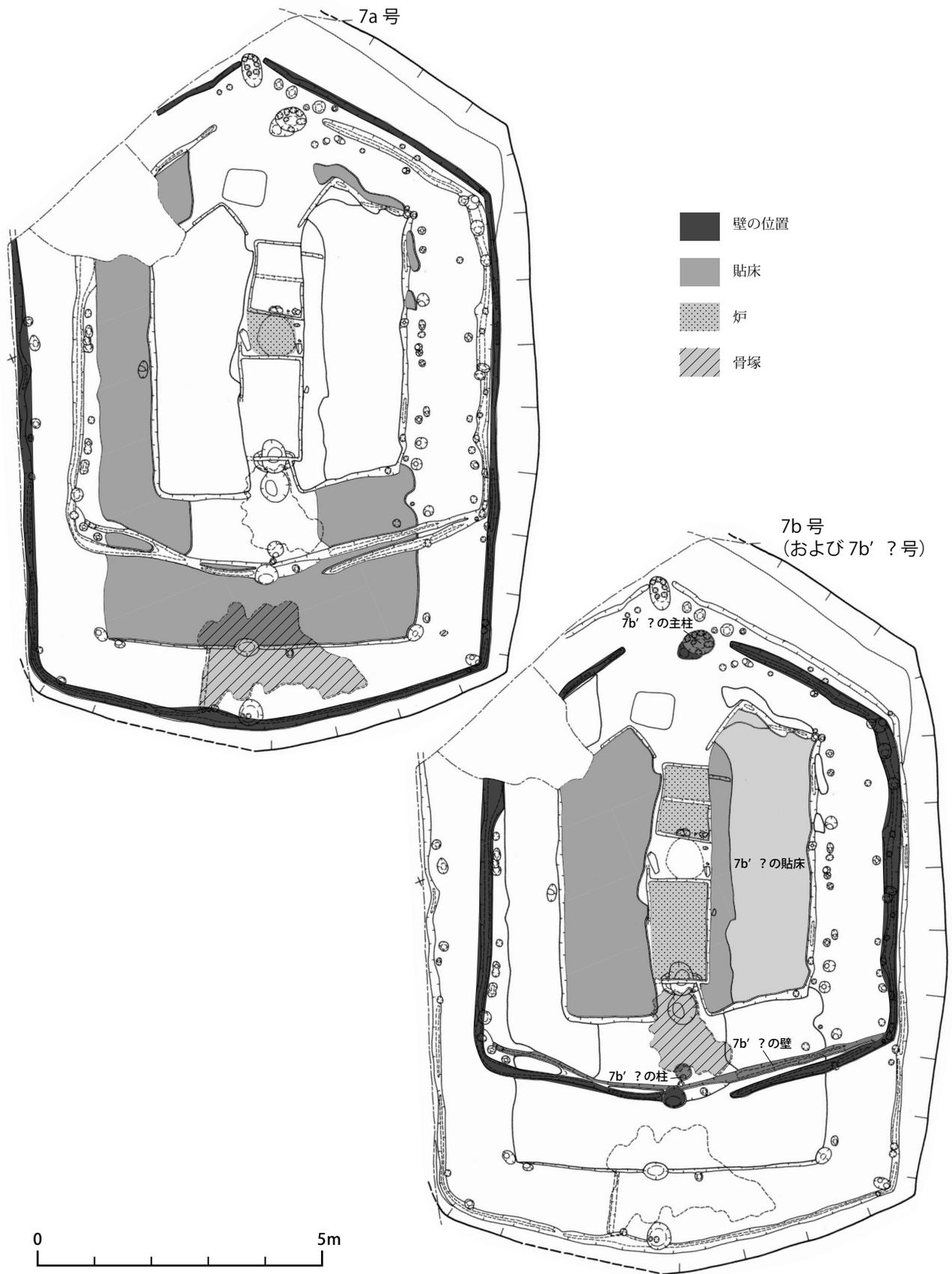


Fig. 7 7号竖穴の変遷過程



Fig. 8 7号竖穴床面出土土器分布図

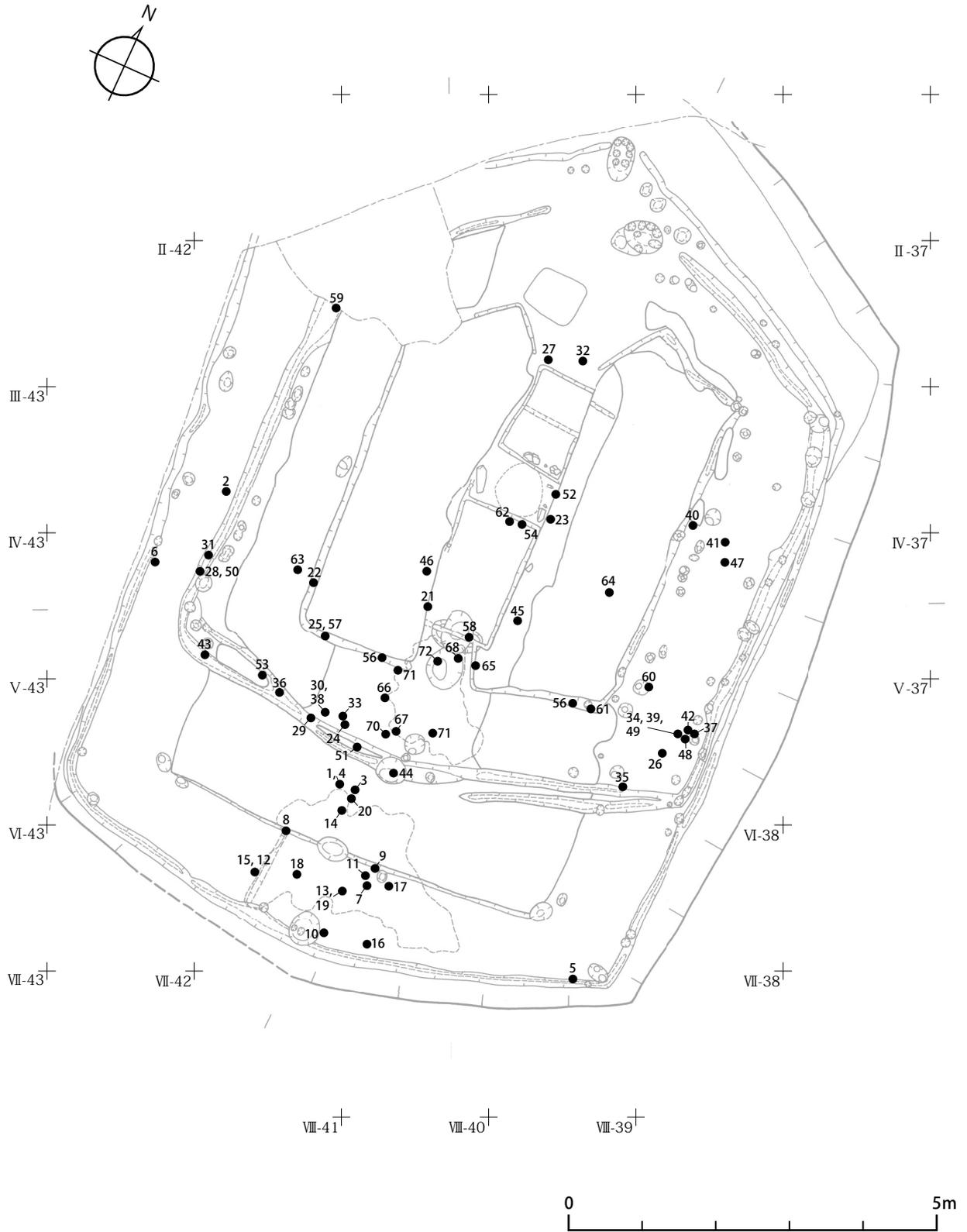


Fig. 9 7号竖穴床面出土石器分布图

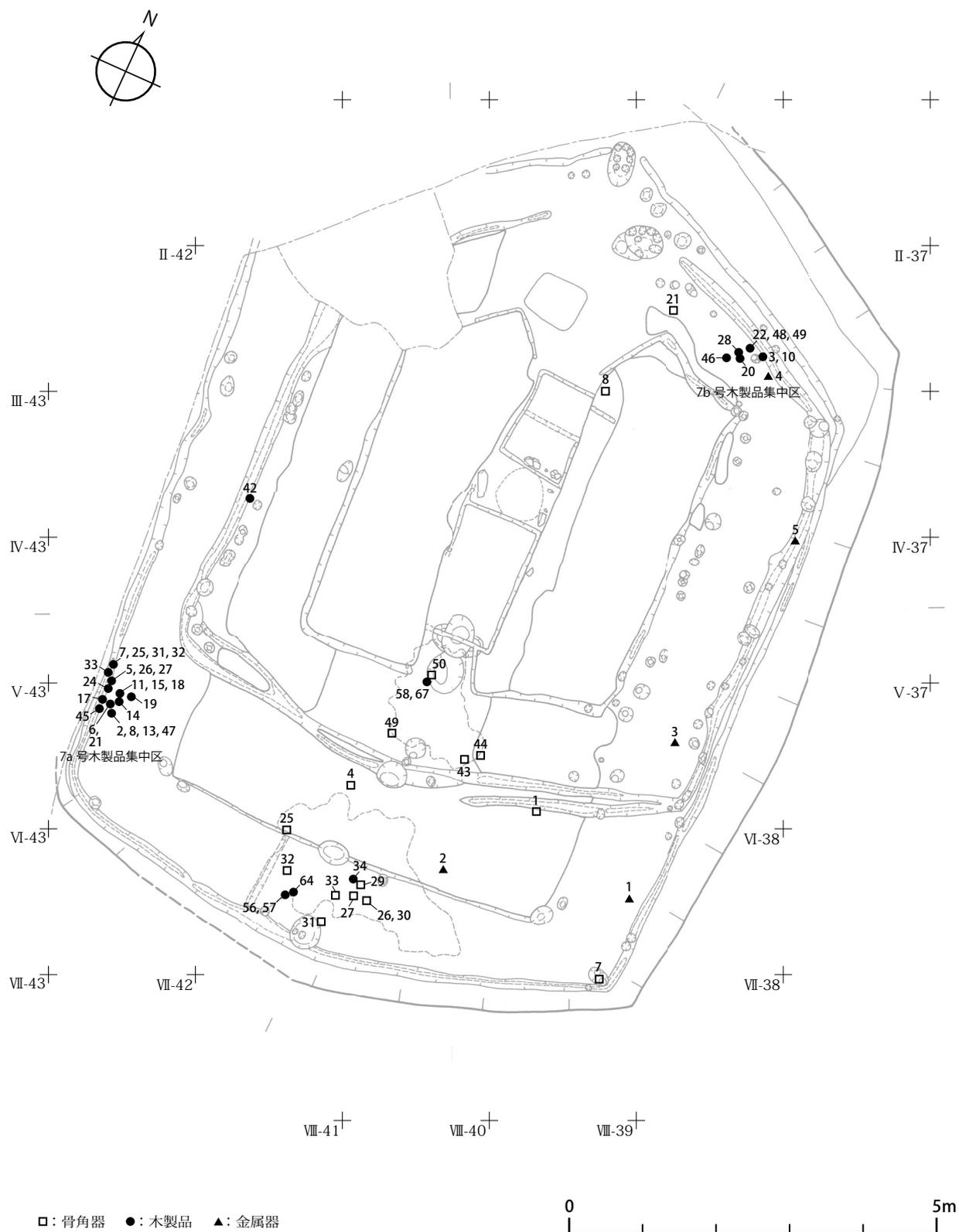


Fig. 10 7号竖穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）

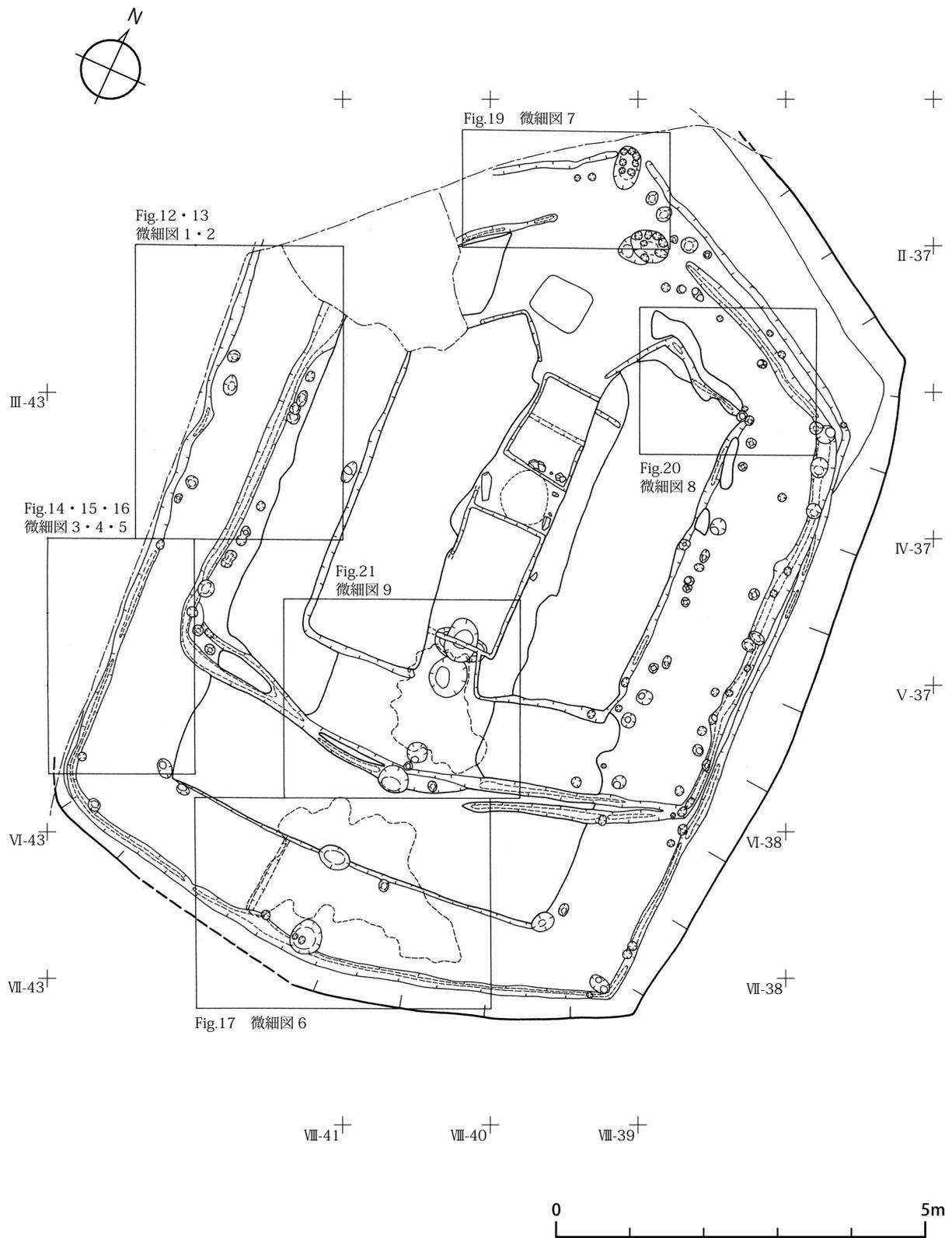


Fig. 11 7号竖穴床面の遺物等集中箇所

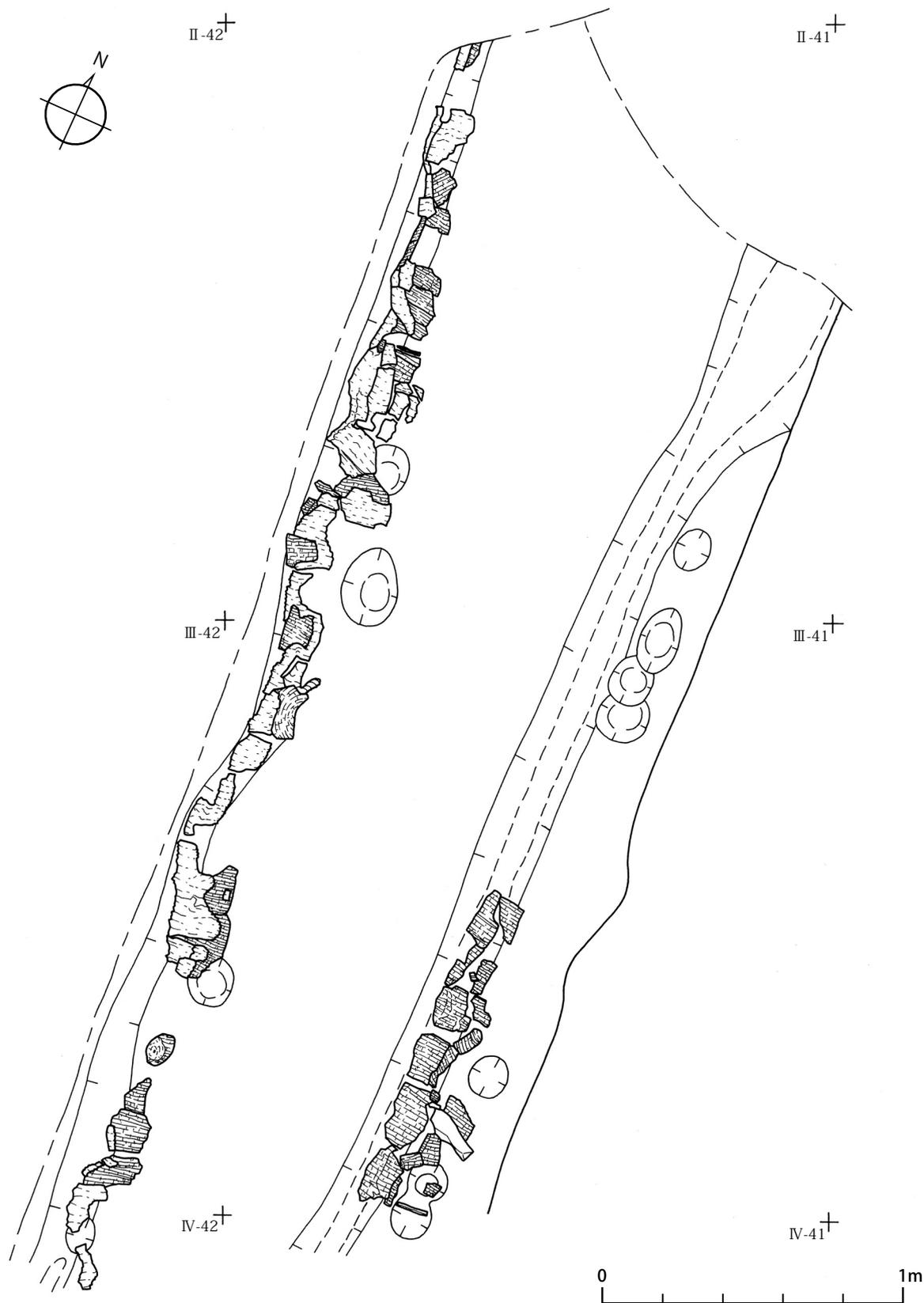


Fig. 12 7号竖穴床面の微細図1 (7a号および7b号の西壁際北部)

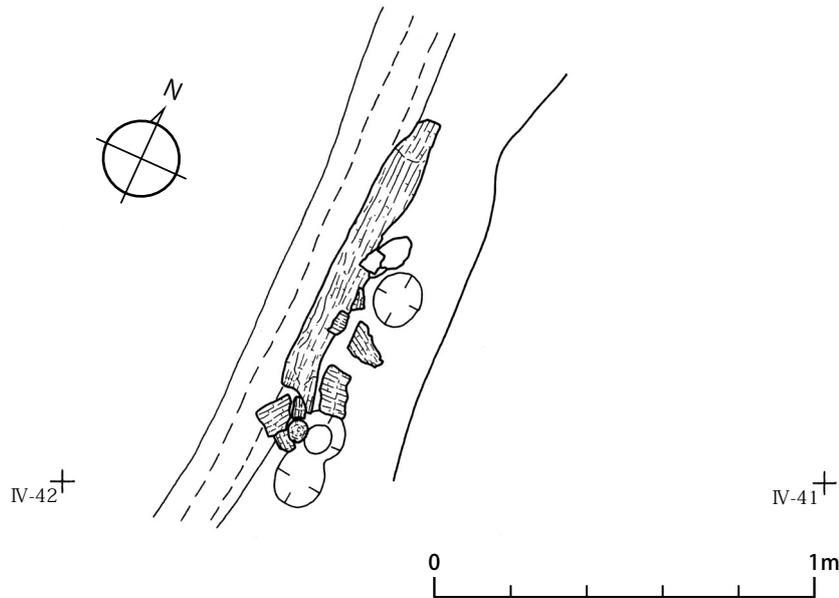


Fig. 13 7号竪穴床面の微細図2 (7b号の西壁際北部・下層)

この空間には周溝の位置に作られた壁を留めるための土が詰められていたと考えられる。住居の長軸方向はほぼ北-南であり、壁の上端での推定長軸は約13.5m、短軸は約9.7m、壁がつくられた位置（壁の下端）での長軸は12.0m、短軸は8.4mである。

柱穴は、長軸方向の両端に大型の深い柱穴が確認された。主柱穴といえよう。北端側の主柱穴では、1基の柱穴のなかに直径10cm前後の丸太材が7本まとめて収められていた。この7本の丸太材は、床面上で確認された際には、外側を樹皮で一括りに取り巻かれたような状態で炭化し、遺存していた（Fig.19、口絵Front1-1、PL.2-1、PL.3-1）。長軸上では他に、貼床の南縁に1基と、長軸上の中央部やや南側に3基（そのうち北側の2基はほぼ重複している）のピットが確認されている。前者は骨塚aの中心部、ヒグマの頭骨の列の下層部分に位置しており、柱穴埋土にも骨が大量に含まれていた。後者の3基については掘り込み面が床面並びにFig.3の炉b'よりもやや下層に確認されている。このような状況から判断するとこれらのピットは少なくとも7a号の廃絶時にはすでに柱穴として機能していなかった可能性が高いが、ほぼ長軸上に位置する点<sup>2)</sup>やその深さからすると、住居廃絶以前のある時期まではこの竪穴の柱穴として機能していた可能性が高い。これらの主柱穴以外にも多数の柱穴が検出されたが、それらの柱穴は壁の周溝内や周溝のすぐ内側、貼床の隅の位置に集中している。後述するように、これらの柱穴は壁を支える構造材やベンチ状遺構に関連するものが多いとみられる。なお、これらの柱穴の中には1つの柱穴のなかに炭化した丸太材が2本単位で遺存しているものもみられた（Fig.6）。

住居の壁の構造に関しても、遺存していた炭化材の様子から一部を復元することができた。7a号竪

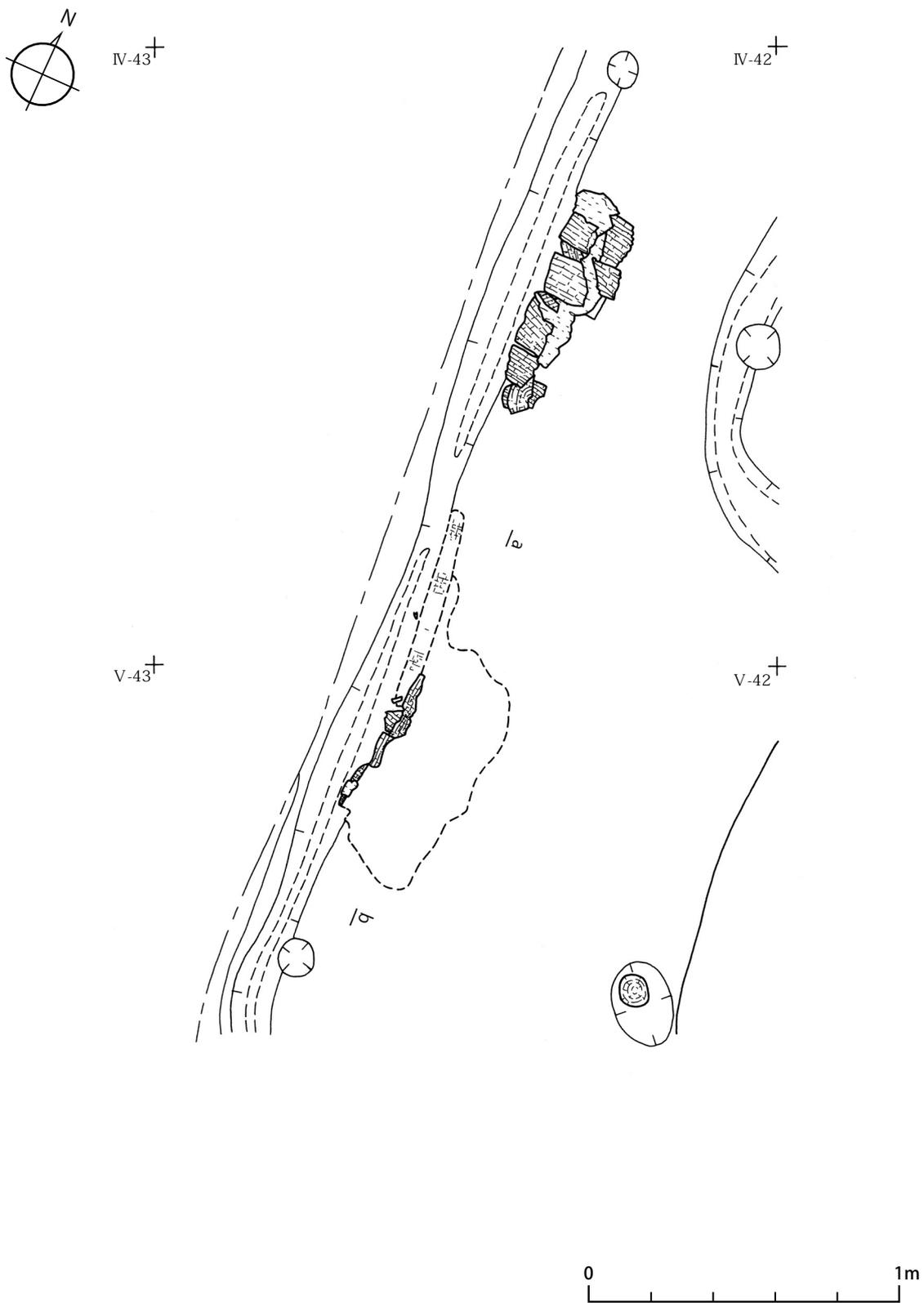


Fig. 14 7号竖穴床面の微細図3 (7a号の西壁際南部)

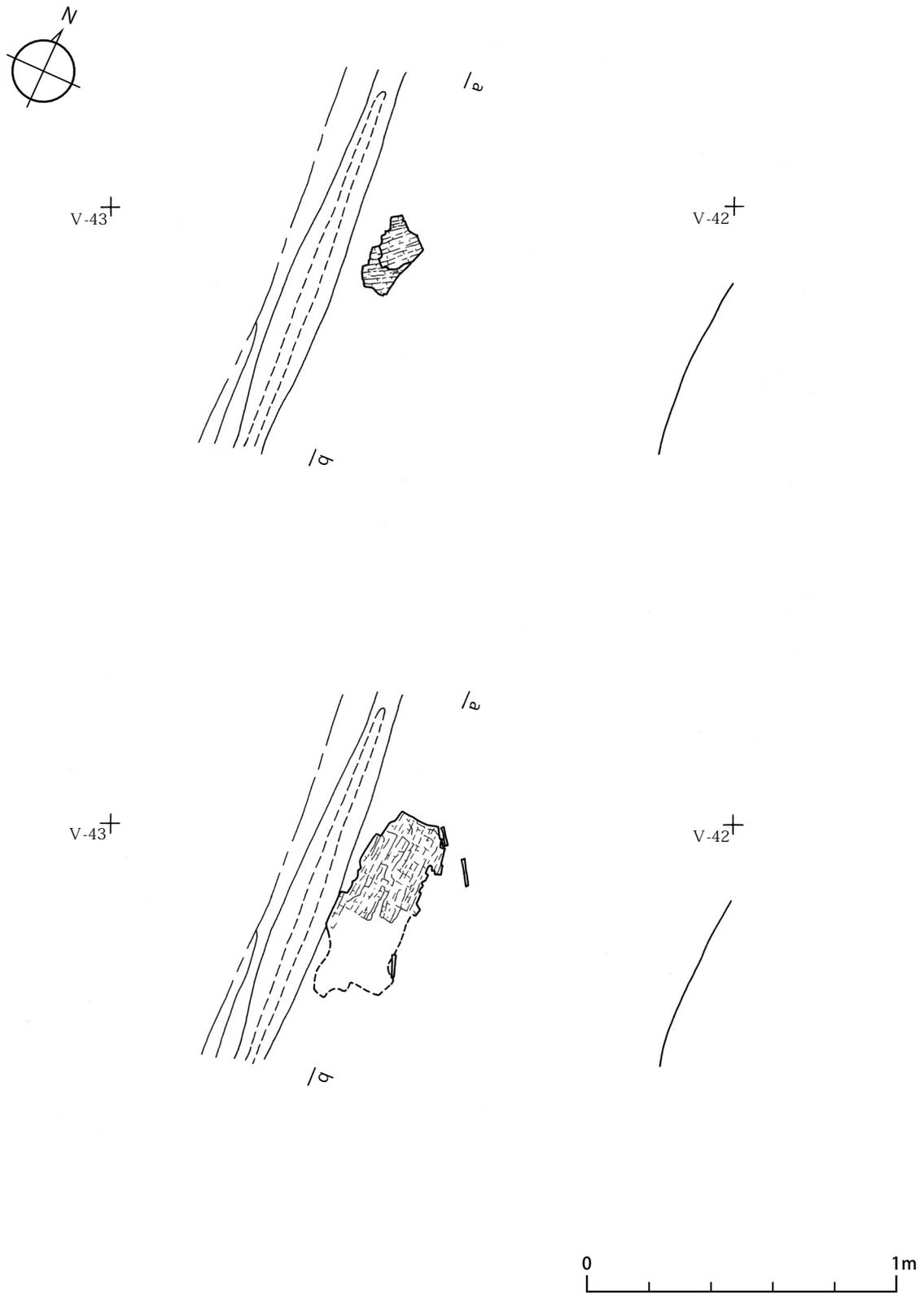


Fig. 15 7号竖穴床面の微細図4（上：7a号の西壁際南部・下層1枚目、下：同2枚目）

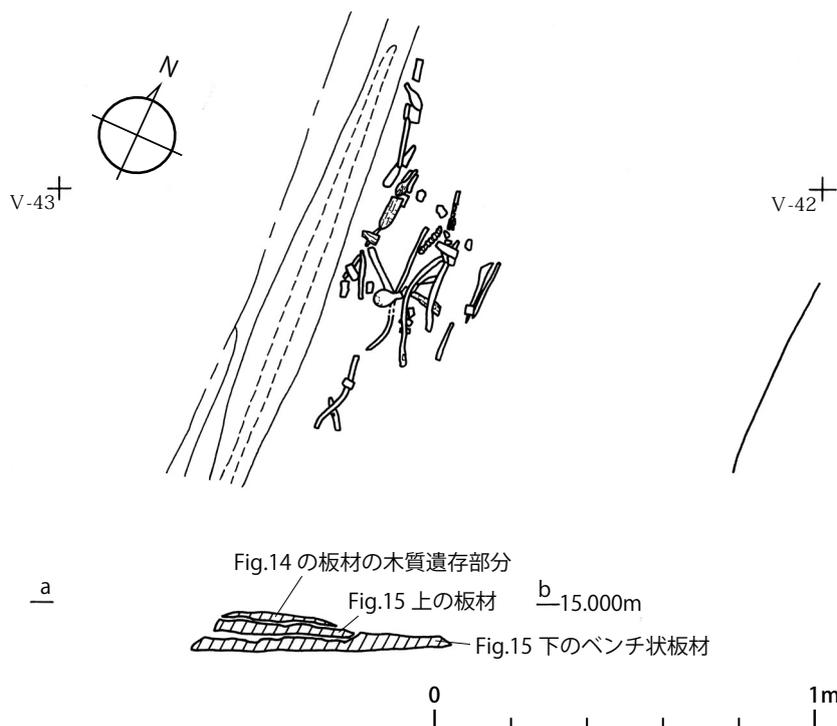
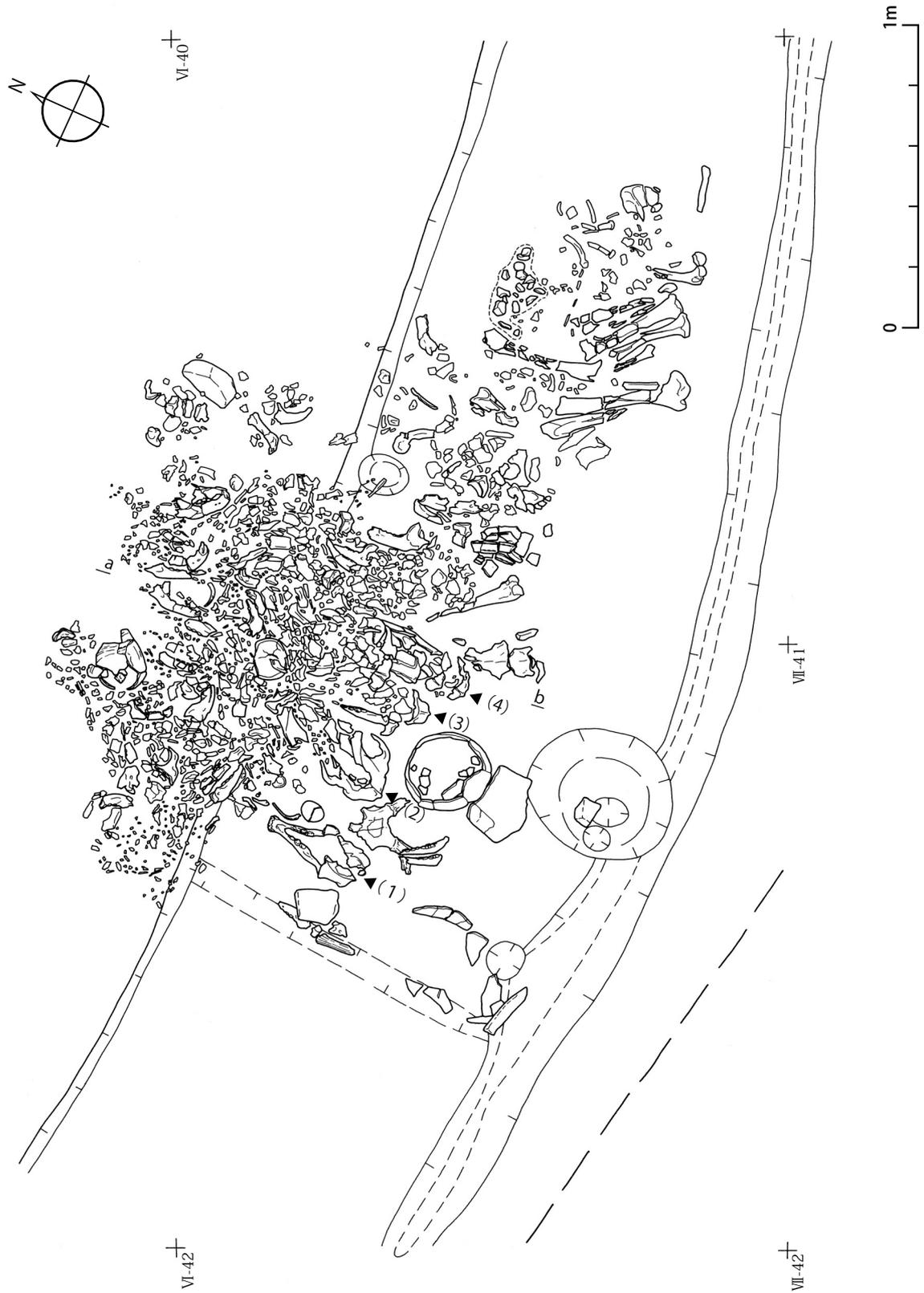


Fig. 16 7号竪穴床面の微細図5 (7a号の西壁際南部・最下層の木製品集中区)

穴の北西壁部分の出土状況 (Fig. 19、PL.2-2) からは、壁際の周溝内に、表面を外側に向けた白樺樹皮を壁の立ち上がり部分 (周溝の外側) に沿って何枚も重ね、さらにその内側に径 8cm ~ 10cm の丸太材を周溝内部に立てて並べて壁としていた様子が観察できた。西壁 (Fig. 12) でも、壁面に樹皮をあて、丸太材の代わりに厚さ 3cm の板材を縦に並べて壁とし、それらの壁を内側から横方向の材と丸太の立柱で押さえている構造が確認できた。さらに西壁の南部 (Fig. 14 ~ 16) では、壁際に床面から数 cm の高さでベンチ状の施設 (Fig. 15 下、PL.4-1) を作り、そのベンチの下に多数の木製品を収納していたような状況 (Fig. 16、PL.4-2) も認められた。

7a号竪穴に伴う貼床は、内側の一部を 7b号の貼床に切られていたが、本来「コ」の字形をしていたとみられる (Fig. 3 の貼床 a、Fig. 7 上)。貼床の粘土は熱を受けて硬化していた。貼床の南側では、角材状の炭化材が貼床の縁に沿った周溝に埋め込まれたような状態で検出された (Fig. 6)。この部分では貼床の縁に木枠のようなものが設けられていたとみられる。

炉は竪穴の長軸上で複数検出された。中央部に石組みの痕跡が残る炉跡 (Fig. 3 の炉 a：図の点線は灰の拡がりを示す) があり、それを挟んで南北に炭化材で囲まれた炉跡 (Fig. 3 の炉 b) が位置している。炉 a 中の灰の上面の標高が炉 b の上面よりも低い位置にあったことと、南側の炉 b の下層には柱穴が存



◀はヒグマ頭骨の列、( )内は確認できたヒグマ頭骨の数

Fig. 17 7号竖穴床面の微細図6 (7a号骨塚a)

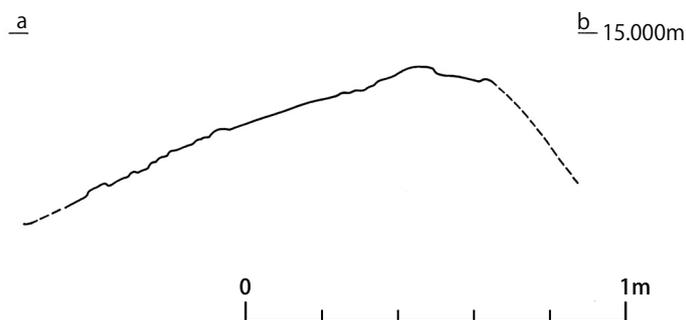
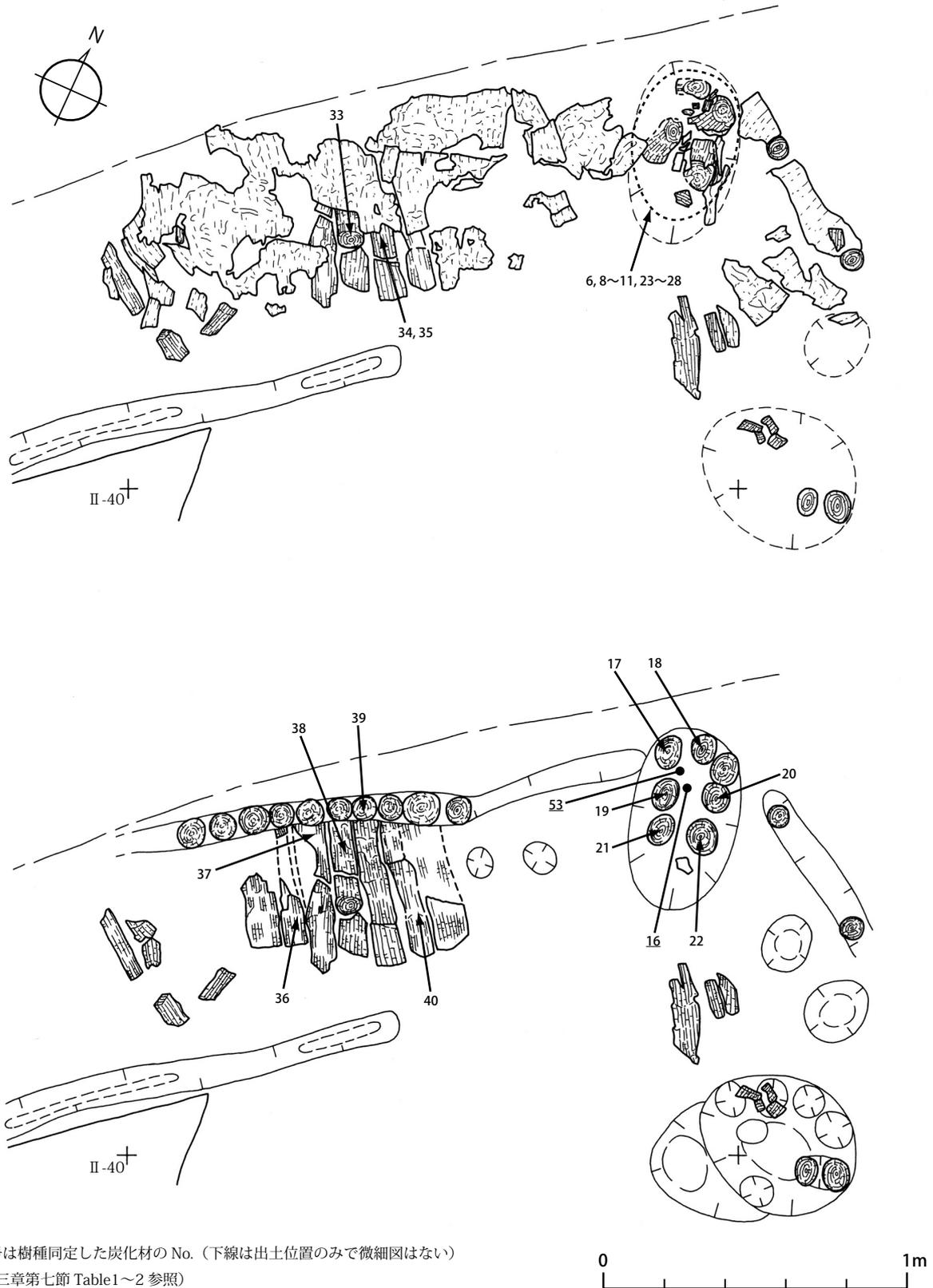


Fig. 18 7a号竪穴骨塚aのエレベーション図

在していたことから、炉aが炉bよりも古いと判断された。確実ではないが、おそらく炉aが7a号の段階、炉bは7b号の段階に対応するとみられる。

7a号竪穴に伴う骨塚（骨塚a）は、竪穴長軸上の奥壁沿いで確認された（Fig.3、Fig.17～18、口絵Front1-2、PL.5-1～2）。骨塚aの堆積の形状は、頂部が奥壁側に寄っていて前面側が緩やかに傾斜する断面形をしており（Fig.18）、堆積が奥壁側に向かって高くなってゆくという、あたかも「祭壇」を思わせるような様相を呈していた。骨塚aの床面も壁際がわずかに高く内部に向かってゆるやかに傾斜しており、床面のうちの長軸ラインを中心とした幅1.8mほどの部分には板材の痕跡が認められた。これは骨塚の下面に板張りが存在していたことを示すが、これも、祭壇のような構造を伺わせるものである。骨塚を構成する動物遺体については第三章第九節で分析がなされているが、ヒグマ・エゾシカ・タヌキ・キツネの頭骨を中心とする大量の陸獣遺体のほか、アザラシ科などの海獣遺体、シマフクロウなどの鳥類遺体、サケ類などの魚類遺体が含まれていた。このうちヒグマの頭骨については、吻部を前方に向けて奥壁側から前面側へと順に頭骨を重ねて配した縦の列が少なくとも4列確認された。このヒグマ頭骨の各列の個体数は、遺存状態が比較的良好であった個体で数えてみると、東側から4個体、3個体、2個体、1個体が確認できた（Fig.17）。これらの個体を含めた骨塚aの全体では、最小個体数で110体分ものヒグマ頭骨が出土している。動物遺体以外の遺物としては、伏せて置かれた大型のオホーツク土器（Fig.25-44）を含む多数の土器（Fig.23～Fig.26）、完形に近い後北C<sub>2</sub>・D式の注口土器（Fig.26-46）、石器（Fig.37）、骨角器（Fig.47～Fig.48）、木製品（Fig.53-23・34、Fig.57-55～57・64）、青銅器（Fig.58-2）などがこの骨塚aから出土している。土器はオホーツク貼付文系土器が主となるが、特に完形土器については貼付文系土器でも型式学的に古手の特徴を有する土器（Fig.25-43・44、Fig.26-45）が目立つ点が注目される。後北C<sub>2</sub>・D式の注口土器については、出土状況からみて偶



番号は樹種同定した炭化材のNo. (下線は出土位置のみで微細図はない)  
(第三章第七節 Table1~2 参照)

Fig. 19 7号竖穴床面の微細図7 (上:7a号の開口部側支柱付近・上層、下:同下層)

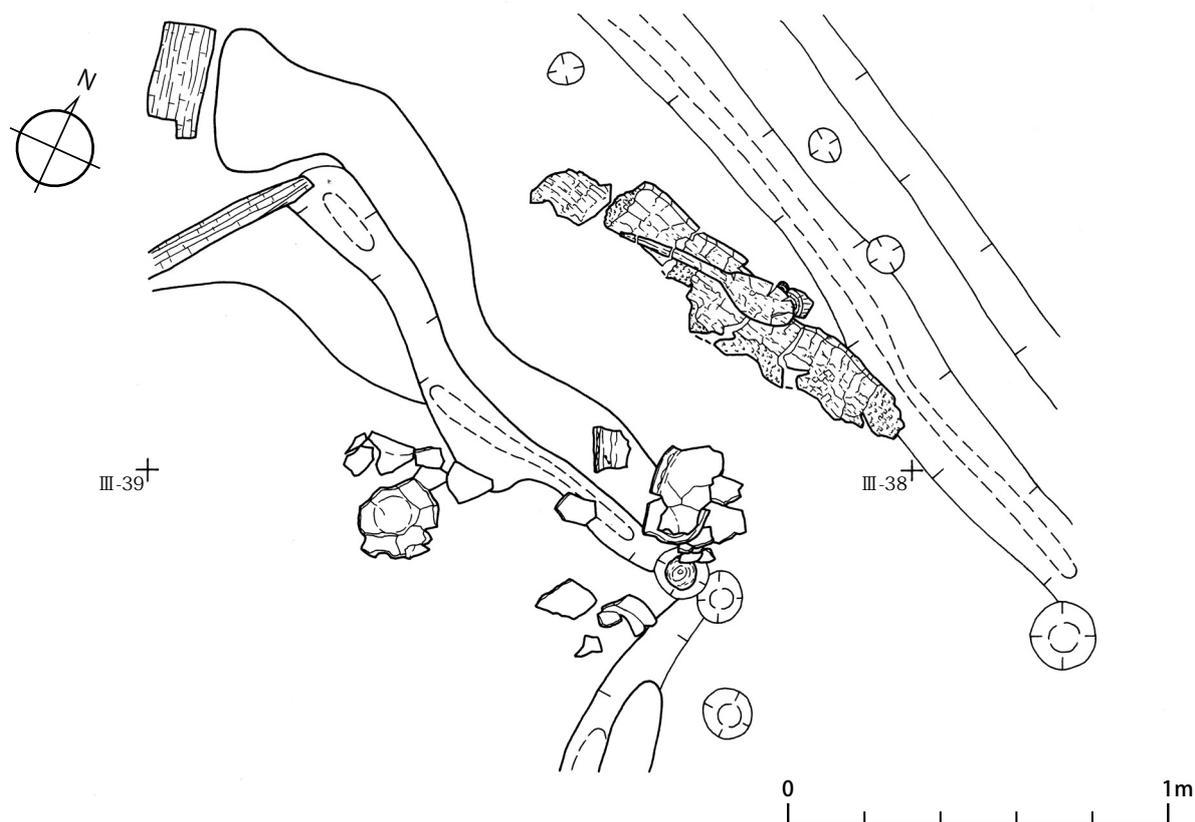


Fig. 20 7号竪穴床面の微細図8 (7b号の開口部壁際東部)

然の混入ではなく、居住者によって意図的に骨塚 a に置かれたものと判断された。

他に骨塚に関する遺構として、骨塚 a の東端より 1.5m ほど離れた竪穴の南東隅の地点でタヌキとキツネの頭骨の集積が確認された (Fig.3 の「タヌキ集積」)。骨塚 a からはやや離れているため Fig.3 では別の遺構として記しているが、骨塚 a と一連のものとも考えられる。この「タヌキ集積」の動物遺体の内容の詳細については第三章第九節を参照されたい。

7a号竪穴の床面からは土器 (Fig.22)、石器 (Fig.36)、骨角器 (Fig.43-1 ~ 7, Fig.46-22)、木製品 (後述の遺物の項参照)、鉄器 (Fig.58-1) などが出土している。主なものについては平面上の位置を記録して取り上げたが、その分布図を Fig.8 ~ 10 に示した。7a号竪穴は 7b号に切られているため、確実に 7a号に伴うと言えるのは 7b号竪穴を除いた部分から出土した遺物のみである。よって 7a号竪穴内の遺物分布の全体傾向を把握するのは難しいが、7a号骨塚からの出土遺物が多い点や、竪穴の南西隅近くの壁際に残されていたベンチ状の施設の下部から出土した木製品のまとまり (Fig.10 の「7a号木製品集中区」) の存在などが注目される。



Fig. 21 7号竖穴床面の微細図9 (7b号骨塚b)

### 2-3 7b 号竪穴

7b 号竪穴は 7a 号の内側に重複してつくられた竪穴住居である。平面プランは 7a 号を南北方向に強く縮小した六角形で、北西側の竪穴の壁は 7a 号よりもわずかに内側、南側（奥壁側）と西側の壁は 7a 号の位置から大幅に縮小されている。長軸方向は 7a 号とほぼ同じであるが、住居の中央を通る中心線の位置は西側の縮小のため 7a 号よりもわずかに東側へと平行移動している。壁の上端ラインは調査時には確認できなかったが、壁の下端（周溝の位置）での長軸は 8.5m、短軸は 7.4m であった。

7b 号の奥壁側の壁に相当する位置では、壁を構築した際の溝とみられる周溝が 2 本確認されているが（Fig.7 下）、これはこの部分の壁が作り直されたことを示しているのであろう。これら 2 本の周溝の切り合い関係は確認できず、炭化材も遺存していなかったため、外側（Fig.7 下の濃い網掛け）・内側（Fig.7 下の「7b' ? の壁」ライン）のどちらが新しいのか確言できないが、後述する支柱穴の位置関係からすると、外側の周溝が古く内側が新しい可能性が高い。

支柱穴は、7b 号竪穴でも長軸方向の両端に大型の深い柱穴が確認された。北端部の支柱穴では、大きな柱穴が 2 基切り合っていた（Fig.7 下の 7b（濃い網掛け）と 7b'（薄い網掛け））。長軸をわずかに東側へとずらして支柱穴を作り直したのであろう。一方、長軸の南端部でもやはり支柱穴とみられる柱穴が 2 基確認されている。切り合っていないため前後関係は確言できないが、北端部の位置関係と対応させて考えると、外側で東よりのもの（Fig.7 下の濃い網掛け）が古く、内側で西よりのもの（Fig.7 下の薄い網掛け（7b'））が新しい可能性が高い。この解釈が正しいとすれば、前述した 2 本の周溝の前後関係もこの柱穴に対応し、外側（7b）が古く内側（7b'）が新しくなると考えられよう。

北端部の新しい方の柱穴（7b'）の内部では、炭化した 2 本の丸太材に加えて 6 本の細い柱穴が残されている様子が確認された（Fig.19 下）。おそらく、7a 号の北端部の支柱穴とほぼ同様の構造が採用されていたのであろう。これらの支柱穴以外にも多数の柱穴が検出されたが、それらの柱穴は 7a 号と同様に、壁の周溝内や周溝のすぐ内側に集中している。やはりこれらの柱穴は壁を支える構造材やベンチ状遺構に関連するものが多いと考えられよう。

住居の壁の構造に関しても、西壁の一部で壁を構成していたとみられる炭化材が遺存しており（Fig.12、PL.6-1）、7a 号の壁と同様に、樹皮と縦方向の板材で作られた壁の内側を横方向の材で押さえている様子が確認された。

貼床は、貼床 a を切って再構築された貼床 b が、7b 号竪穴の貼床となる。貼床 b は「ニ」の字形をしており、貼床の周囲には周溝がめぐらされ、その周溝の一部には角材状の炭化材が部分的に認められた。貼床 a 同様、貼床 b の縁も木枠のようなもので囲まれていたと考えられる。また「ニ」の字形の貼床のうちの東側では、一部分の表面がわずかだが削られており、結果的に残りの部分（Fig.7 下の「7b' ? の貼床」（薄い網掛け））がわずかに高くなっている様子が確認された。おそらく、貼床 b から貼床 b' へという改変が行われたのであろう。この貼床の改変は、前述した支柱穴（すなわち長軸）の東側への移動と位置的に整合しているため、支柱穴や南壁の変更に伴って行われた可能性が高いといえよう。

炉は前述のように長軸上に 3 基が確認されたが、7b 号竪穴に伴う可能性が高いのは中央部の 1 基を

除いた南北端の2基 (Fig.7 下の炉 b) である。この2基の炉 b は平面形がいずれも長方形で、周囲の一部には炭化材が遺存しており、どちらもおそらく長方形の木枠に囲まれていたと思われる。また、炉 b のうちの北側は中央部にも木枠の痕跡が認められた。これらの木枠に関しては、石組みが確認された炉 a とは異なる特徴であり注目される。この南北2基の炉 b については、同時に利用された、あるいは片方が利用された後に前述した 7b 号から 7b' 号への住居の改変に伴うなどしてもう片方へと移動した、等々の利用状況が考えられるが、調査の際にはこれら2基の炉の時間的な関係を示す情報は得られなかった。

炉に関しては、貼床 c の北西隣にも炉状の遺構 (灰の集中) が検出された (Fig.3)。これも 7b 号竪穴に伴うものであろう。

骨塚は貼床 b と南壁の間の空間で確認された (Fig.3 の骨塚 b、PL.8-1) が、骨塚 a とは異なり、骨塚下面に祭壇状の構造は確認できなかった。骨塚全体の規模も骨塚 a よりは遙かに小さく、ヒグマの頭骨が配列された様子も認められなかった。骨塚を構成する動物遺体については第三章第九節で分析がなされているが、タヌキが主体で他にヒグマ、キツネ、テン、カワウソ等の陸獣類が出土し、また海獣類と鳥類がわずかに含まれていた。動物遺体以外の骨塚 b 出土遺物としては、オホーツク土器 (Fig.31・Fig.32)、石器 (Fig.40)、木製品 (Fig.57-58・67)、骨角器 (Fig.49) が出土している。

7b 号竪穴の床面からも土器 (Fig.27～Fig.30)、石器 (Fig.38・Fig.39)、骨角器 (Fig.43-8～10、Fig.45-19～21)、木製品 (後述の遺物の項参照)、鉄器 (Fig.58-1) などが出土している。平面上の位置を記録して取り上げた遺物について、分布図を示したのが Fig.8～10 である。骨塚 b や南西隅・南東隅を含む奥壁側、炉 b の周辺での出土がやや目立つ。他に、北東部の壁際では Fig.56-48 の大型槽の上に Fig.56-49 の大型の杓子が載って出土するなど、木製品がまとまって出土した (Fig.10 の「7b 号木製品集中区」、PL.6-2)。なお土器については、Fig.8 に示したように 7a 号と 7b 号のそれぞれ床面から出土した資料どうしが接合した例がある (20・21・38・87)。竪穴住居の廃絶後に床面の一部が攪乱を受けたことが原因である可能性も考えられるが、前述の盗掘坑以外に攪乱の痕跡は確認されていないので、20・21・38 については 7a 号の時期に使用されていたものが 7b 号の床面に混入した結果と解釈しておきたい。87 については多くの部分が 7b 号の位置から出土したため 7b 号の時期と判断したが、上記のように 7a 号の時期である可能性もある。

(熊本俊朗)

### 3 遺物

#### 3-1 土器

文様を有するオホーツク土器については第二章第五節に属性表を掲載したので、文様の詳細ならびに破片同士の接合関係についてはそちらを参照されたい。

##### ① 7a 号床面出土 (Fig.22)

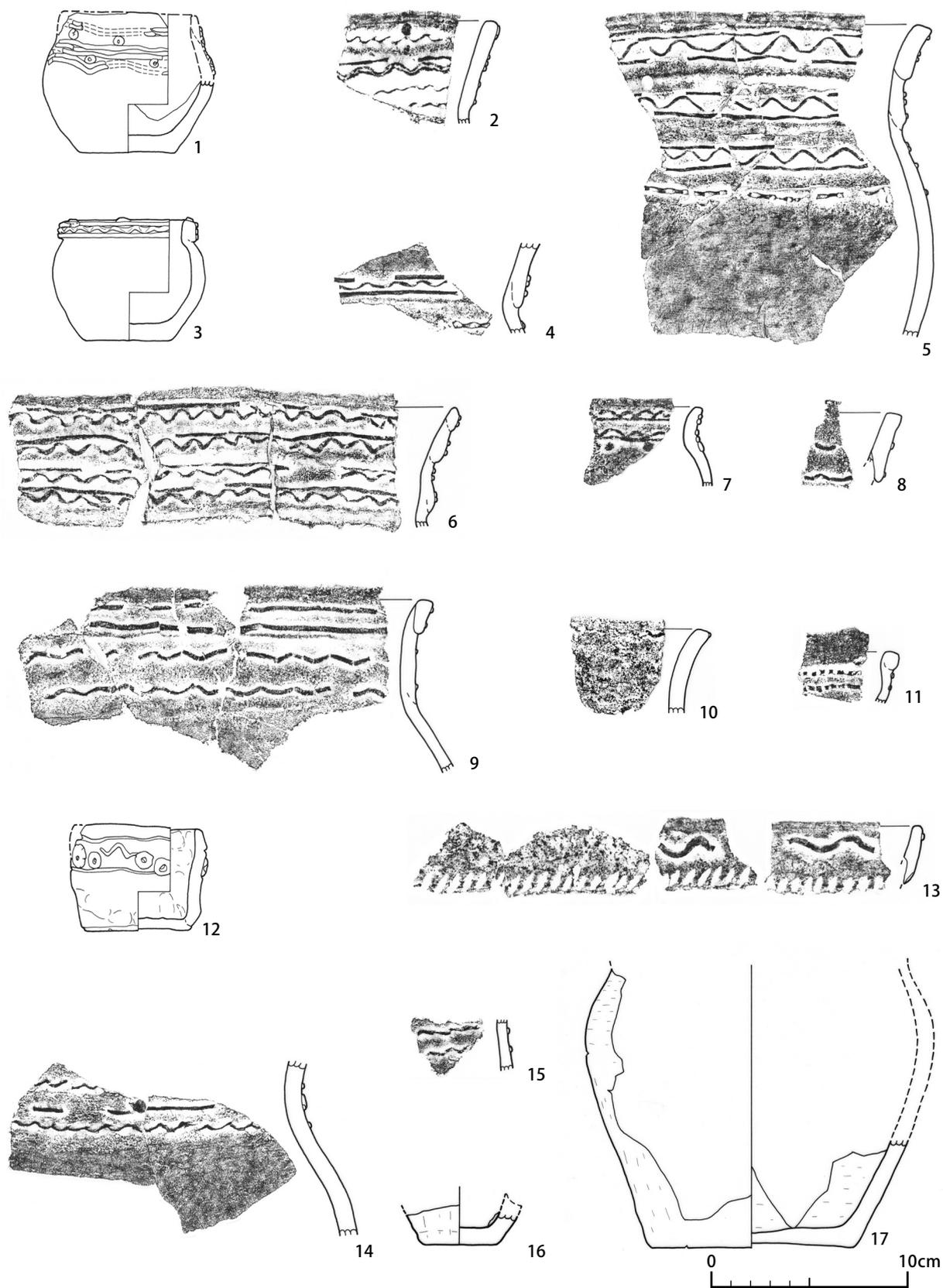


Fig. 22 7a号竖穴床面出土の土器

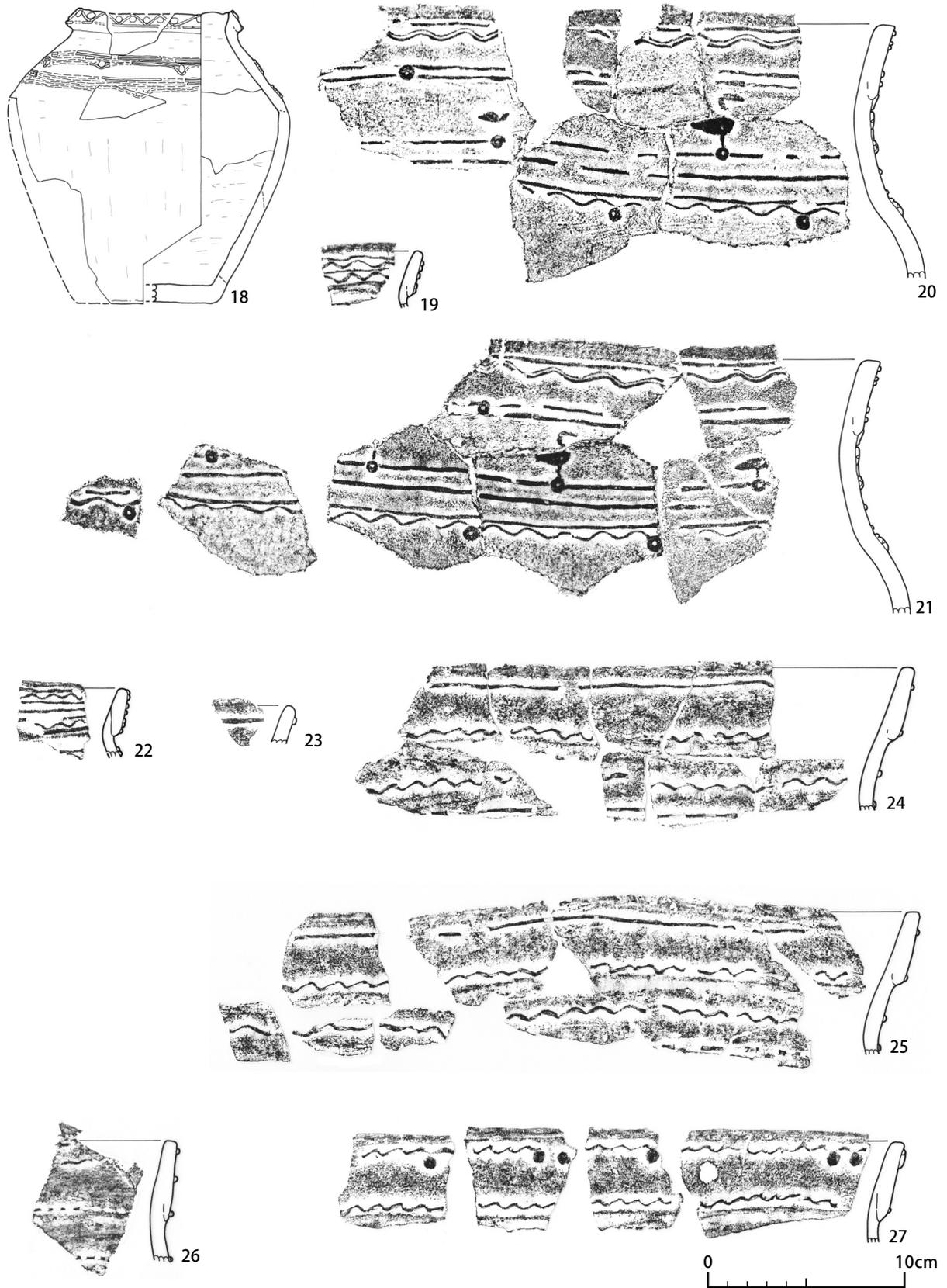


Fig. 23 7a号竖穴骨塚a出土の土器 I

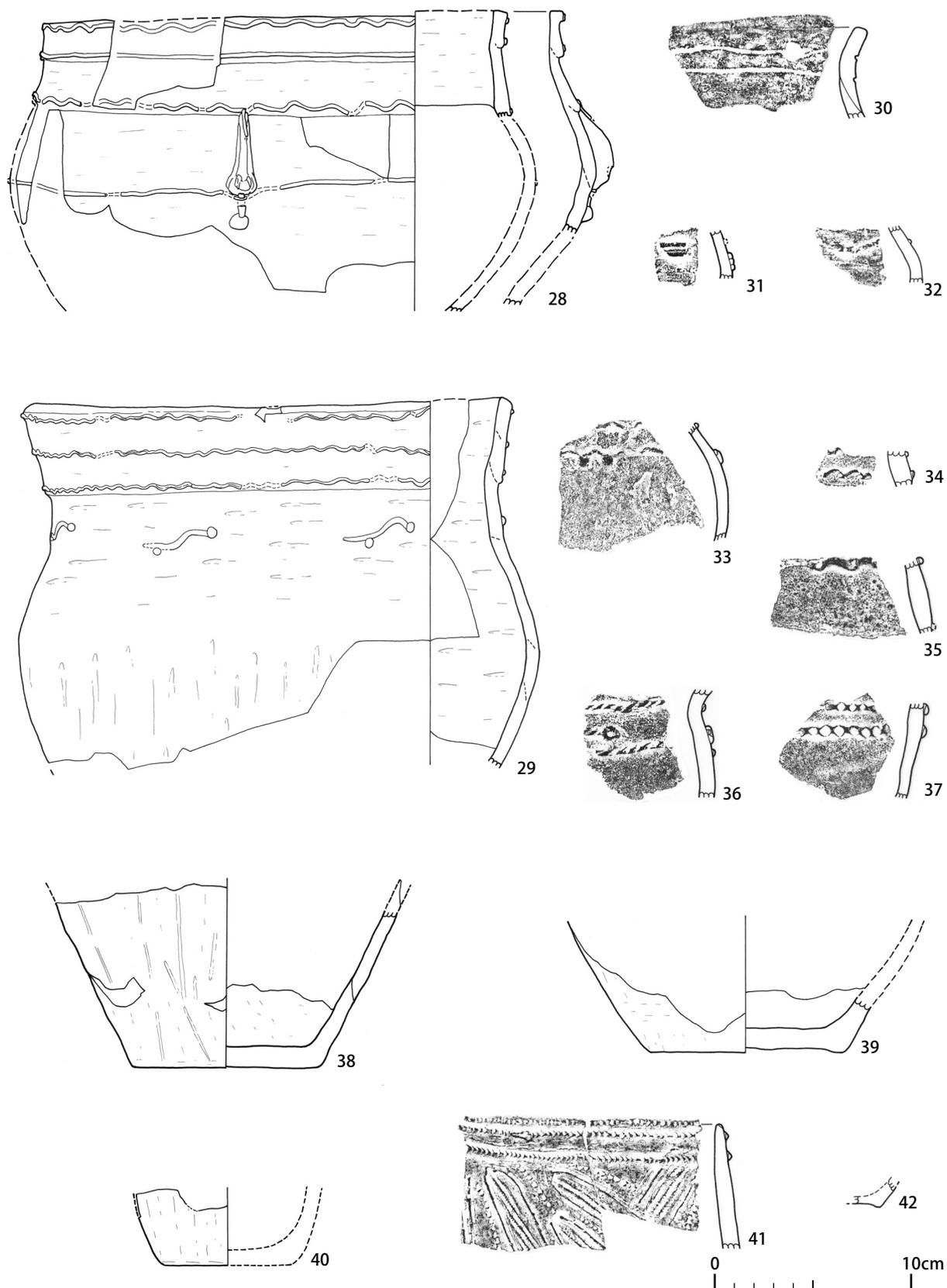


Fig. 24 7a号竖穴骨塚a出土の土器2

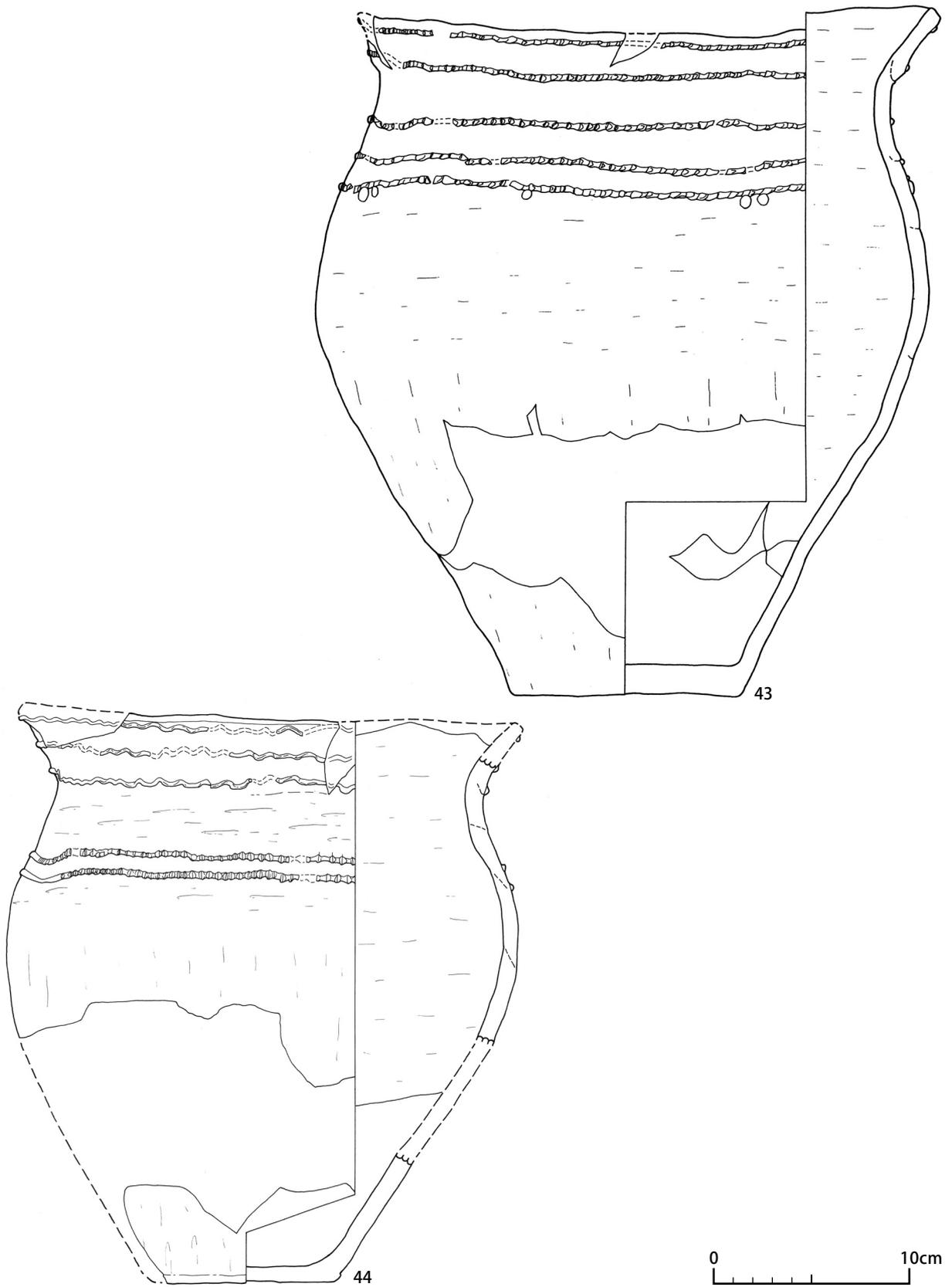


Fig. 25 7a号竖穴骨塚a出土の土器3



Fig. 26 7a号竖穴骨塚a出土の土器4

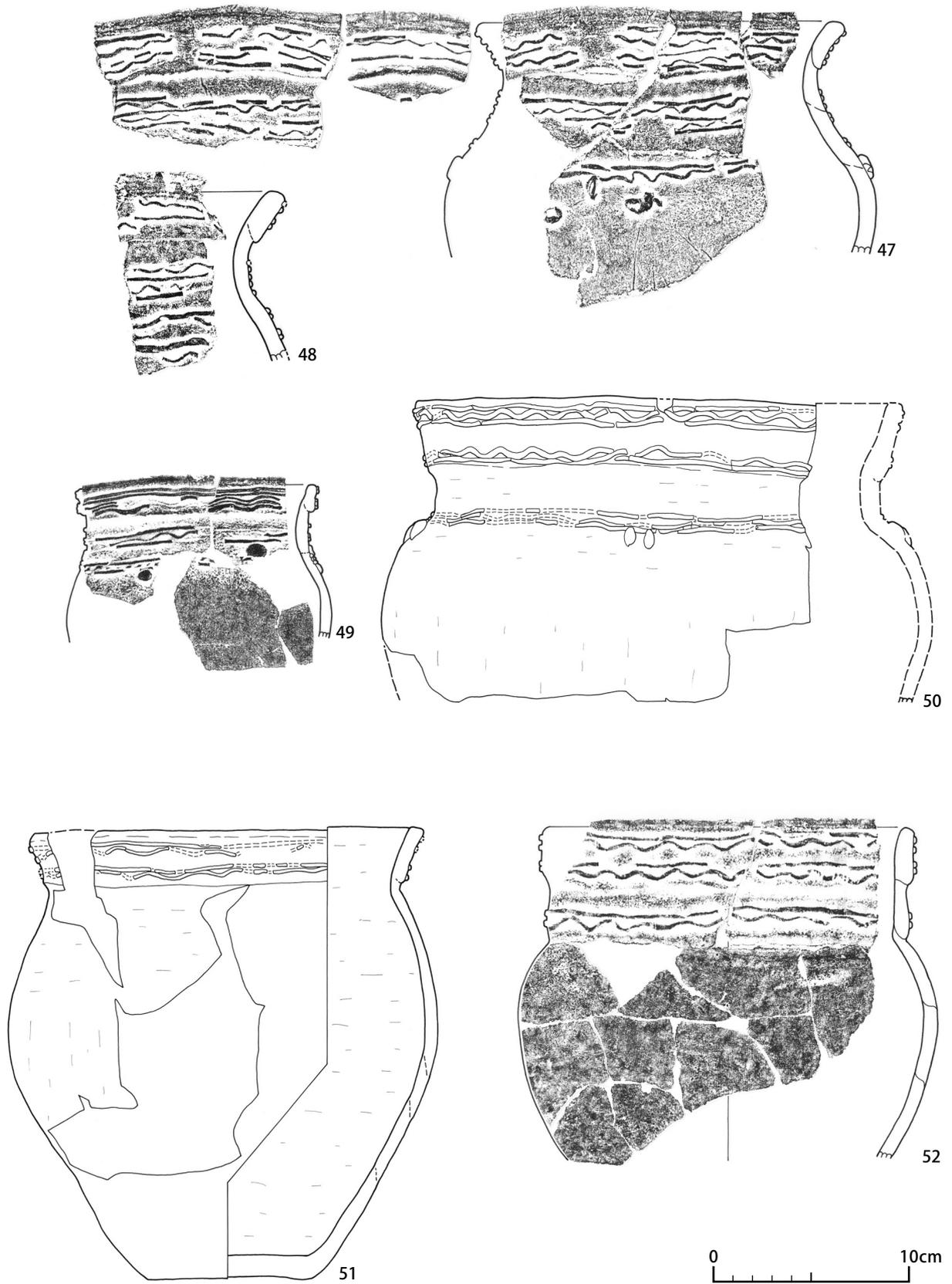


Fig. 27 7b号竖穴床面出土の土器1

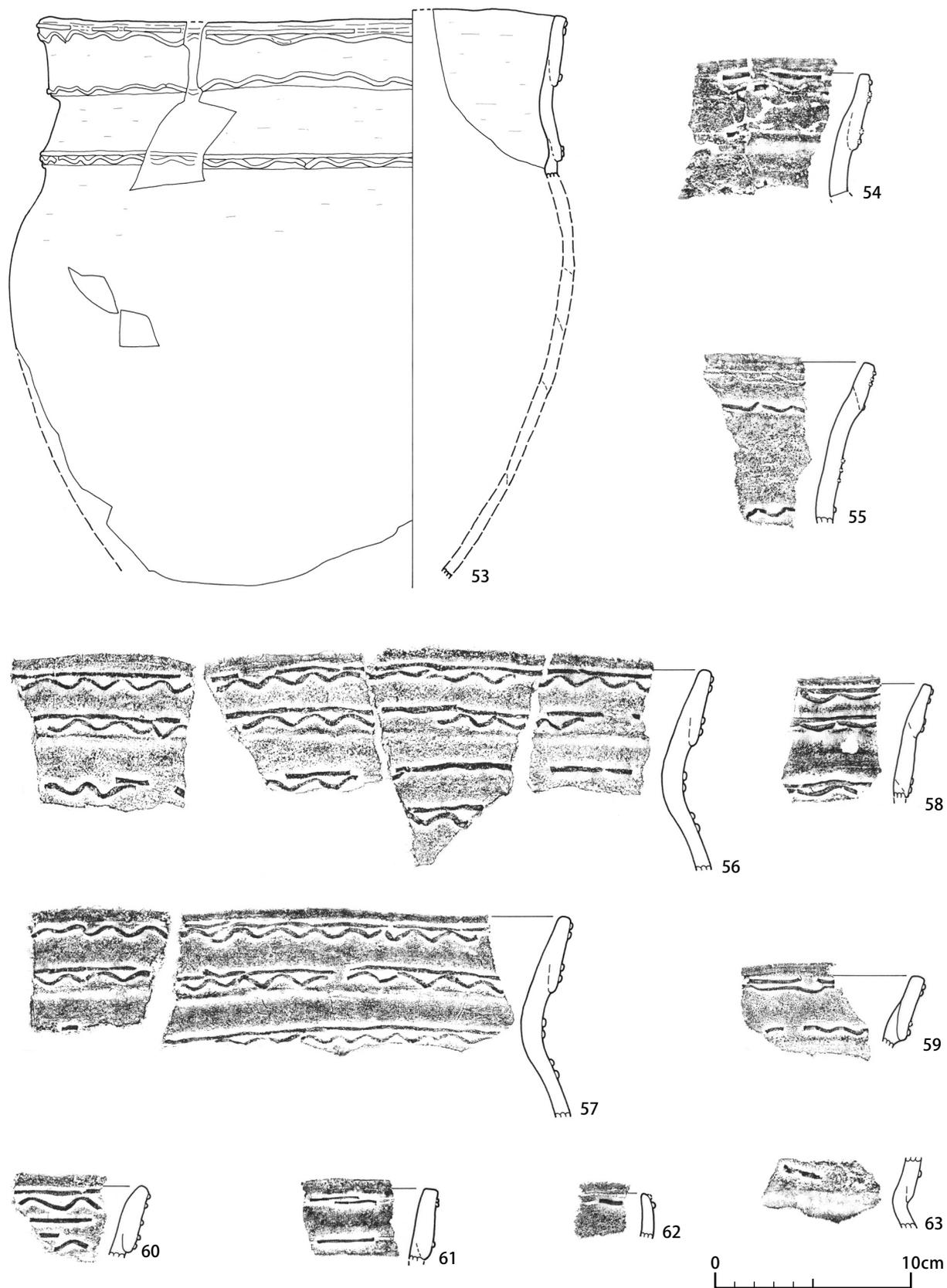


Fig. 28 7b号竖穴床面出土の土器2



Fig. 29 7b号竖穴床面出土の土器3

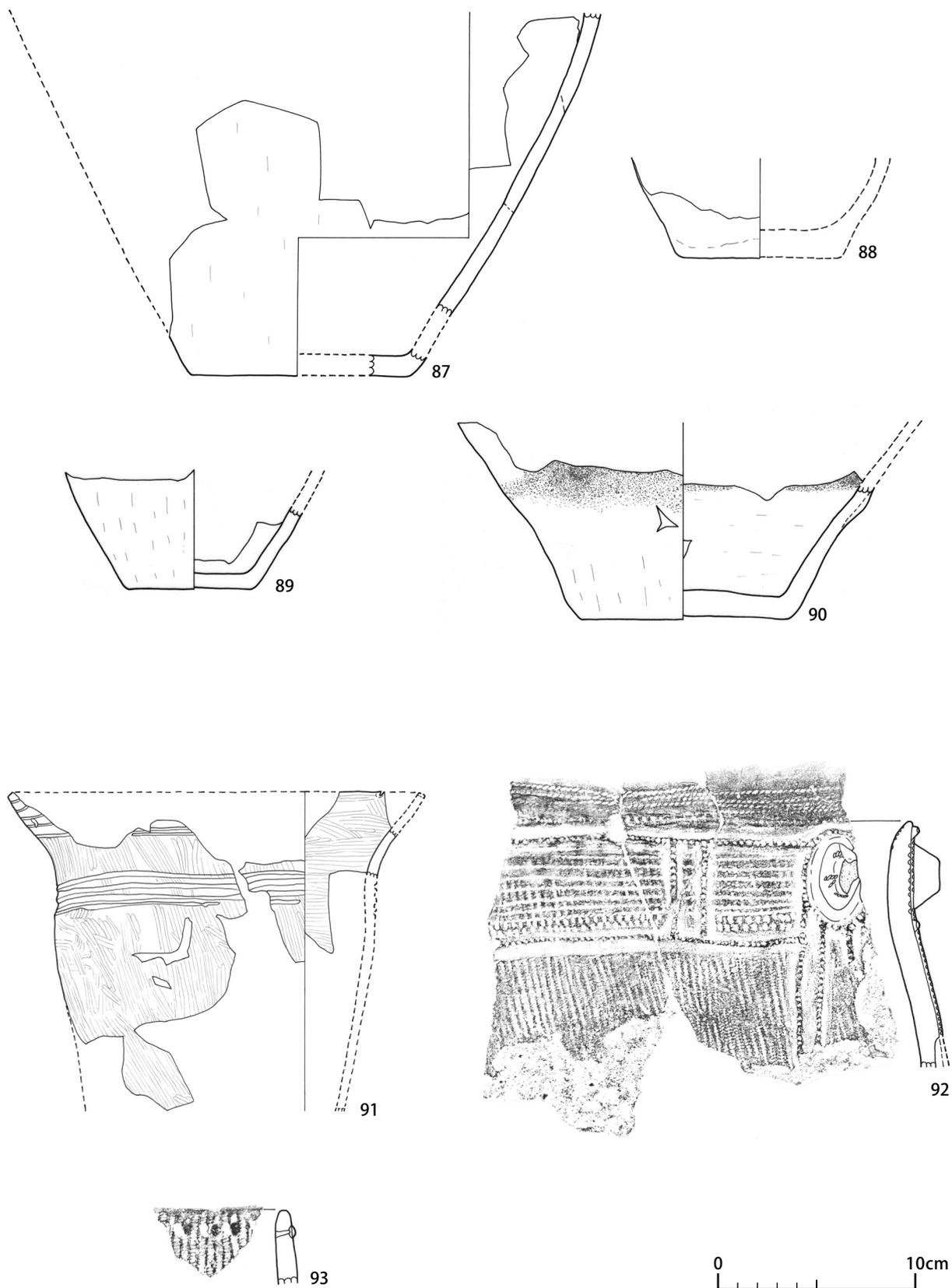


Fig. 30 7b号竖穴床面出土の土器4

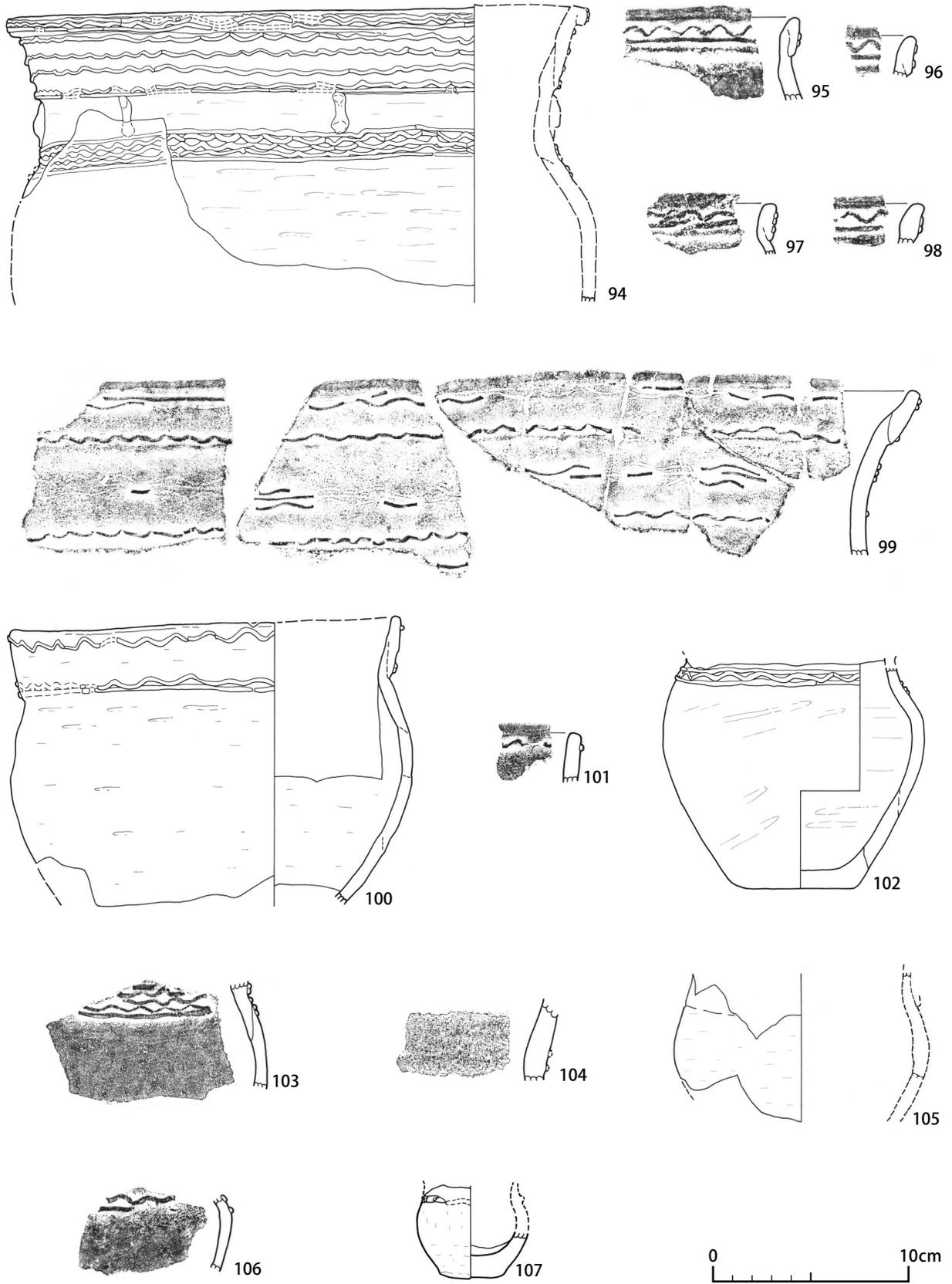


Fig. 31 7b号竖穴骨塚b出土の土器1

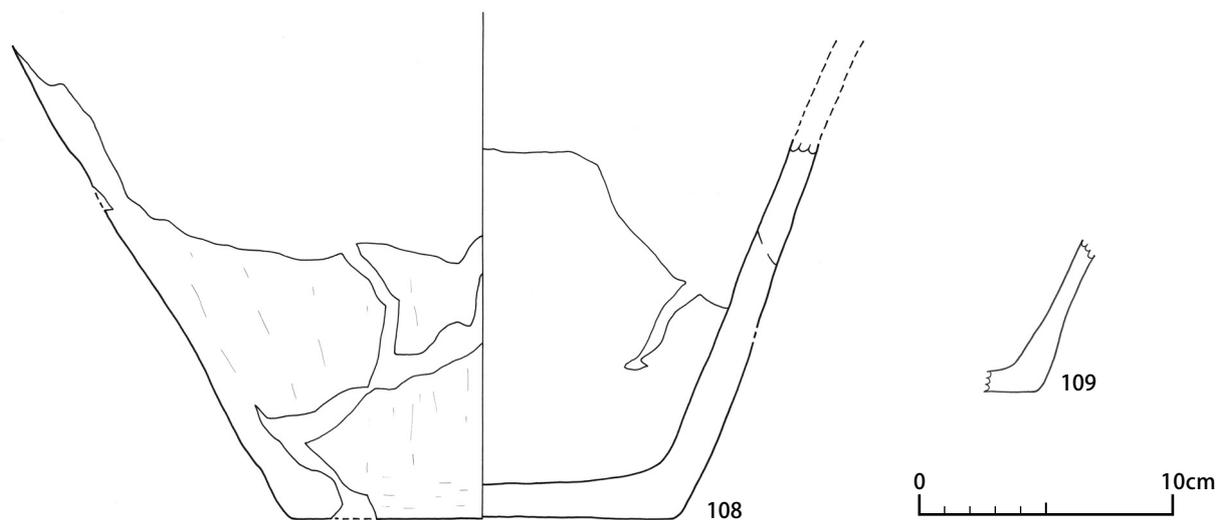


Fig. 32 7b号竪穴骨塚b出土の土器2

1～17はオホーツク土器。1～11・13～15は貼付文系の文様、12は沈線文系と貼付文系の両方の文様を有する土器で、16・17は底部破片である。

1～5は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む完形土器及び口縁部破片である。6・7は文様に2本1単位の貼付文を含む口縁部破片で、8～11は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。12は沈線文とボタン状貼付文が施された土器で、13は口縁部肥厚帯上に1本単独の貼付文と、肥厚帯下縁に刻文が施された口縁部破片である。14・15は胴部破片で、いずれも一本単独の貼付文が確認できる。17の底部破片はⅢ層出土の破片を含んでいる。

### ② 7a号骨塚a出土 (Fig.23～Fig.26)

18～40・43～45はオホーツク土器。30は沈線文系の文様を有する土器、38・39・40は底部破片で、それ以外は全て貼付文系の文様を有する。44は骨塚aの奥壁側、床面の上に伏せて置かれた状態で出土した。

1～22は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む完形土器及び口縁部破片である。23～29・43～45は文様が1本単独の貼付文で構成される完形土器および口縁部破片である。28には人の鼻を模した貼付文が添付されている。30は2条の沈線文が施された口縁部破片。38の底部破片は7b号床面出土の破片を含んでいるが、骨塚a出土破片が主体となるためここに含めた。

41～42・46は続縄文土器。46については出土状況からみて偶然の混入ではなく、居住者によって意図的に骨塚aに置かれたものと判断された。41は後北C<sub>2</sub>・D式土器で、7a号床面出土の破片と接合している。42は縄文晩期末～続縄文前半期とみられる底部破片。46は後北C<sub>2</sub>・D式の注口土器である。

### ③ 7b号床面出土 (Fig.27～Fig.30)

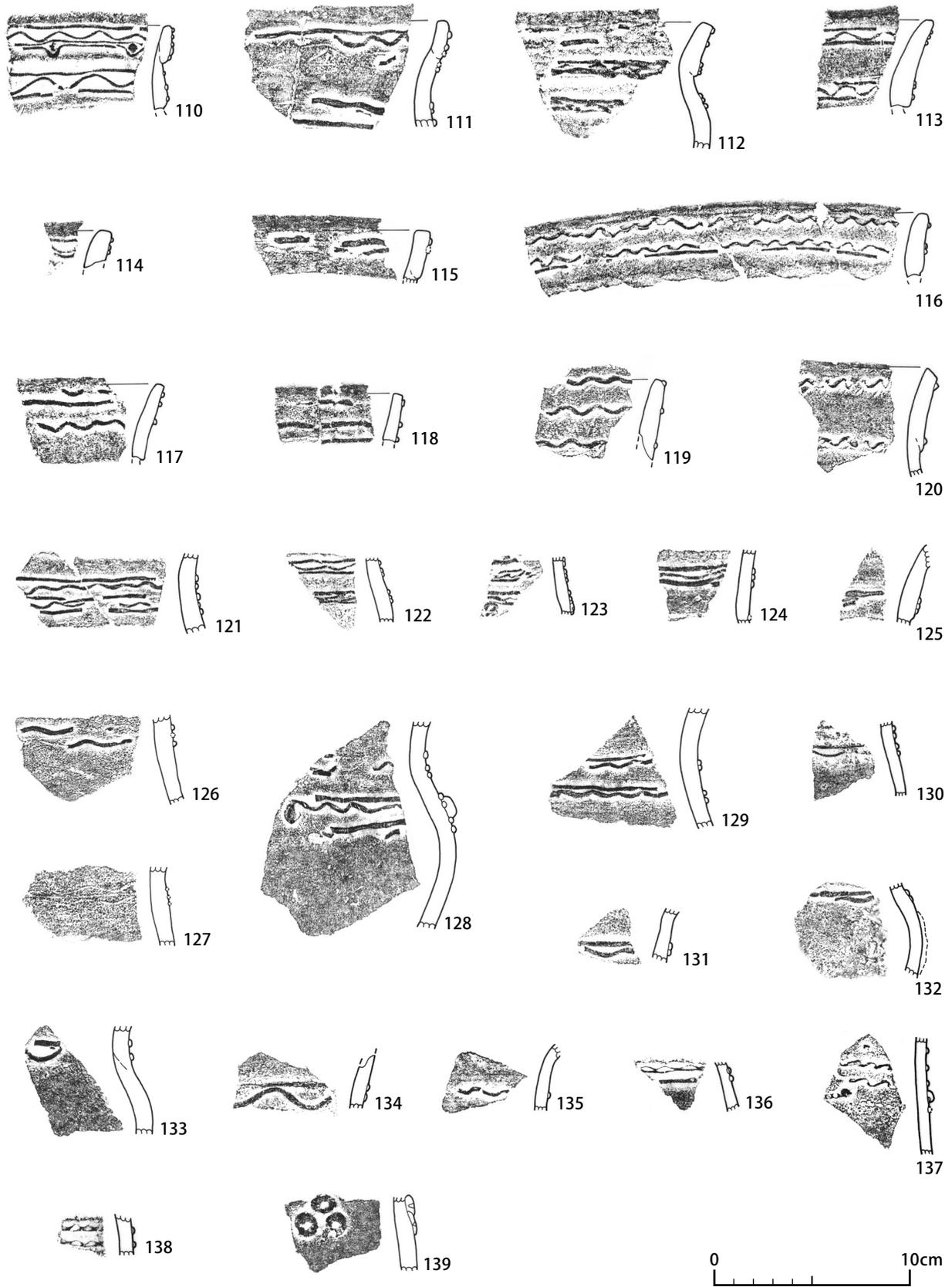


Fig. 33 7号竖穴床面出土の土器 1

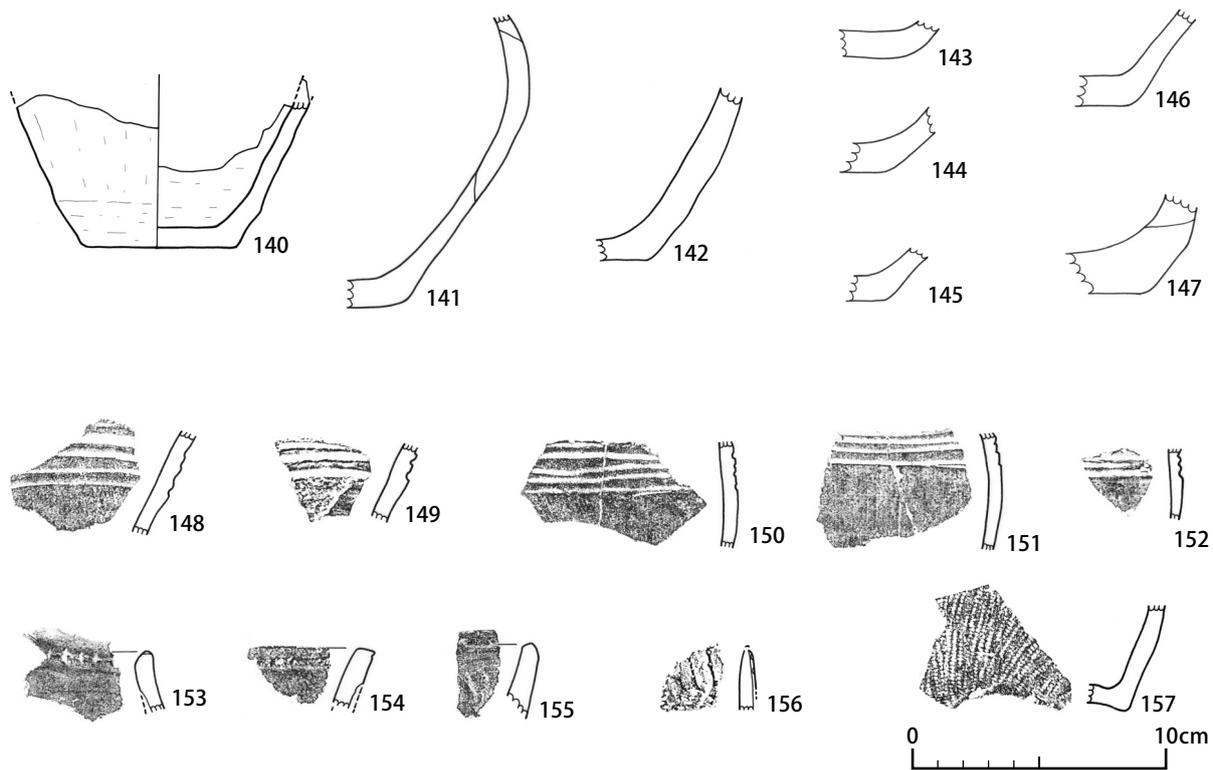


Fig. 34 7号竖穴床面出土の土器 2

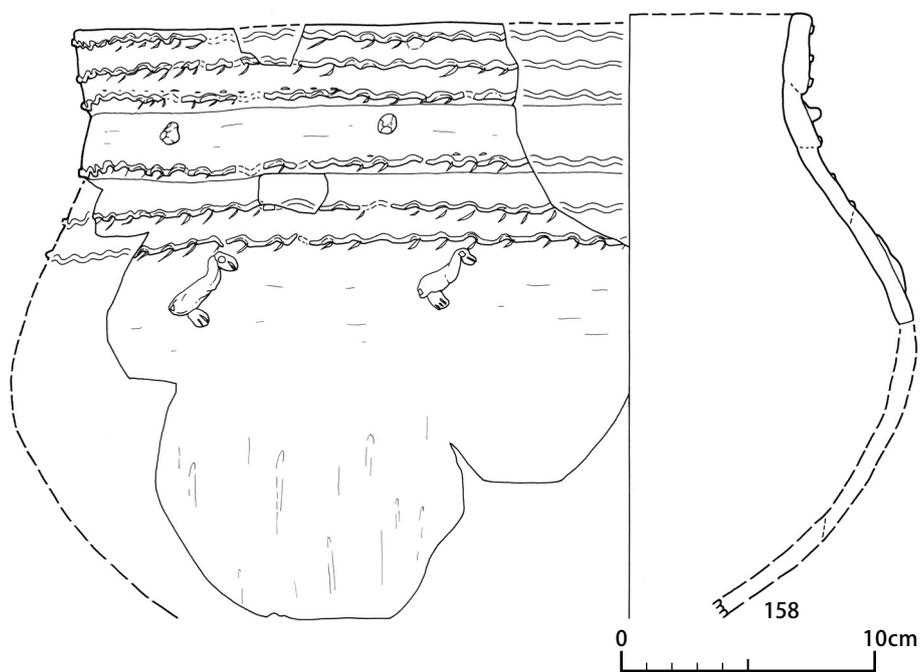


Fig. 35 7号竖穴埋土出土の土器

47～90はオホーツク土器。70は無文とみられるが詳細不明、71は刻文系の文様を有する土器、82～90は底部破片であり、それ以外は全て貼付文系の文様を有する。

47～50・54～55は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む口縁部破片である。51～53・56～66は文様に2本1単位の貼付文を含む完形土器及び口縁部破片。67～69は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。70は無文とみられるが欠損部分が多く詳細不明の口縁部破片。71は口縁部の突帯上に太い刻文が刻まれている。72～81は胴部破片で、そのうち72～76は文様に3本以上を1単位とする貼付文、77・78は2本1単位の貼付文、79・80は1本単独の貼付文、81は粒状の貼付文をそれぞれ含んでいる。87の底部破片は前述のとおり7a号床面およびIV層出土の破片を含んでいる。90の底部破片はIV層出土の破片を含んでおり、熱を受けて内面と外面が発泡している。

91は擦文土器で、IV層出土の破片が含まれている。口縁部には5条、頸部の下端には4条の沈線文を巡らせている。口唇部には4ヶ1単位の刻み目が間隔を置いて施されている。

92～93は続縄文土器で、92は宇津内Ⅱb式土器、93は宇津内Ⅱa式土器である。

#### ④ 7b号骨塚b出土 (Fig.31～Fig.32)

94～109は全てオホーツク土器。105は口縁部が欠損していて有文か否か不明である。108・109は底部破片。それ以外は全て貼付文系の文様を有する。

94・99は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む口縁部破片である。95～98・100は文様に2本1単位の貼付文を含む完形土器及び口縁部破片。101は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。102～107は胴部以下の破片で、102・103は文様に3本以上を1単位とする貼付文、104・106は2本1単位の貼付文、107は1本単独の貼付文をそれぞれ含んでいる。108の底部破片は7号床面(7a号・7b号のいずれか不明)の破片を含んでいる。

#### ⑤ その他7号床面出土 (Fig.33～Fig.34)

7号竪穴の床面から出土した土器であるが、調査の初期に一括で取り上げた等の理由で平面座標の詳細な記録がなく、7a号・7b号のどちらに属するかが判別できない資料をまとめた。

110～147はオホーツク土器。110～139は全て貼付文系の文様を有する。140～147は底部破片。

110～114は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む口縁部破片である。115・116は文様に2本1単位の貼付文を含む口縁部破片。117～120は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。121～139は胴部破片で、121～127は文様に3本以上を1単位とする貼付文、128～134は2本1単位の貼付文、135～138は1本単独の貼付文、139は粒状の貼付文をそれぞれ含んでいる。147の底部破片はIV層出土の破片を含んでいる。

148～152は擦文土器。148・149は口縁部、150～152は頸部下端の破片で、それぞれ数条の沈線文が巡らされている。150はIV層出土の破片を、151はⅢ層出土の破片をそれぞれ含んでいる。

153～157は続縄文土器。153は後北C<sub>2</sub>・D式土器で、口唇部の外縁に刻み目を有する。154・155も後北C<sub>2</sub>・D式土器とみられるが細片のためはっきりしない。156は宇津内式土器で、貼付文が付されている。157は縄文晩期末～続縄文前半期とみられる底部破片である。

⑥ 7号竪穴埋土出土 (Fig.35)

158はオホーツク土器である。IV層出土の破片を主体としていることから埋土出土として扱っているが、他にIII層出土の破片と骨塚b出土の破片を含んでおり、骨塚bに伴っていた可能性もある。文様は1本単独の貼付文で構成されており、胴部文様の下端には動物とみられる意匠の貼付文が付されている。動物意匠には目と太い嘴・水かきのある足が表現されているように見えるが、その姿はエトピリカを思わせる。

(熊木俊朗)

3-2 石器

① 7a号床面出土 (Fig.36)

出土位置を記録した遺物(点取り遺物)は、石鏃4点、両面加工尖頭器1点、有孔円板1点、剥片1点の計7点である。

石鏃 (Fig.36-1～4)

すべて黒曜石製であるが、1・4は被熱による表面変化や変形が著しい。また、2はいわゆる梨肌の黒曜石である。いずれも有茎の形態で、1～3は五角形に近い身部を持ち、2は胴部が内反、3は胴部が平行する。4は、被熱によって基端が変形・折損しているため定かでないが、両頭様の形態をなすものかもしれない。

両面加工尖頭器 (Fig.36-5)

5は黒曜石製で、下半の基部が区分される形態を持つ石銛である。

石製品 (Fig.36-6)

6は径5mmの孔を持つ砂岩製の有孔円板であり、正面上部にV字形の文様が3つ刻まれている。7号竪穴の他の有孔円板と比較して側面が丸みを帯びる。

② 7a号骨塚a出土 (Fig.37)

点取り遺物は、石鏃12点、両面加工尖頭器2点、石製ナイフ・スクレイパー3点、石錘1点、剥片29点の計47点である。石鏃には特殊な磨製石鏃1点が含まれる。

石鏃 (Fig.37-7～17)

流紋岩の9、頁岩の17以外は黒曜石製であるが、8・14は被熱による表面変化が著しい。また、7・12は梨肌の石質であり、15は暗赤褐色、16は暗紫色の部分を含む黒曜石である。

長さ2.5cm～5cm、厚さ3mm～6mmで、五角形に近い身部を持つ有茎の形態が基本となるが、大形・長身のもの(10～14)で胴部が平行する傾向が強い。

15は細かな二次加工で整形されたやや幅広の石鏃の破損品である。16は五角形凹基の石鏃であるが、もともとはFig.36-4のような形状だった可能性がある。17は頁岩製であるが、骨鏃のような質感を呈する磨製石鏃である。正面中央の凹み以外の両面に左上～右下方向を基本とする研磨が施され、薄身(3mm)に仕上げられている。尖端以外は幅1mm程度の僅かな側面が形成されているため鋭利な縁辺

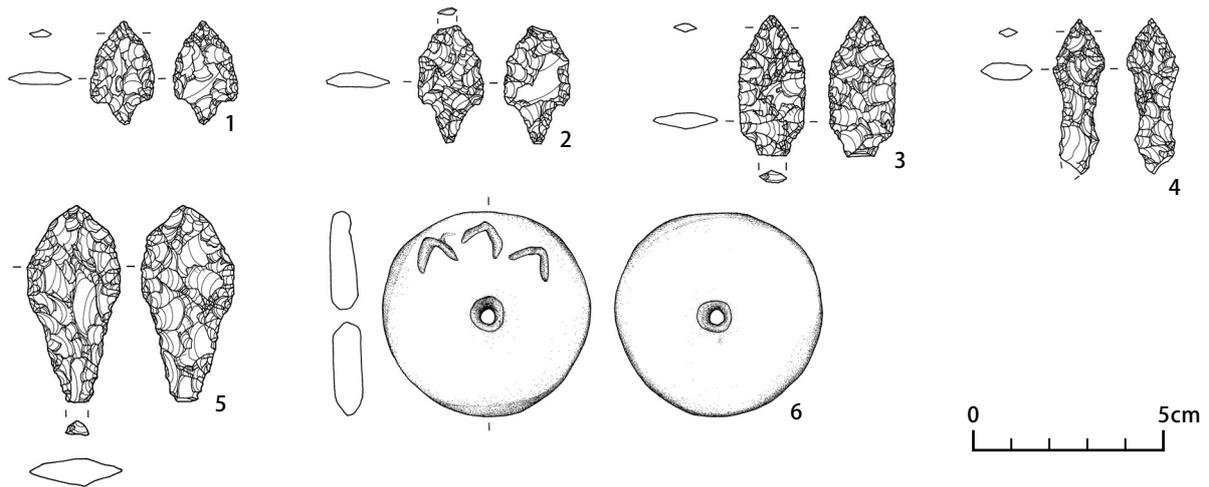


Fig. 36 7a号竖穴床面出土の石器

をなさない。

**両面加工尖頭器 (Fig.37-18)**

18は梨肌の黒曜石製で、大きく破損している。加工がやや粗く、石鏃の未成品の可能性もある。

**石製ナイフ (Fig.37-19)**

19は、大形の黒色安山岩製剥片を横位に用いた石匙である。器体の両側縁に二次加工が連続し、基部には抉り状の加工によるつまみ部、先端には比較的急角度（60°前後）の刃角による尖頭部が作り出されている。

**石錘 (Fig.37-20)**

20は砂岩製の有孔石錘である。長さ18.1cm、幅10.5cm、厚さ7.1cm、重さ1.45kgを測り、裏面側に若干湾曲する縦断面形状である。全面的に敲打痕が顕著であるが、孔部分では敲打痕が磨滅している。

**③ 7b号床面出土 (Fig.38～Fig.39)**

点取り遺物として、石鏃35点、両面加工尖頭器6点、石製ナイフ・スクレイパー5点、石斧2点、石球2点、垂飾1点、有孔円板1点、剥片83点の計135点が出土している。この他に、石鏃1点がフローテーションによって南側の炉から検出されている。

**石鏃 (Fig.38-21～53)**

流紋岩の40以外は黒曜石製であるが、21・23・27・32・36・50・53は被熱による表面変化や変形が著しい。また、24・33・35・38・42・43・45・46は梨肌の黒曜石である。

有茎の形態が基本となり、平行する胴部や段差のある胴部が尖頭部と五角形状をなすもの（40～43・50～52）、胴部が内反したり凹凸をなすもの（24・27・37・49）、胴部末端（かえし）が突出する

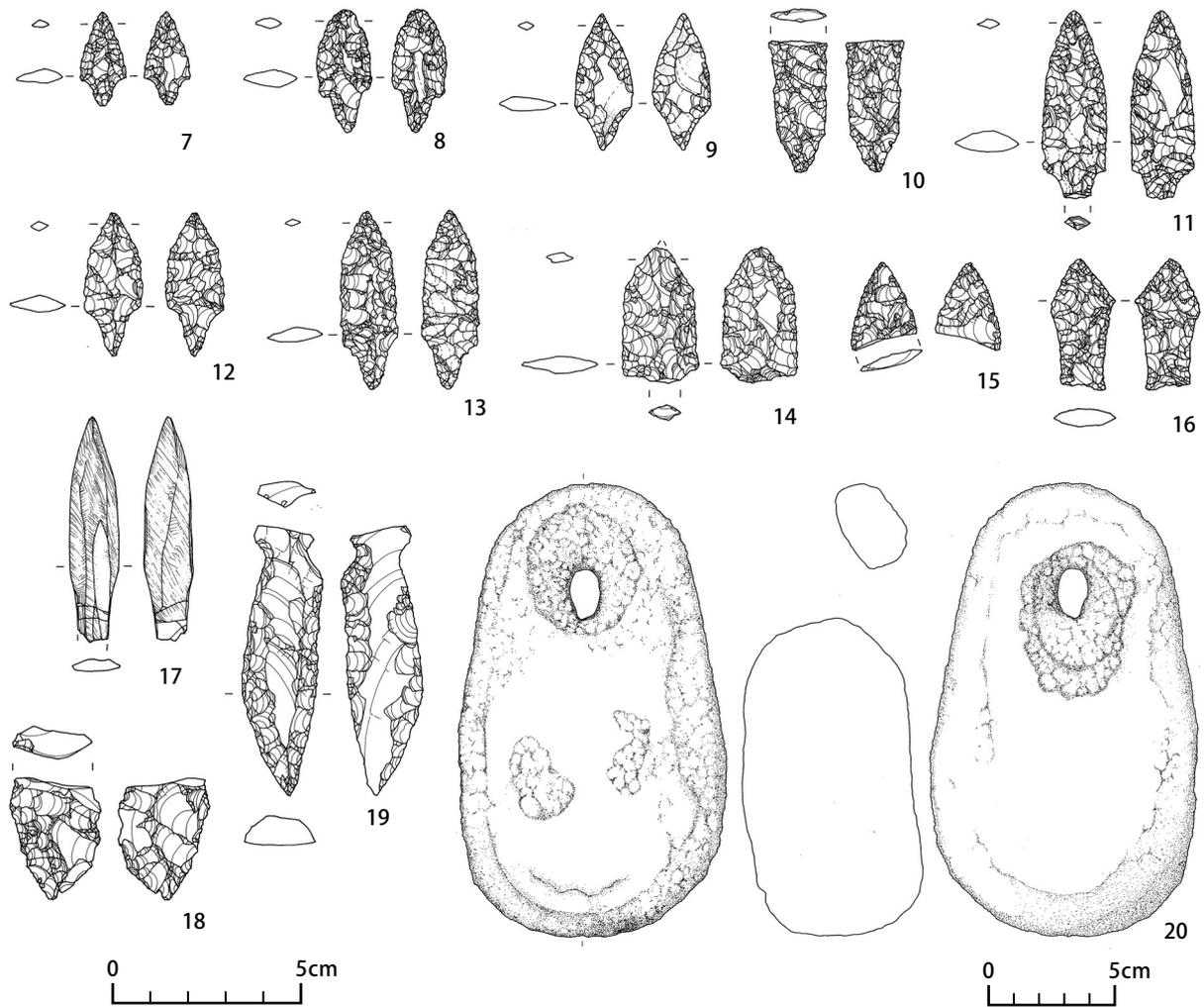


Fig. 37 7a号竪穴骨塚a出土の石器

もの (25・28・29・38・39・41・47)、もしくはこれらに近い形状のものが組み合わさる。長さ 2.5cm～5cm、厚さ 3mm～5mm のサイズが主体となり、大形・長身のもの (31・50～52) では胴部が平行する傾向が強い。44 は他のものよりも基部が太く菱形に近い全体形状である。

53 は石鏃の未成品と思われるが、旧石器時代の彫器素材のような形状を呈する。

#### 両面加工尖頭器 (Fig.39-54～57)

54 は緻密な黒色安山岩を用いており、他は黒曜石製である。また、56 は梨肌の石質である。

54～56 は、基部が明瞭に区分される形態もしくは太い茎部を持ち、石銛と呼ばれることのある石器であるが、54 は幅広薄身、55・56 は細形厚身をなす。いずれも二次加工の剥離痕がやや粗い。57 は大きく折損しているが、細かな加工によって薄身 (5.5mm) で均整のとれた断面形に仕上げられている。

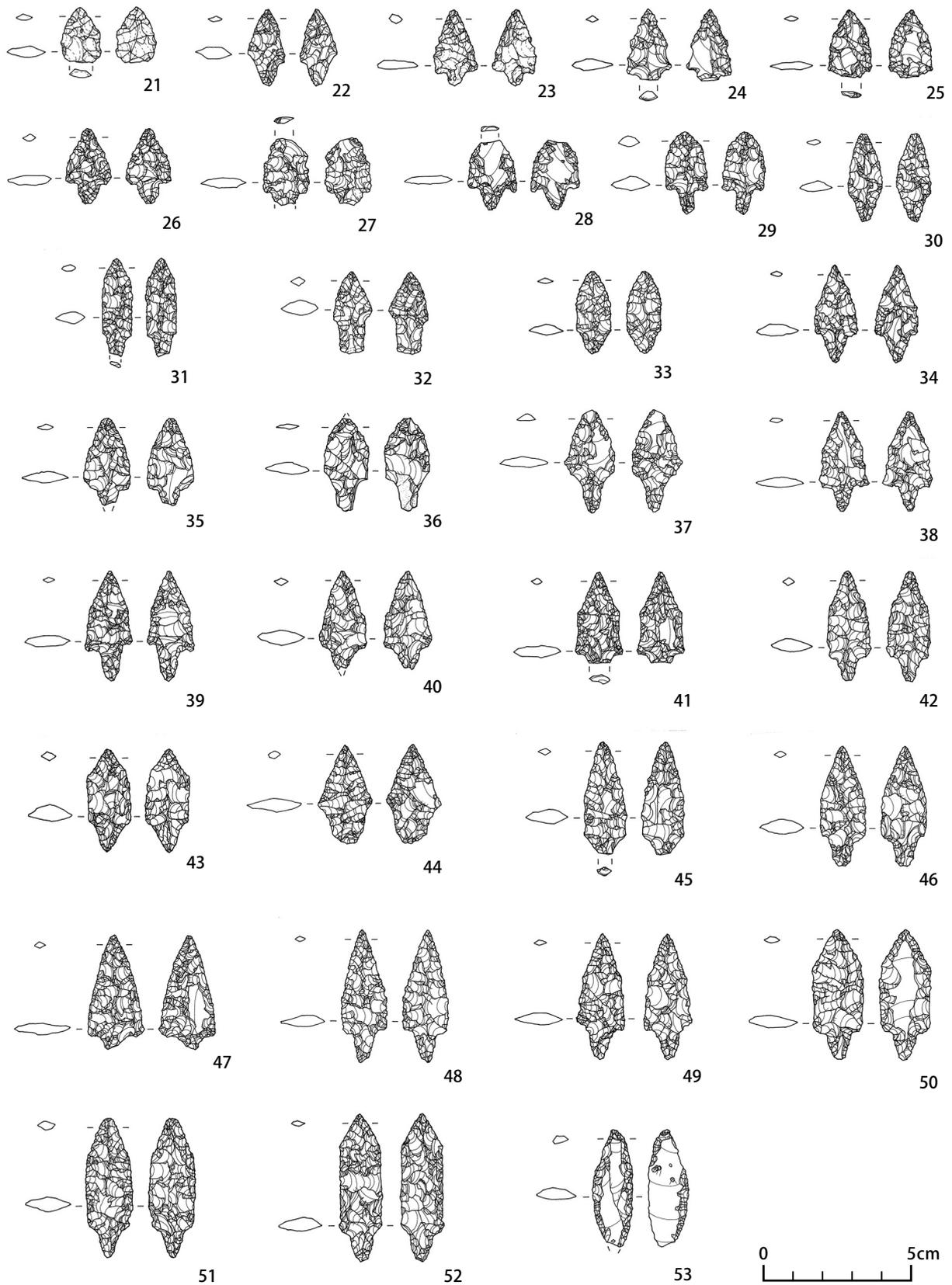


Fig. 38 7b号竖穴床面出土の石器 1

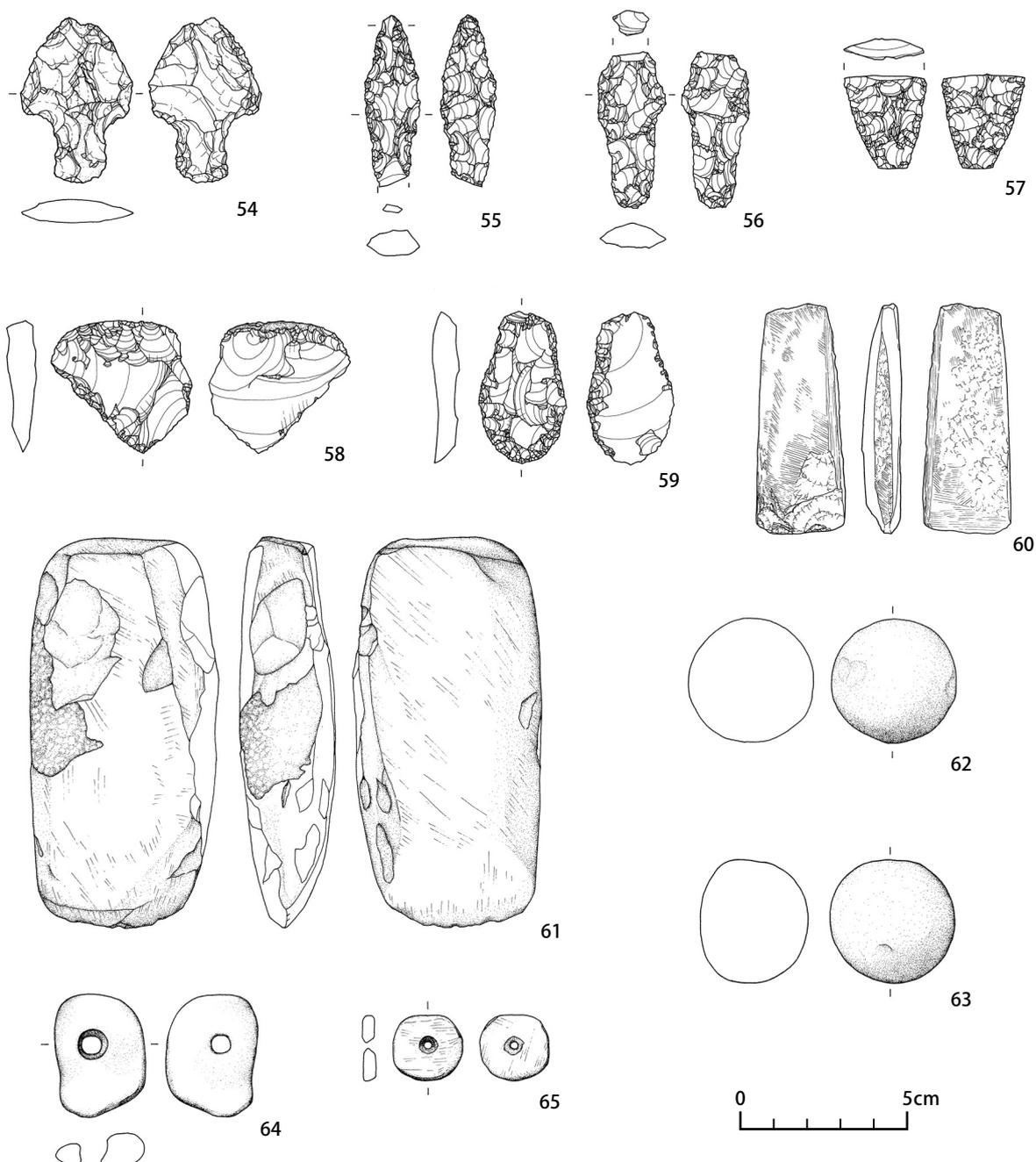


Fig. 39 7b号竪穴床面出土の石器 2

石製ナイフ・スクレイパー (Fig.39-58・59)

いずれも黒曜石製である。58は、円礫面打面で寸詰まりの剥片の左側縁にやや不規則な形状の剥離による二次加工が連続するナイフである。59は、端部に60°前後の刃角の弧状の刃部を持つ搔器である。背面周縁と右側縁の腹面側に二次加工が連続する。

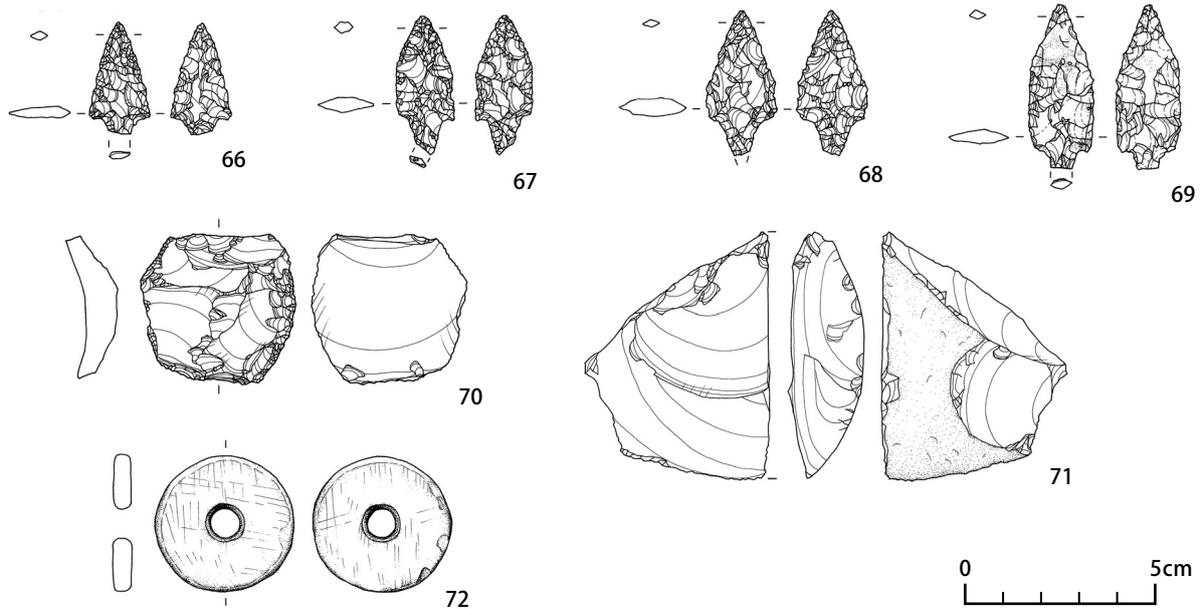


Fig. 40 7b号竖穴骨塚b出土の石器

石斧 (Fig.39-60・61)

60は緑灰色の片岩製で、右側面に擦切痕の残る定角形の石斧である。片理に沿った割れ口が所々にみられるが、特に刃部方向からの衝撃による階段状の割れが著しい。61は暗緑色の片岩製の石斧である。厚み(30mm)があり側面の稜線が不明瞭であるため、角丸方形～楕円形の横断面形状を呈する。刃部も潰れが目立ち鈍い形状である。全面に研磨が及ぶが、両側面の中部付近に敲打痕が著しく、柄の装着を窺わせる。

石球 (Fig.39-62・63)

いずれも砂岩製であり、63は煤状の付着によって全体が黒ずんでいる。ともに径3.5cm前後でほぼ球状をなす。

石製品 (Fig.39-64・65)

64は頁岩製の垂飾である。表面は滑らかであるが研磨痕が不明瞭で、自然礫の形状を利用しているように思われる。孔は正面で大きく裏面で小さいため、正面側から一方的に穿孔されたと考えられる。65は頁岩製の有孔円板である。径2cmの角丸方形に近い形状で、中央に径5mmの孔を持つ。全面的に擦痕が顕著である。

④ 7b号骨塚b出土 (Fig.40)

点取り遺物は、石鏃5点、スクレイパー1点、有孔円板1点、石核4点、剥片115点の計126点である。

石鏃 (Fig.40-66～69)

すべて黒曜石製であるが、66・69は被熱による表面変化や変形が著しい。また、68は梨肌の黒曜石

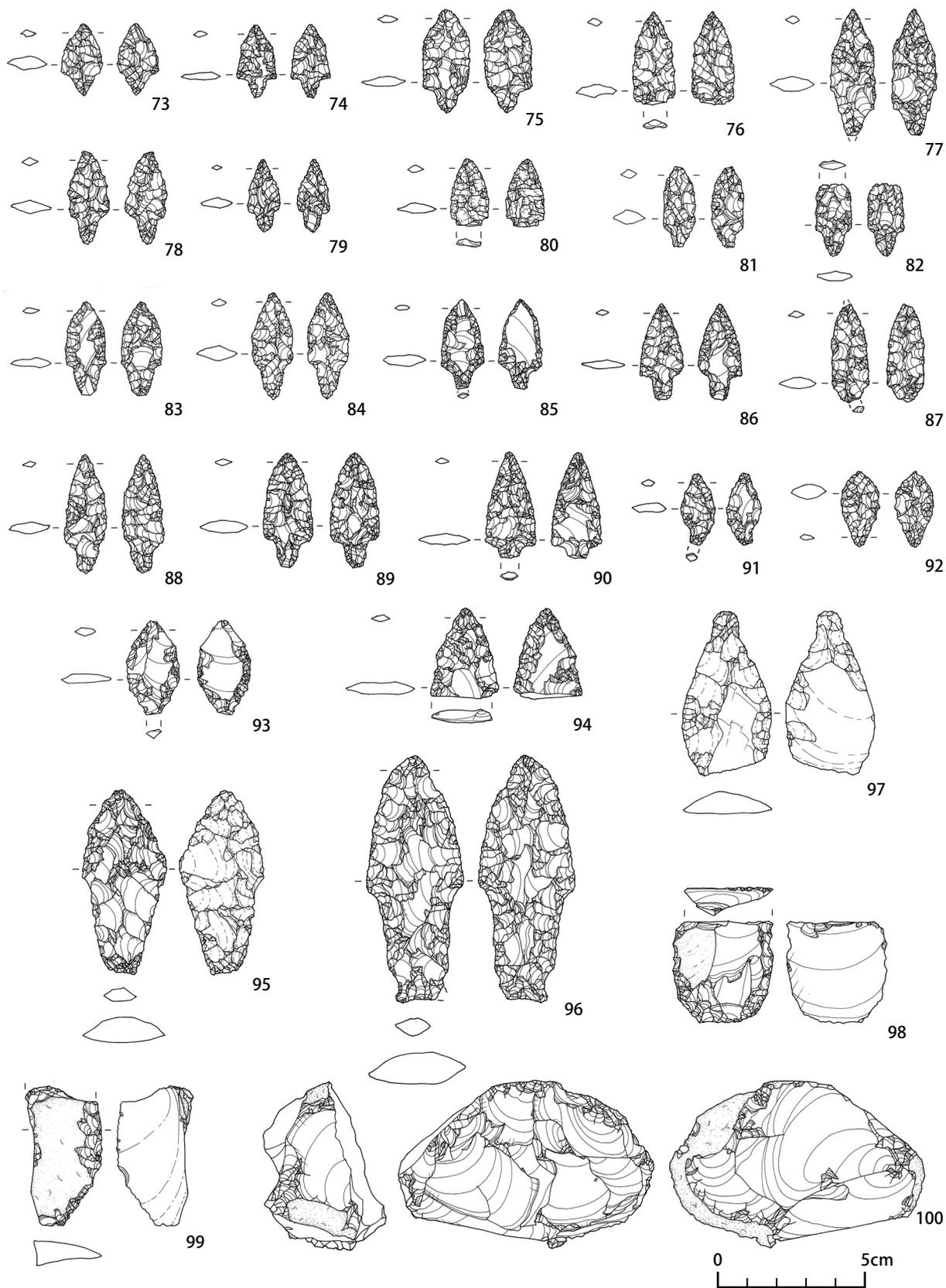


Fig. 41 7号竖穴埋土出土の石器 1

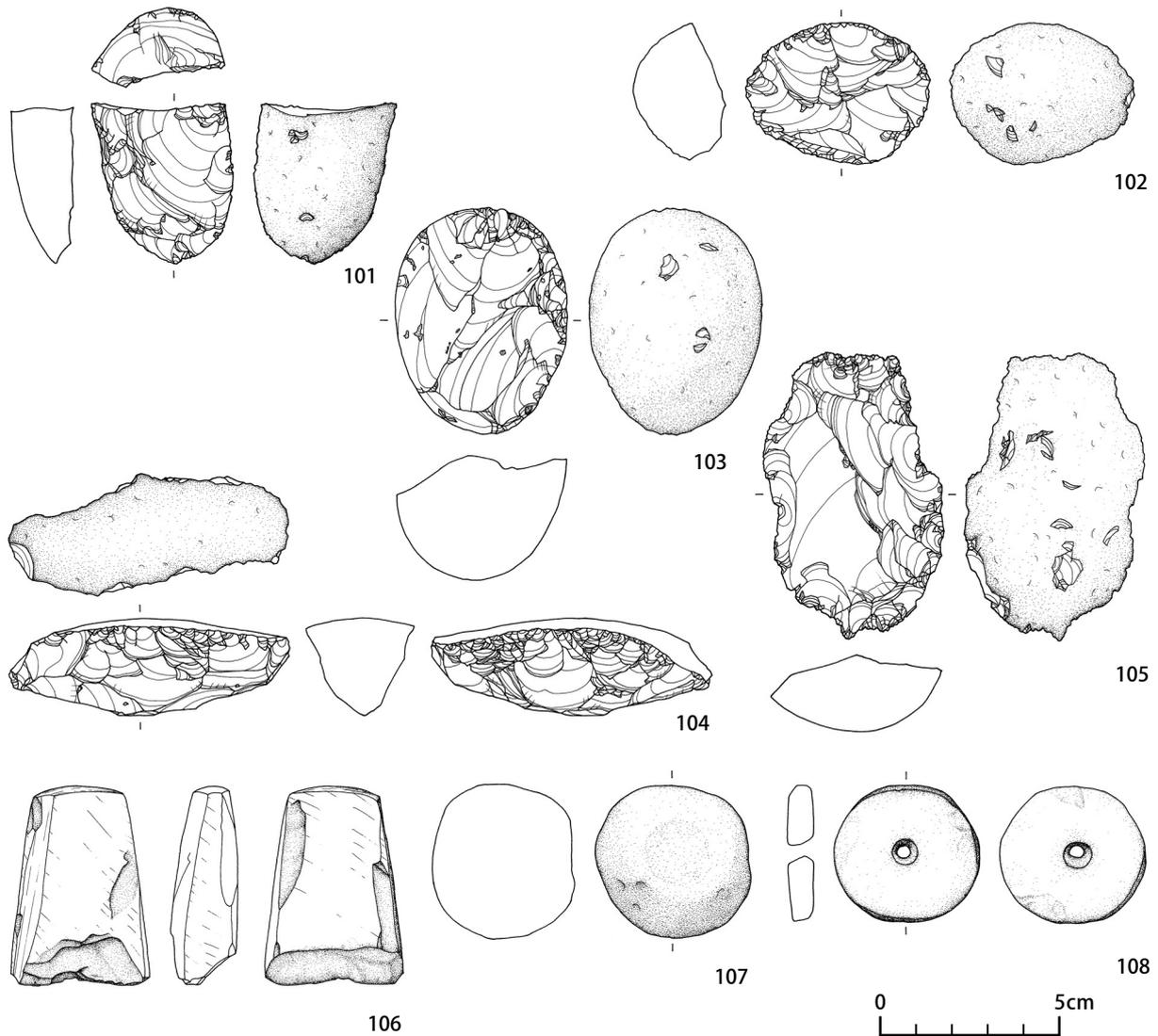


Fig. 42 7号竖穴埋土出土の石器 2

である。長さ 3cm ~ 4.5cm、厚さ 3mm ~ 5mm の有茎の形態で、66 は三角形の身部、67 ~ 69 は五角形状の身部を持つ。

スクレイパー (Fig.40-70)

70 は腹面側へ強く湾曲した剥片を素材とし上下両端に折面が残るが、背面のほぼ全周への細かな剥離によって円形搔器に近い形状となっている。暗赤褐色が網状に入る黒曜石を用いている。

石核 (Fig.40-71)

71 は梨肌の黒曜石を用いた石核であり、円礫面が残る。剥片を素材とし、背面側の先行剥離面を打面として素材腹面で剥片剥離を行なっている。右半分を欠損するが、長さ 4cm、幅 6cm 程の幅広の剥

片が剥離されたと思われる。

**石製品 (Fig.40-72)**

72は頁岩製の有孔円板である。中央に径9mmの孔を持ち、全面的にやや粗い擦痕が顕著である。

**⑤ 7号竪穴埋土出土 (Fig.41～Fig.42)**

竪穴埋土の比較的床面近くから出土し位置を記録した点取り遺物は、石鏃31点、両面加工尖頭器3点、石製ナイフ・スクレイパー3点、石核8点、石斧1点、石球1点、有孔円板1点、石錘1点、砥石5点、凹石3点、磨石1点、剥片217点の計275点である。

**石鏃 (Fig.41-73～93)**

頁岩の73・80・84以外は黒曜石製であるが、87・92は被熱による表面変化が著しい。また、75・78・79・81・91はいわゆる梨肌の黒曜石であり、74・83は暗赤褐色の部分を含む黒曜石である。

有茎の形態が基本となり、平行する胴部や段差のある胴部が尖頭部と五角形状をなすもの(73～77)、胴部が内反したり凹凸をなすもの(78・84)、もしくはこれらに近い形状のものが組み合わさる。91～93は茎部の作り出しがいびつあるいは不明瞭であるが、加工が粗いので未成品であろう。93には素材の背腹両面が大きく残る。

**両面加工尖頭器 (Fig.41-94～96)**

いずれも黒曜石製であるが、95・96は被熱による表面変化が著しい。

94は大きく破損しており加工もやや粗い。95・96は基部が区分される形態を持った石銛である。95は裏面が比較的平坦なため非対称な蒲鉾状の横断面となる。96は大型(長さ8.4cm、幅3.3cm、厚さ11mm)で、挟りによって基部両側縁の末端が突出する(右側縁の末端は欠損している)。

**石製ナイフ・スクレイパー (Fig.41-97～99)**

97は緻密な黒色安山岩を用いており、他は黒曜石製である。

97・99は二次加工によって概ね50°以下の比較的鋭利な刃角を作り出している。97は幅広の剥片を素材として両面加工のつまみ部が形成された石匙であり、下端の縁辺は未加工で薄い。99は左側面と背面に角礫面を大きく残し、薄い右側縁(素材剥片の打点側)への細かな加工によって刃部を形成している。98は端部にやや急角度(60°前後)の刃部を持つ搔器である。背面左半分に岩屑面が残り、下端の刃部中央が直線的である。

**石核 (Fig.41-100・Fig.42-101～105)**

すべて黒曜石製で円礫面が残る。103・104は梨肌の石質である。

いずれも石核調整に乏しく、自然面や分割面を打面として主に長さ5cm以下の幅広・横長剥片を剥離している。基本的に作業面は固定されるが、剥離の数や方向が限定されるもの(100・101)から求心的な剥離が進行するもの(102～105)まで変異の幅がある。

100の裏面は複数の大きな分割面で被われ、円礫面と分割面を打面として正面で剥片が剥離されている。101は上面の分割面を主な打面としている。102～105は裏面に大きく残る円礫面の周囲で打点を移動させて剥片を剥離している。特に104は打面が比較的平坦で、舟底様の残核形状となる。

**石斧 (Fig.42-106)**

106 はよく研磨された側面を持つ定角形の石斧であり、左側面には擦切痕が残る。刃部を破損しているが、破損面に細かな剥離痕や潰れが観察されるので、再加工・再使用が試みられたようである。緑色片岩製である。

**石球 (Fig.42-107)**

107 は砂岩製の石球で、煤状の付着によって表面が黒ずんでいる。径 4.0cm ~ 4.5cm で各面が若干の平坦をなすため、均整のとれた球形とはなっていない。

**石製品 (Fig.42-108)**

108 は中央に径 7mm の孔を持つ有孔円板である。砂岩製で擦痕等は不明瞭である。

(山田 哲)

**3-3 骨角器****① 7a 号床面出土 (Fig.43-1 ~ 7, Fig.46-22)**

1 は雌形 I 類の銚頭、2・3 はその未成品であろう。いずれも途中で折れている。2 は頭部を A 形に切り出し、腹面の柄溝を作る部分を面取りしている。4・13 はきわめて薄い器体をもつ骨鏃 I 類である。5 は刺突具の先端部破片。6 はクジラ類の胴~尾部を浮彫で描いている。7 はビン状の形態をした垂飾で、頭部には穿孔と抉り・溝を施す。22 はクジラ類の肩甲骨を利用したまな板状の骨製品である。90cm を越える超大型品である。2 箇所幅 10cm 程度の孔をあけ、把手としている。両側縁と外縁は波状に加工している。

**② 7b 号床面出土 (Fig.43-8 ~ 10・Fig.45-19 ~ 21)**

8 はやや小振りな接合式の釣針軸 I 類。接合面の反対側に 2 段の突起をもつ。9 は両端を欠くが薄手の作りで骨鏃 I 類の可能性はある。10 は棒状製品 I 類の破片である。19・20 は鯨骨製の掘具で、いずれも焼けて損傷が著しい。19 は全長 30cm を越え、20 もそれに近いサイズだったと思われる。刃部幅をみると、20 が約 6cm なのに対して 19 は約 9cm とやや広い。着柄用の加工としては、基部両側や側縁に小突起を設けている。20 の小突起の位置はやや非対称である。21 は鯨骨製の掘具でやはり焼けている。長さは 37.7cm あるが幅は 7cm 程度であるため、細身な印象を受ける。やはり着柄用の小突起をもつ。

**③ 7 号床面出土 (Fig.43-11 ~ 14・Fig.44)**

11 は雌形 I 類の銚頭で、焼けて反っているがほぼ完形で、細身の資料である。12 は同種の銚頭の上半部破片。13 は骨鏃 I 類で、基部を細く作り出しているのがわかる。14 はやはり 2 段の突起をもつ接合式の釣針軸 I 類であるが、全体に加工が粗く、未成品であろう。15a・b は回収された焼骨片の中から見つかったものである。15a は鹿角の分岐部を利用して、一端を薄く板状に加工した突起部を作り出し、円形の孔を設けている。突起部の根元の段は斜めに作られている。接合しないが同一個体と思われる破片があるため、比較的長い「し」の字状を呈していたのだろう。15b は端部がやや尖る形状で、側

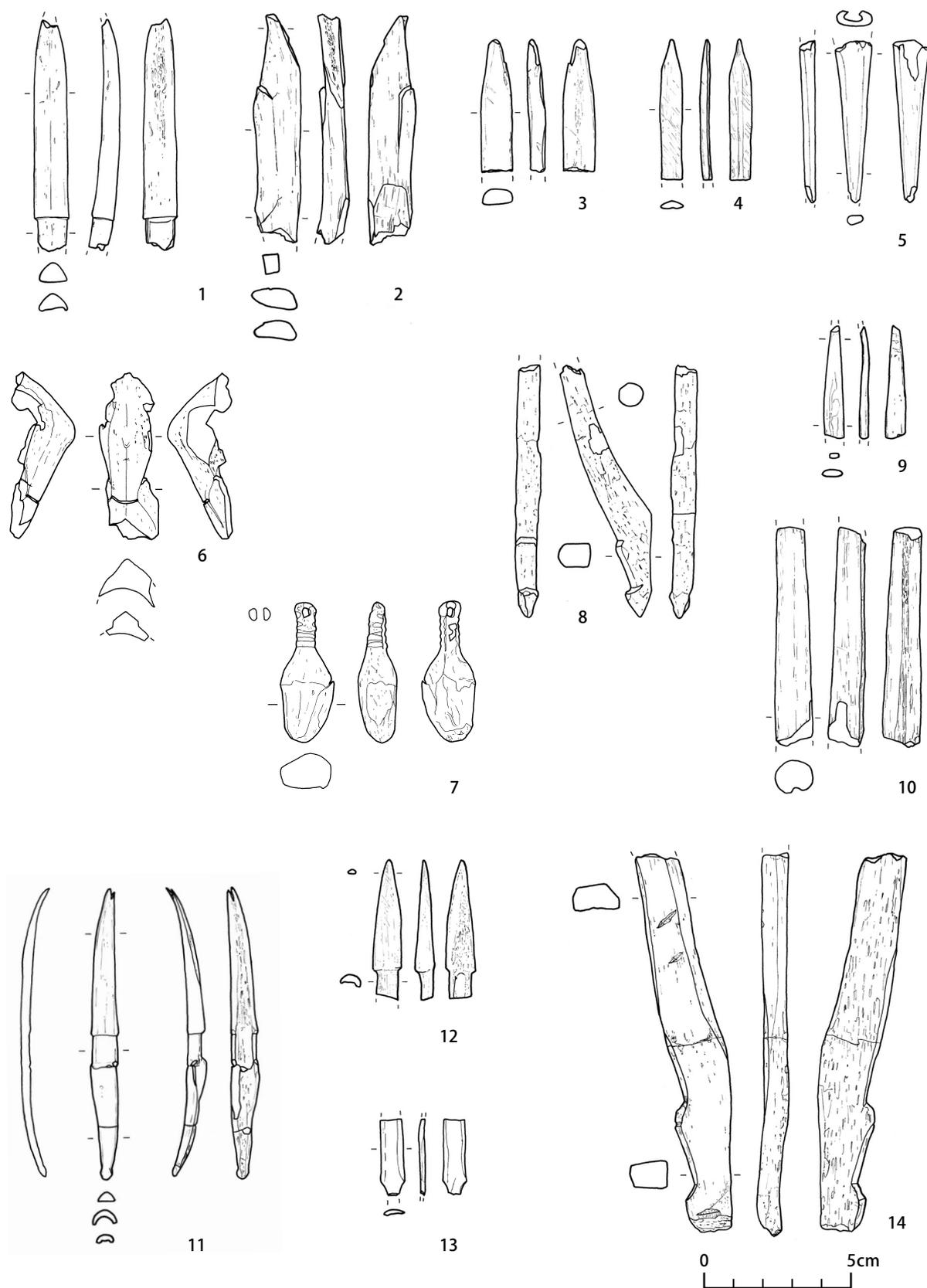
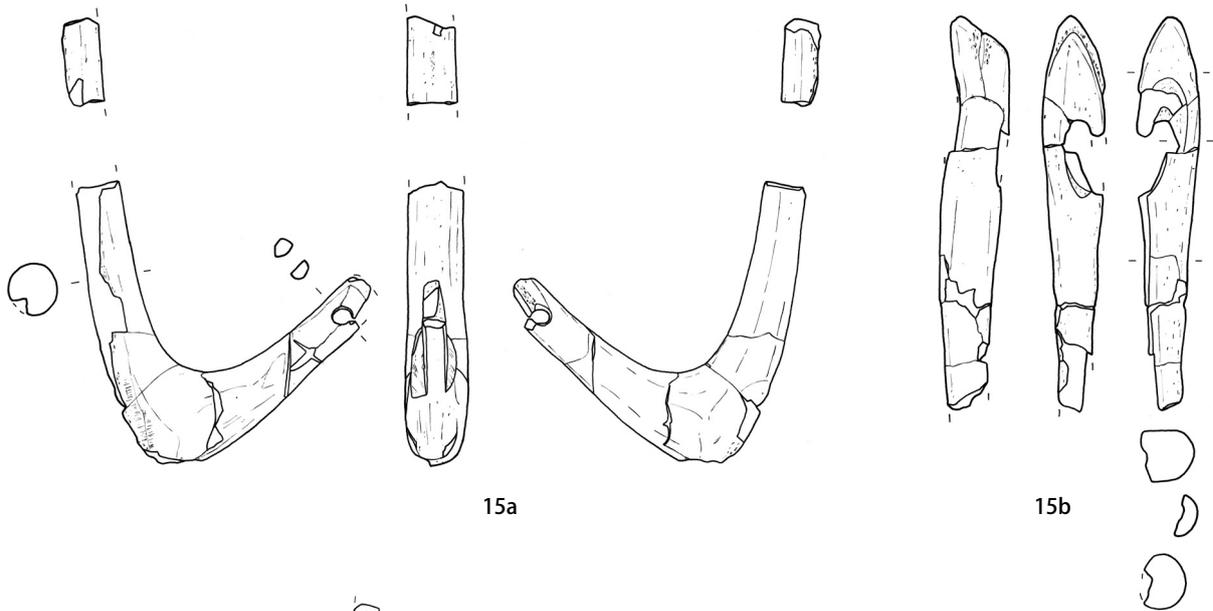
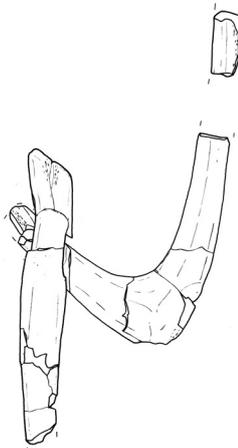


Fig. 43 7号竪穴出土の骨角器 1 (1~7: 7a号床面、8~10: 7b号床面、11~14: 7号床面)

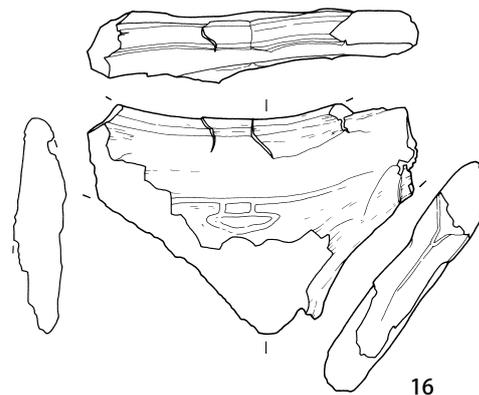


15a

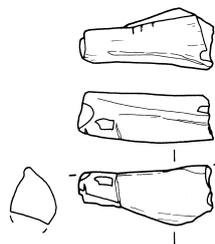
15b



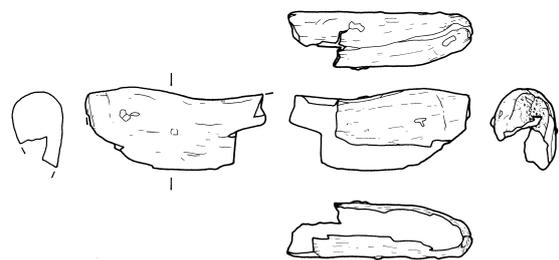
15a・bの組合せ想定図



16



17



18



Fig. 44 7号竖穴出土の骨角器2 (15~18:7号床面)

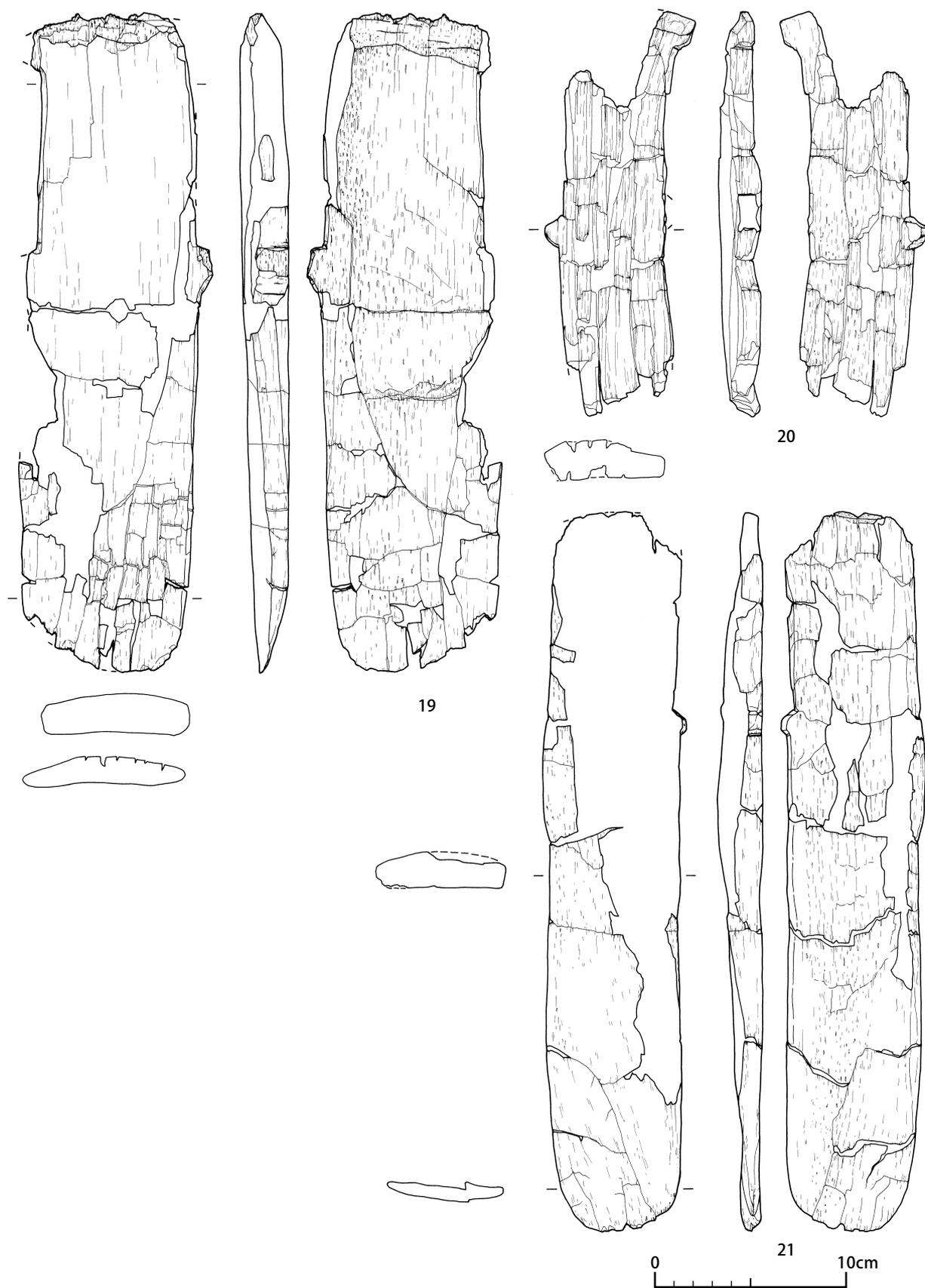


Fig. 45 7号竖穴出土の骨角器3 (19~21 : 7b号床面)

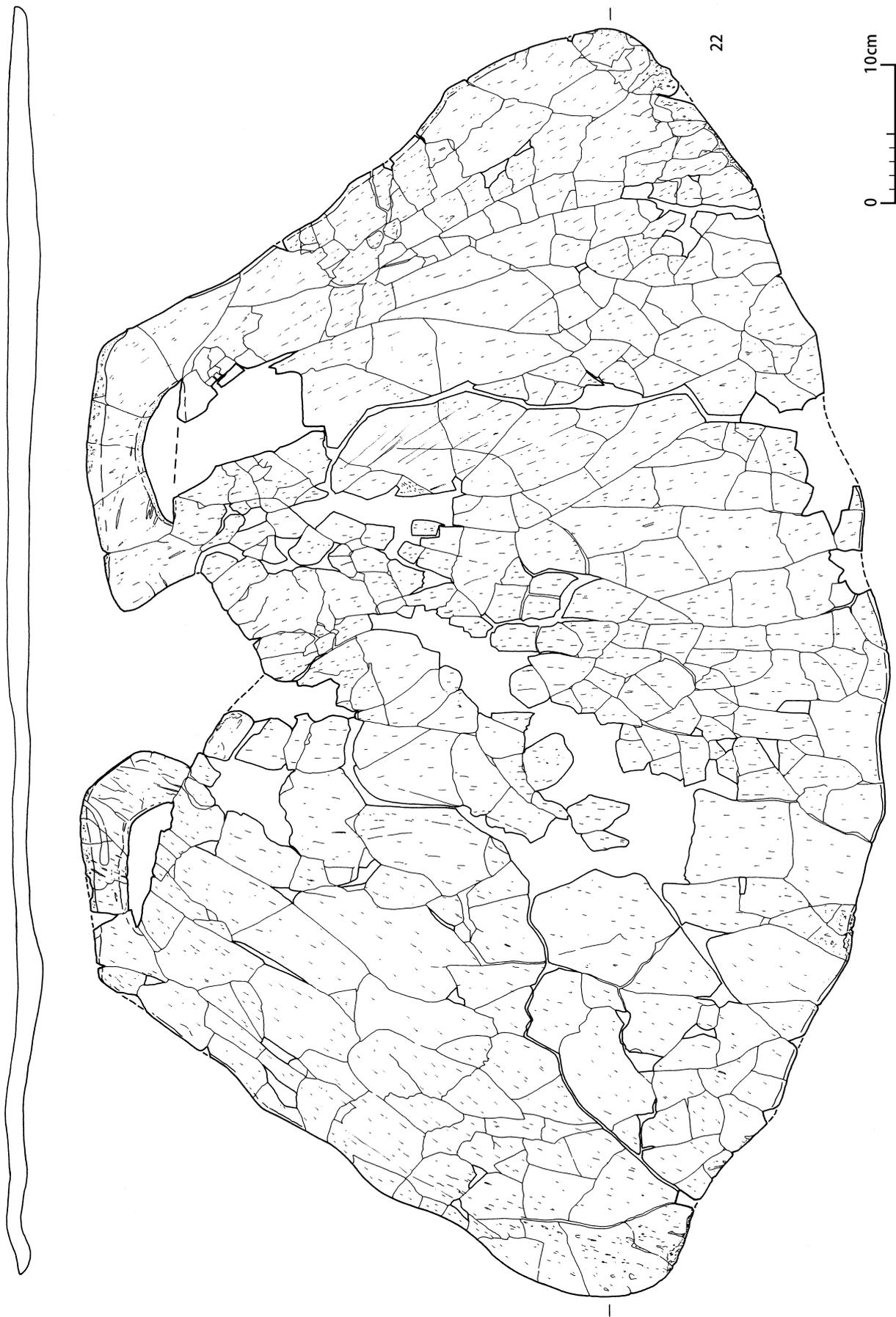


Fig. 46 7号竖穴出土の骨角器4 (22 : 7a号床面)

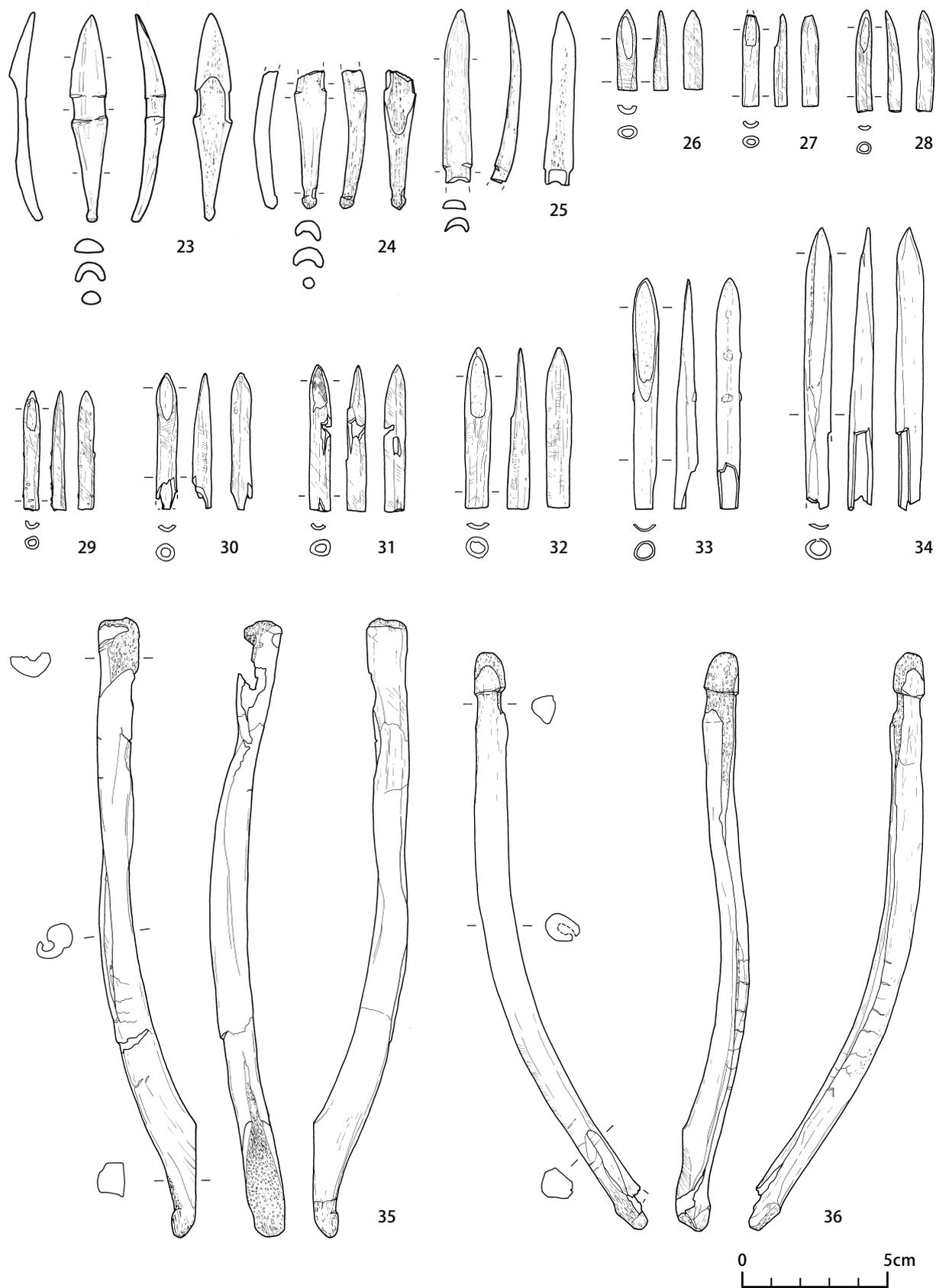


Fig. 47 7号竪穴出土の骨角器5 (23~36 : 7a号骨塚 a)

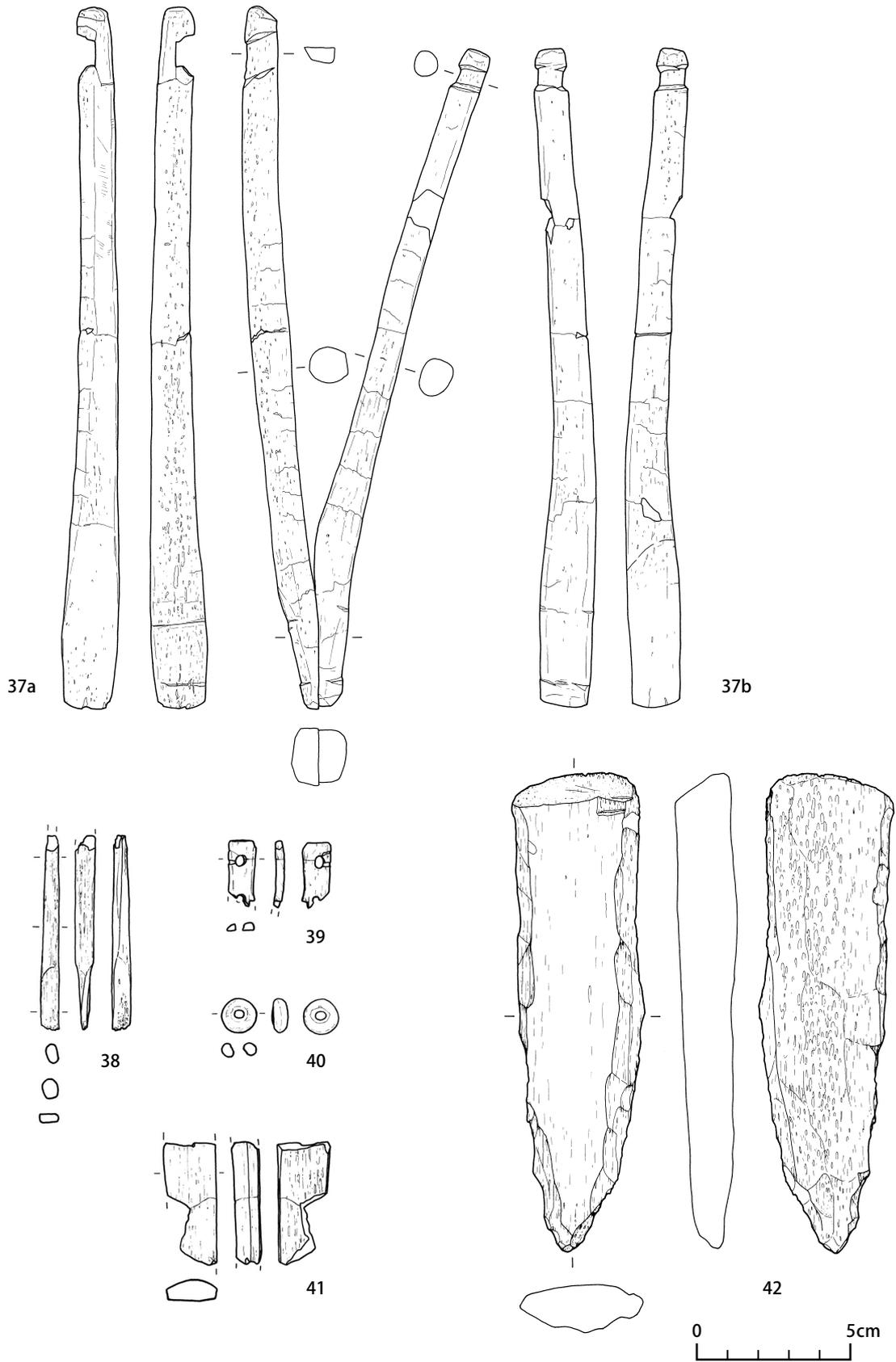


Fig. 48 7号竖穴出土の骨角器6 (37~42: 7a号骨塚a)

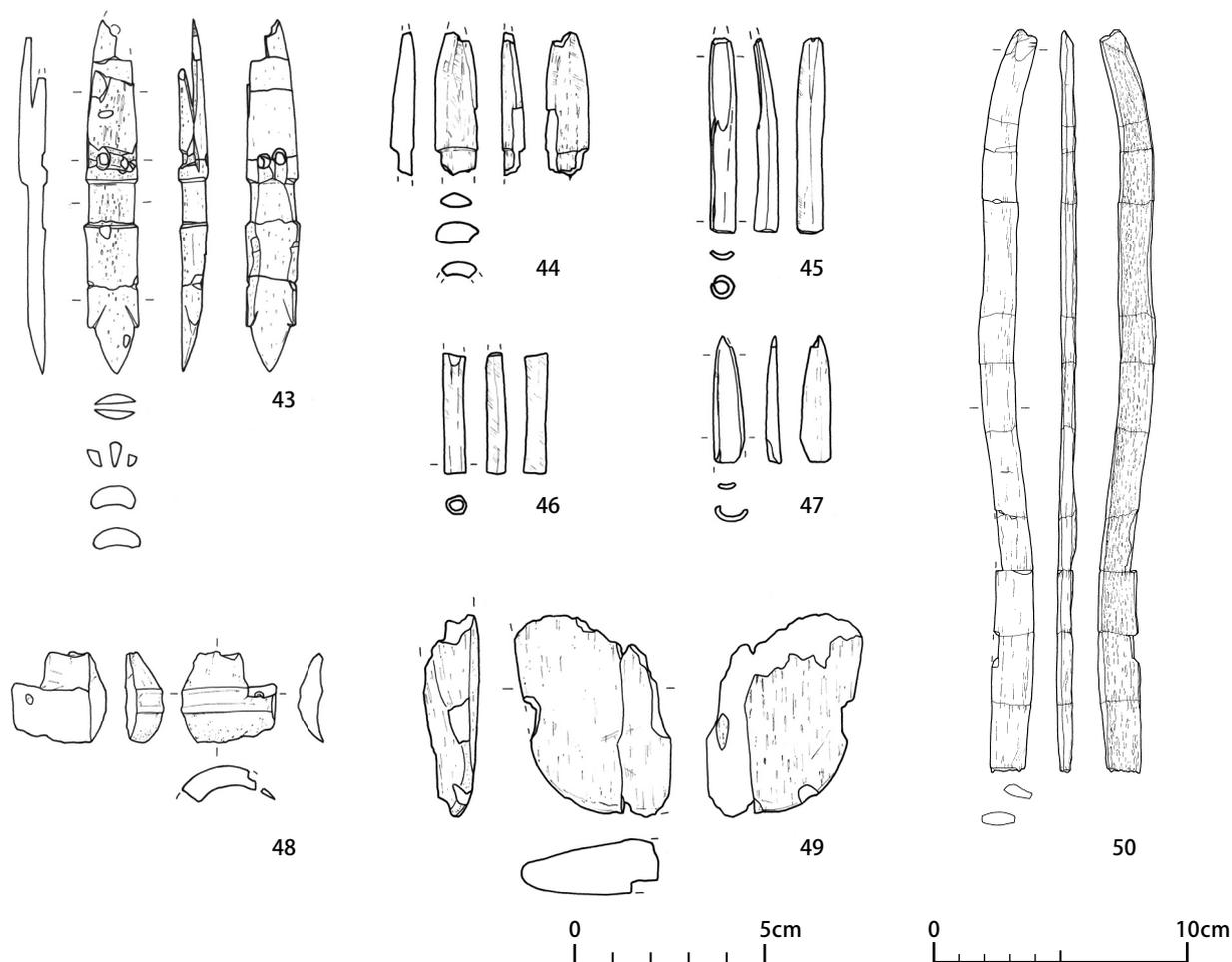


Fig. 49 7号竪穴出土の骨角器 7 (43～50 : 7b号骨塚 b)

縁が欠損しているが、長円形の孔が斜めに貫通していたようである。この孔に 15a の突起部がちょうど収まるようになっている。残念ながら出土状況が確認できなかったため、結合方法を確実に知る事はできないが、h 字状になる結合状態の推測図を示した。16・17 は浮線による装飾をもつ鹿角製品。16 は角の分岐部を利用するが、扁平であることから、トナカイ角の可能性もある。18 は彫刻で海獣の頭部を表したと思われる。

#### ④ 7a 号骨塚 a 出土 (Fig. 47・Fig. 48)

23～25 は雌形 I 類の銚頭である。23・24 は尾部端を水滴状にする。26～34 は骨鏃 III 類である。長さにはバリエーションがあるが、3cm～4cm の小型 (26～29)、5cm 前後の中型 (30～32)、8cm を越える大型 (33・34) に分けられそうである。35・36 は海獣肋骨製の釣針軸。いずれも被熱して歪んでいる。35 は接合法の副軸、36 は交差法の主軸である。37 は組み合わさった状態で出土した主軸と副

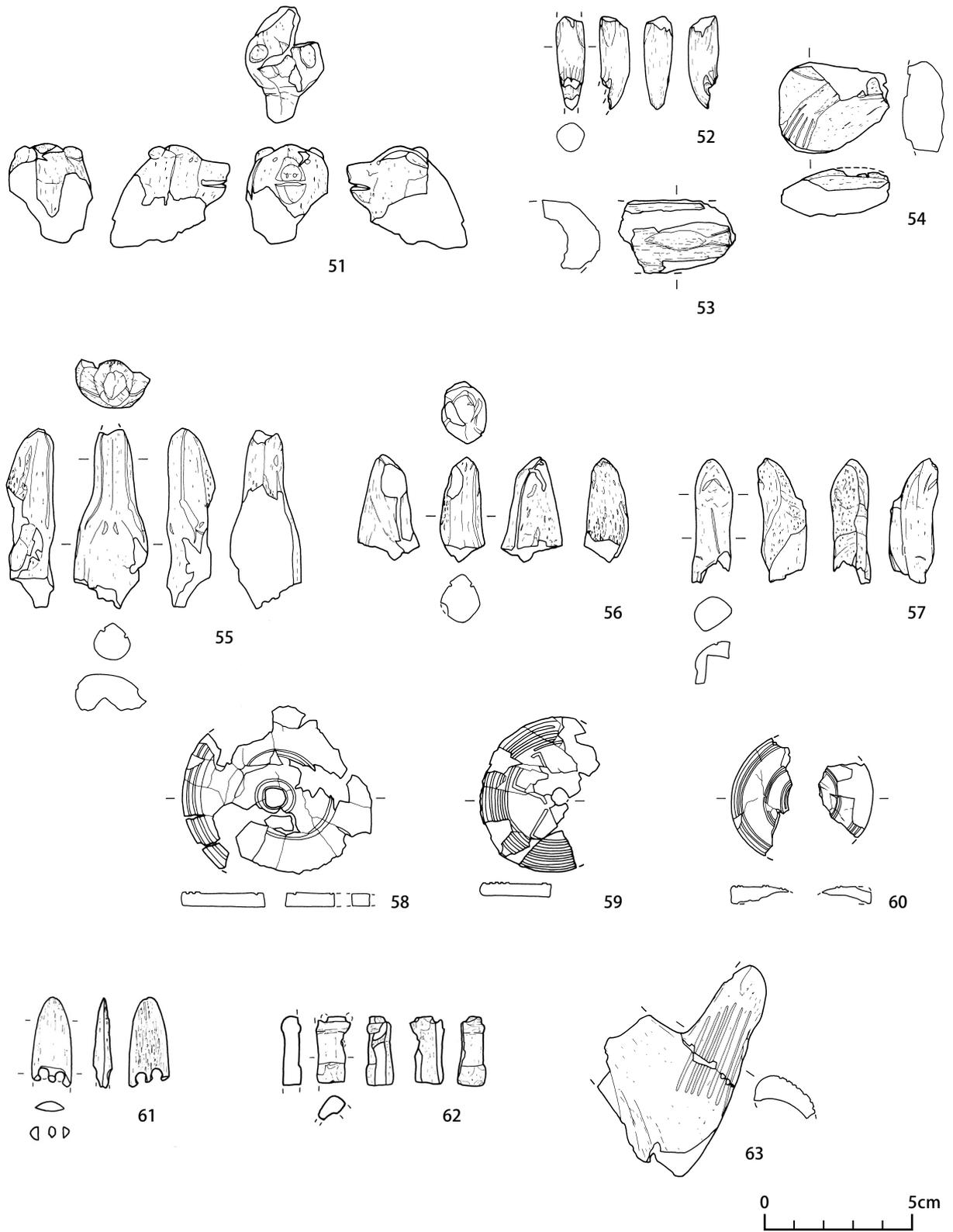


Fig. 50 7号竖穴出土の骨角器 8 (51~63:7号竖穴埋土)

## 第二章 遺構各説

軸で、幅がやや広くなる接合法の結合部をもつ。接合面の反対側には2段の突起を設けているが、ごく浅いものである。38は骨鏃Ⅱ類の基部破片。39は棒状製品Ⅲ類の破片で、縦に孔が並ぶ。40は有孔の玉状製品。41は棒状製品Ⅱ類の破片である。42はクサビ状の形態をしており、上辺は切断痕、他の二辺は表裏両側からの削り痕を残している。U字形の釣針軸Ⅱ類を製作した際の残片である。

### ⑤ 7b号骨塚b出土 (Fig.49)

43は雌形銚頭Ⅱ類で、頭部をやや欠損するが、ほぼ全体の形状を知る事ができる。器体は扁平な柳葉形で、背面側に海綿質がみられる。先端には幅の狭い刃溝と目釘孔を設ける。横位2索孔をもち、ソケットは浅い開窩である。尾部には浅い切り込みを入れて三叉にしている。また尾部両側から挟りが入っている。44は雌形銚頭Ⅰ類の頭部破片。45～47は骨鏃Ⅲ類である。45は中型、46は小型、47は大型になるものだろう。48は筒状の器体に横方向の凸帯状の浮文を施したもの。49は掘具の刃部破片である。50は棒状製品Ⅱ類で、幅1.5cmに対して長さは30cm近くに達する狭長なものである。先端はうすくへら状に加工されているが、ほかに装飾等はみられない。

### ⑥ 7号埋土・攪乱出土 (Fig.50)

埋土と攪乱から出土した動物意匠の彫刻類で、52は攪乱、他は埋土から出土した。いずれも被熱した破片である。51はクマ頭部、52は鱈脚類の胴部である。53・54はモチーフを浮彫で表現したもので、それぞれ魚とアシカ類の鱈部である。55・56はクジラ頭部である。57は海獣の頭部だが、ラッコの可能性が高い。58～60はクックルケシ状の垂飾である。いずれも同心円を基調とした浮線文様をもつ。61・62は銚頭破片で、いずれも横位置2索孔をもつ雌形Ⅱ類である。61は先端の断面がレンズ形になることから、刃溝をもたない尖頭の資料である。63は鹿角の分岐部に7本の刻線をいれたものである。

(高橋 健)

## 3-4 木製品

Fig.51～Fig.57に掲載した木製品のうち、2・5～9・11～15・17～19・21・23～27・29・31～34・45・47・50～51・55～57・64・66は7a号出土で、うち23・34・55～57・64は骨塚aから、2・5～8・11・13～15・17～19・21・24～27・31～33・45・47は7a号木製品集中区 (Fig.10参照)からの出土である。3～4・10・22・28・35・38～39・42～43・46・48～49・53～54・58・60～63・65・67は7b号出土で、うち58・67は骨塚bから、3～4・10・22・28・35・43・46・48～49は7b号木製品集中区 (Fig.10参照)からの出土である。床面とⅣ層からの出土遺物を一括して掲載しているが、いずれも各竪穴の廃絶時の火災によって炭化したものと考えられるため、竪穴毎の廃棄の同時性は高いと考えられる。

1は、床面出土の鏃状のもの先端部である。下端は欠失しており、側面の一部にも欠損がみられる。2は、7a号竪穴の木製品集中区の外側炭化材列に伴うⅣ層出土の鏃としてよいものである。長さ2.8cm。矢毒をすり込むような挟りがみられる。3は、7b号竪穴の木製品集中区 (北壁沿内側炭化材列)のⅣ層出土の弓状のもの先端部である。一部縦に欠損がみられる。4も、3と同じところから床面に伴って

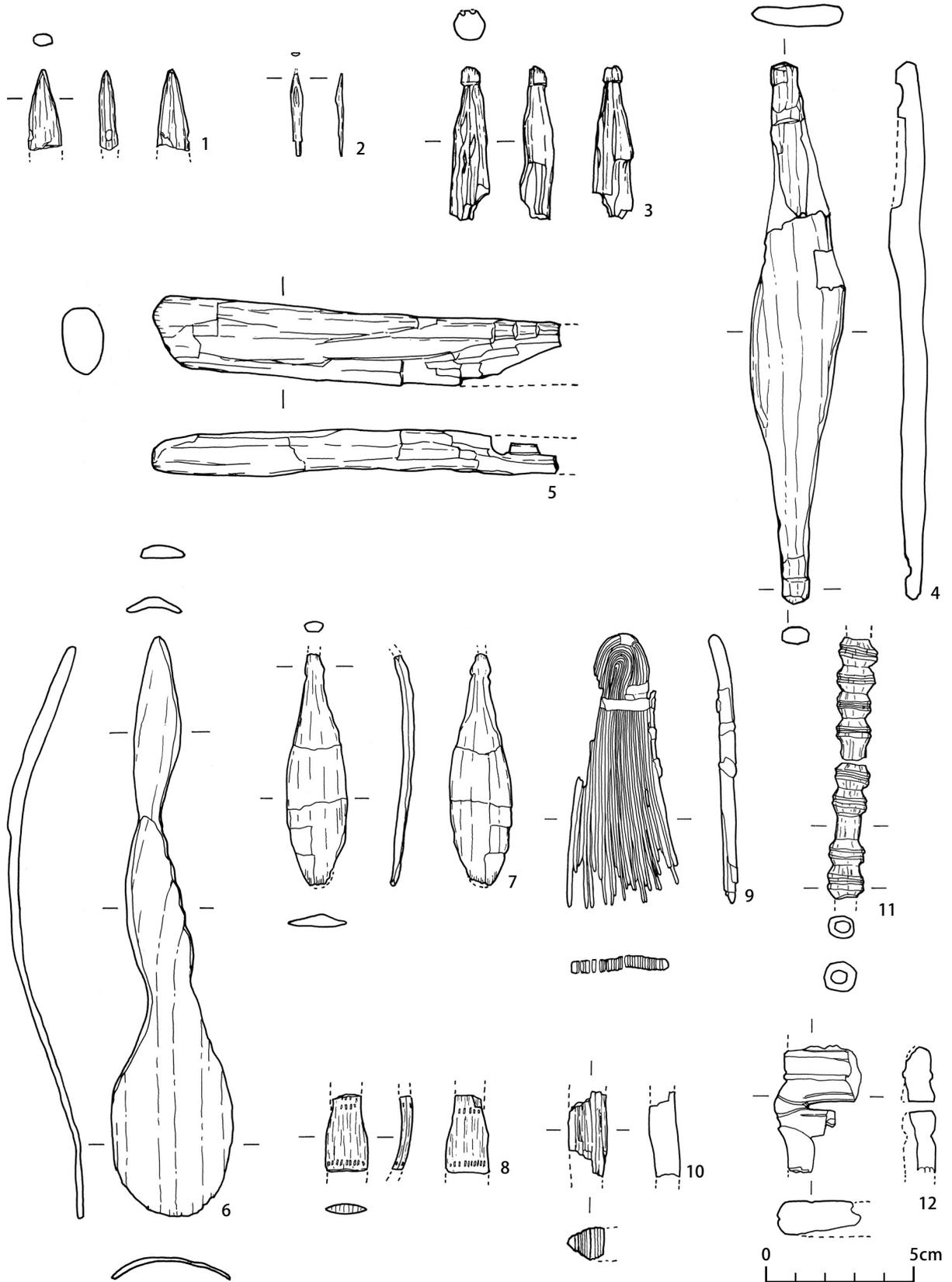


Fig. 51 7号竖穴出土の木製品 1

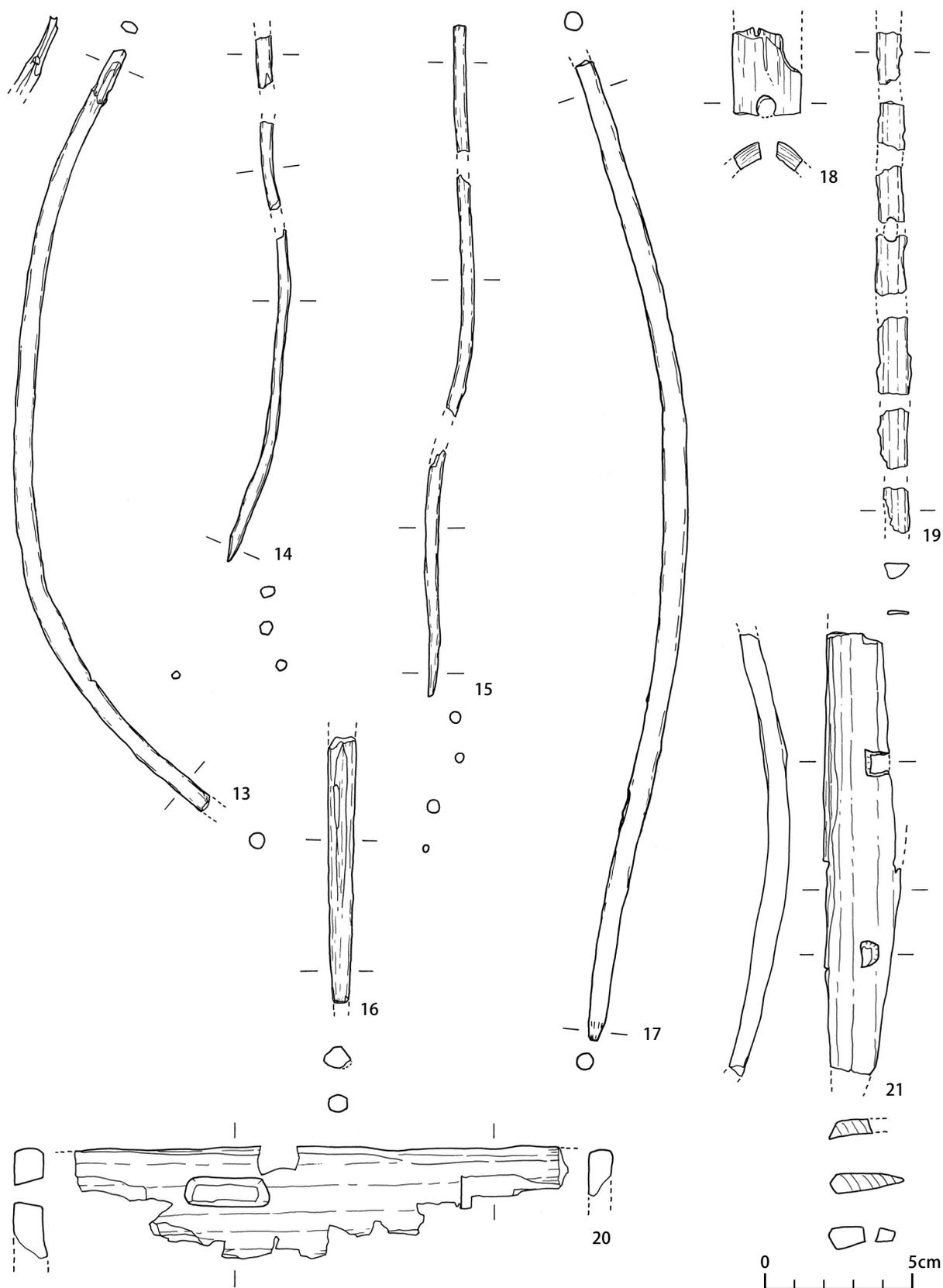


Fig. 52 7号竪穴出土の木製品2

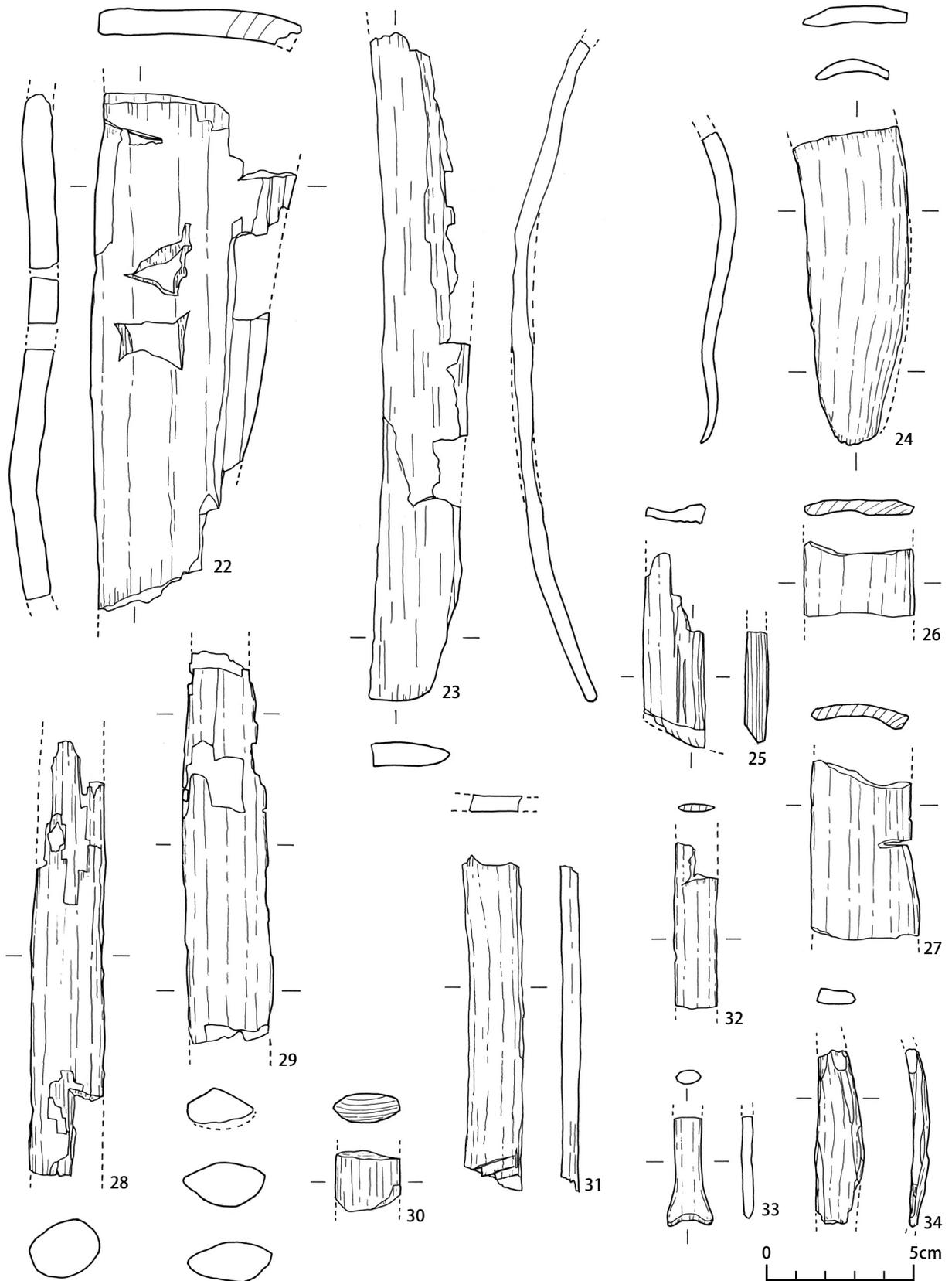


Fig. 53 7号竖穴出土の木製品3

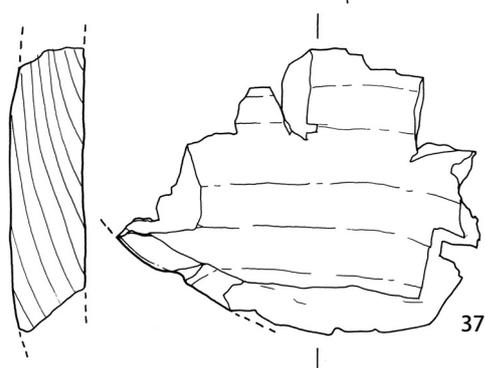
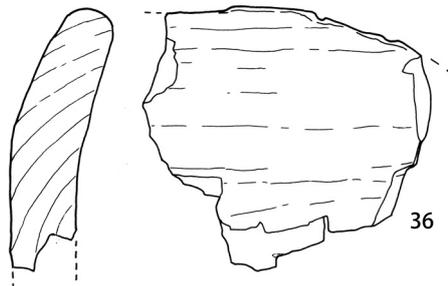
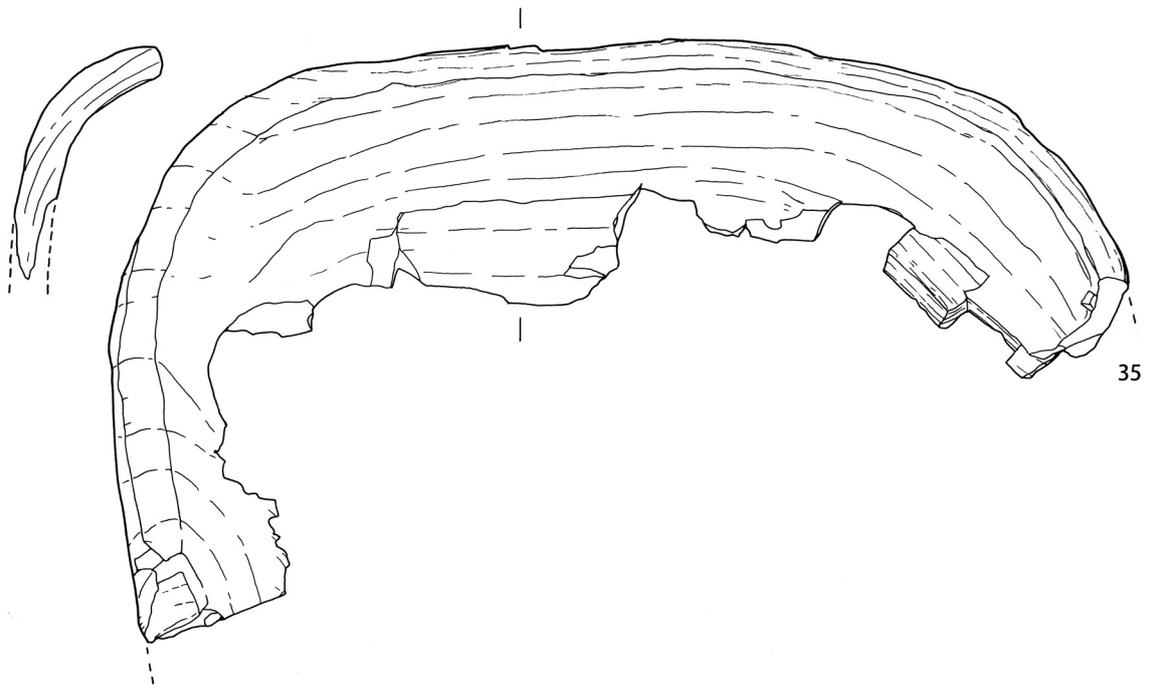


Fig. 54 7号竖穴出土の木製品4

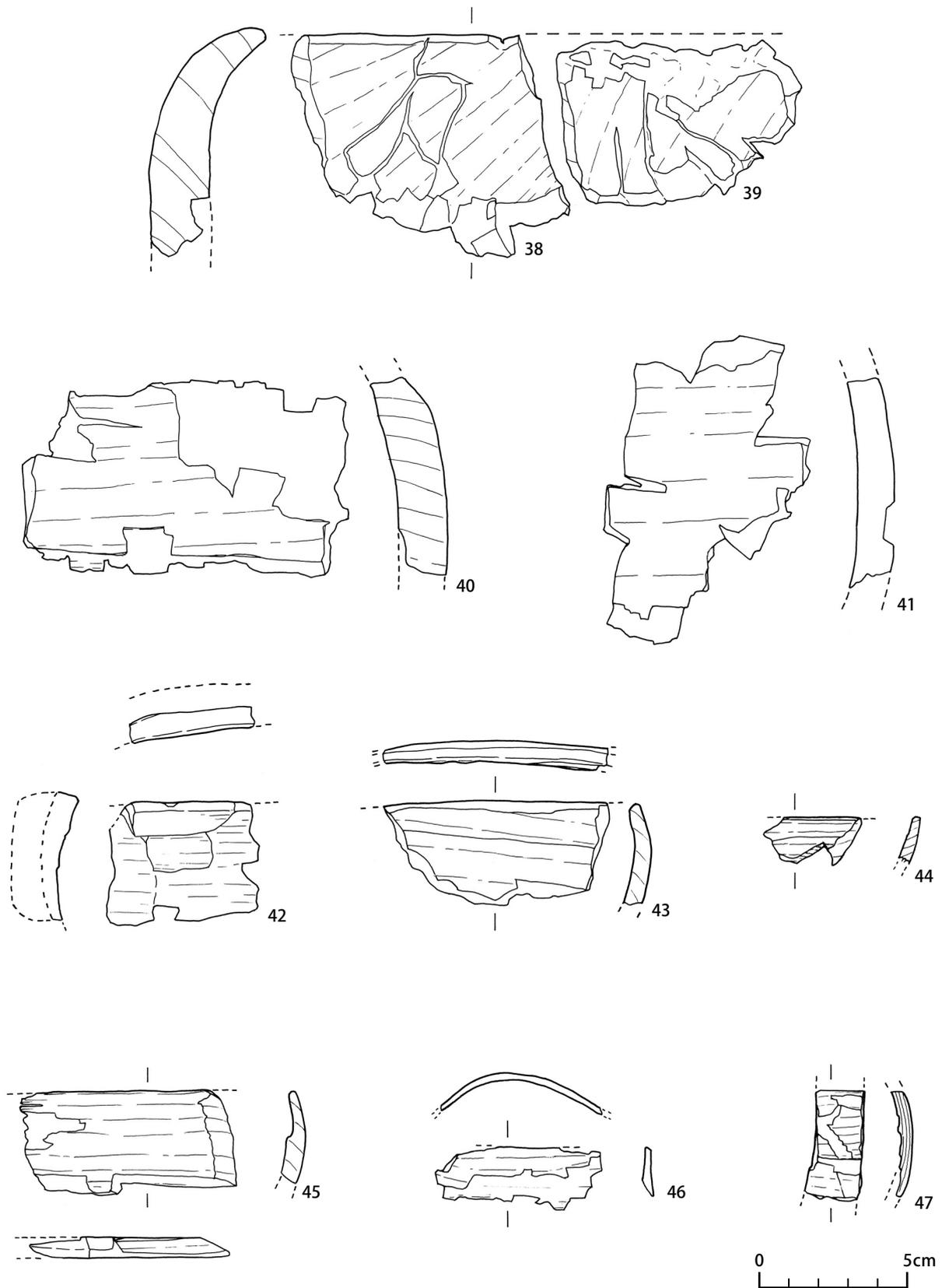


Fig. 55 7号竖穴出土の木製品 5

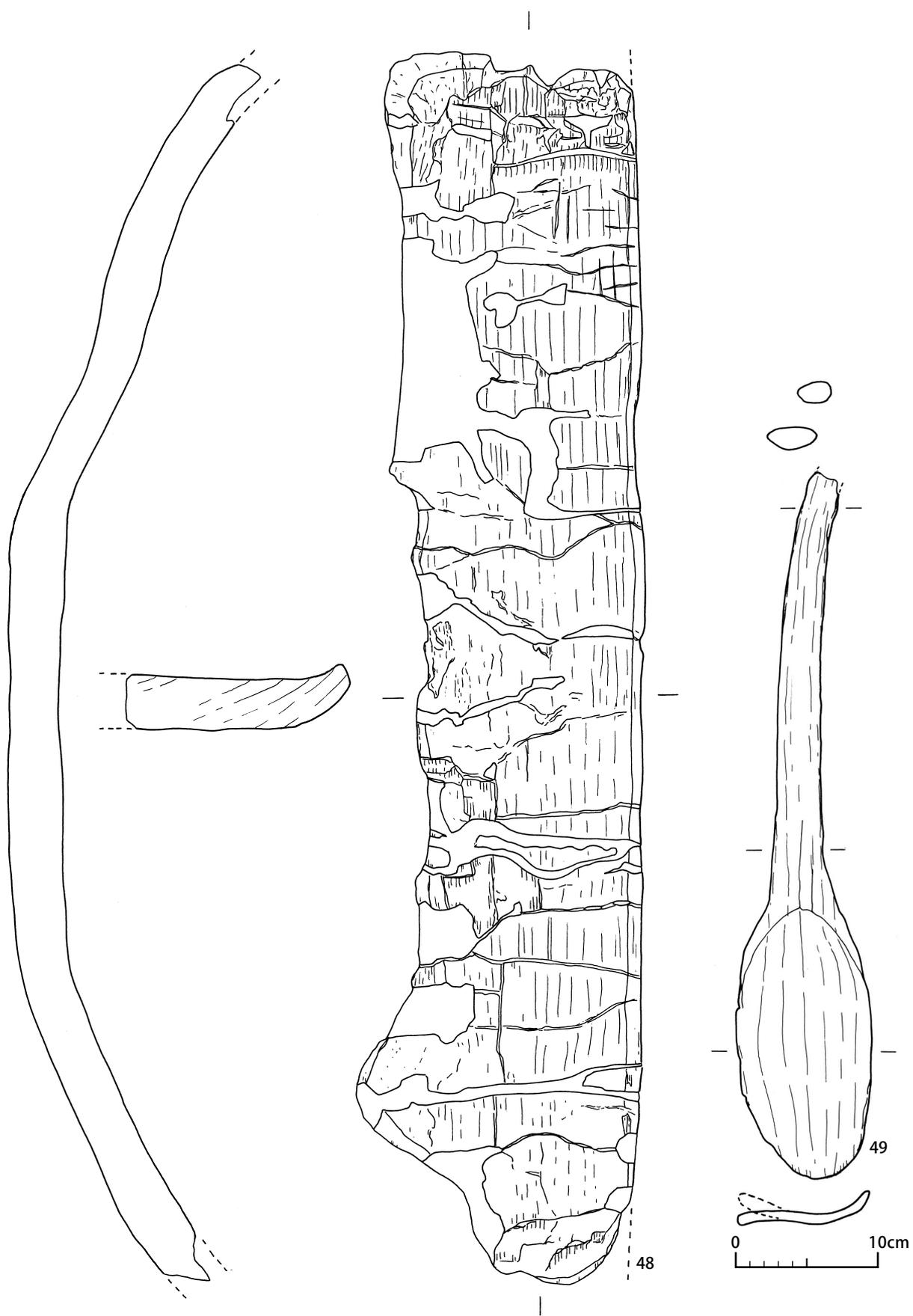


Fig. 56 7号竖穴出土の木製品 6

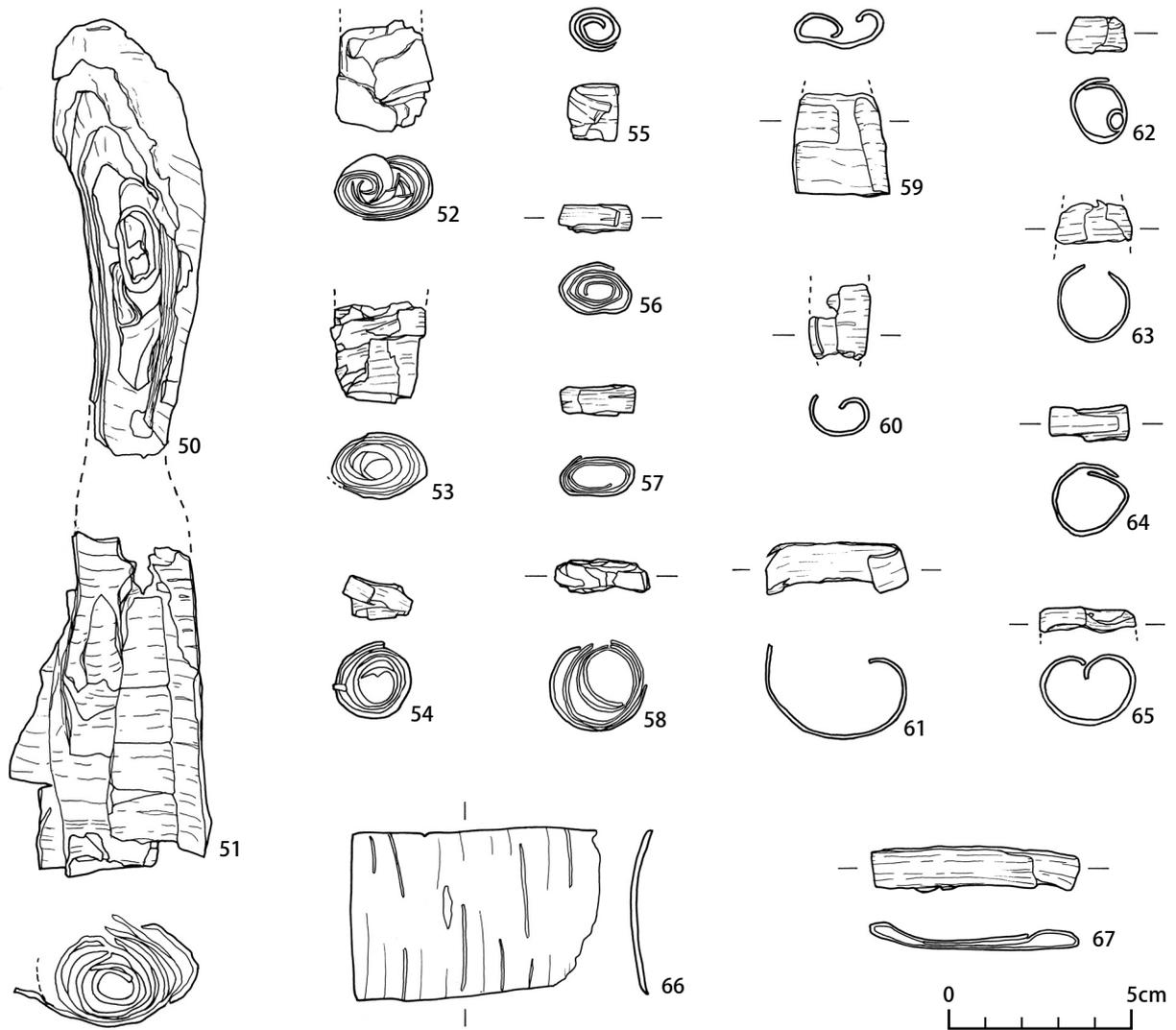


Fig. 57 7号竖穴出土の木製品 7

出土した縫い針である。両端にかえりをもち、長さ 18.5cm を測る。被熱や土圧によって若干変形していると思われる。5 は、2 と同じところから出土した刀子の柄と思われる形状のものである。残存部長は 14.3cm。6 も 2・5 と同じところの IV 層出土品である。大型の匙で全長は 19.7cm を測る。柄の中央付近には 5 箇所の手がかりがみられる。被熱と土圧によって歪みがみられる。7 も 6 とともに出土した小型匙で、残存長は 8.0cm である。柄部先端は欠損しているが、突起と手がかりがみられる。8 も 6・7 と同じところから出土した匙状のものである。両端は欠失しているが、両面ともに上下に短刻がみられる。ヤナギ属製。9 は、7a 号の炭化材列の IV 層から出土した櫛である。長さ 9.4cm。0.5mm ~ 1mm の薄い板を 15 枚重ねて、中央で折り曲げて歯を 30 本としている櫛である。折り曲げの 2cm、3cm、4cm 強の部分にサクラの皮を巻いて固定していたらしい。歯の素材は竹である。オホーツク文化に伴ったのは初である。10 は、7b 号竖穴の木製品集中区の IV 層出土の櫛の一部である。竹製。11 は、2・5・6・7 などと

## 第二章 遺構各説

同じところの出土品で、算盤玉状の彫刻品の木製品である。中は中空になっており、算盤状の玉は少なくとも4個が並ぶものようである。用途不明である。被熱と土圧で若干歪んでいるが、玉の部分は本来は真円に近いものであったらしい。12は、7a号の炭化材列のIV層出土のもので、彫刻品の一部である。隆起線と沈線部を表現しているが、器種は不明である。

13は、2・5・6・7・11と同じところの出土。弓状のもので、残存長は26cmを超える。端部が残る部分は薄く削って両側に抉りを入れており、三角形に削っているが、横から見ると溝状に削っていることがわかる。14・15は、13と同じ出土状況である。16は、7号床面の壁際出土の木釘であろうと思われるものである。17は、15と同様の出土状態である。下端は若干尖らせている。18は、15と同じところの出土の板状の加工品である。湾曲する本体の一部に径7mmほどの穿孔がみられる。19は、17と同じところで出土。表面を平らにした三角形の断面をもつもので、一部に穴がみられる。20は、10と同じく7b号竪穴の木製品集中区のIV層出土のものであるが、厚さ1cmほどの加工板材に一部に長方形の穿孔がみられるものである。広葉樹散孔材製。21は、2などと同じ出土である。右端が細くなる篋状の木製品であるが、方形に近い穿孔が2箇所みられる。被熱と土圧で断面が湾曲しているが、本来はまっすぐであったことが考えられる。それは側面の木取りが柁目であることから考えられることである。

22は、10・20と同じ出土状態である。篋状にみえるが、刳物であった可能性もある。孔状のものは偶然の欠損である。図の左側の断面は被熱と土圧で平らに変形しているが、実際はさらに湾曲していたことが考えられる。23は、骨塚a出土のもので、広葉樹散孔材製の板状加工品の篋状木製品である。図の平面図右端は薄くなるように加工されている。側面が湾曲しているのは被熱のせいであろうか。24は、2などと同じ出土状態である。柁目にとった篋状木製品であろう。被熱と土圧で断面部は歪んでいるのであろう。25は、24や2と同じ7a号竪穴の出土状態の木製品の一部である。26も前者と同じ出土で、柁目にとっている木製品の一部であるが、24と次の27の間に入れて接合可能と思われるものである。27の右側縁の切込みは後世のものである。28は、22と同じ出土である。断面が楕円形の棒状木製品で、トウヒ属製である。29は、7a号竪穴の貼床a付近の炭化材内のIV層出土で、板状もしくは棒状加工品である。30は、7号竪穴のIV層出土品で、断面が楕円形になる木製品の一部である。31は、26などと同じところからの出土で、両側縁は折れているが、表裏面は面取りされている。図の下端には人為的なカットマークが残されている。32も31などと同じ出土状態で、薄い棒状の木器片である。33も同様の出土で、下端が二股状になっている。34は、骨塚a出土のもので、面取りされた木器片である。

35は、7b号竪穴の木製品集中区の床面出土の角盆状のものである。長径は27cmほどになるであろう。被熱と土圧でかなり歪んでいる。36・37は、IV層出土のもので、同一個体と考え図示した。かなり大型の楕円形の盆状木製品の一部と思われる。横木取り。

38・39は、同一個体と考えた。7b号竪穴の北壁炭化材列内IV層出土の盆である。被熱により膨張し、表面に無数のひび割れがみられるが、歪みは少ない方である。カエデ属製。40・41は、同一個体と考えた盆状のもので、床面出土である。残念ながら口縁部に相当する部分はない。カエデ属製。42は、7b号竪穴の床面出土の板材である。図の上端のみに加工痕が残り、ほかは表面が剥離している。取り

上げ時にバインダー処理したため土が付着し、厚さは不明である。43は、7b号竪穴の木製品集中区床面出土で、椀ないし盆と思われる口縁部片である。内側の口縁下の段は、木理と平行に施されたため、口縁とは平行になっていない。土圧のため平たくなっているが、本来は口縁がもう少し曲線を描くと推定される。ほかに接合可能な破片が8点あるが、表面が剥離しているため、図示しなかった。44は、IV層出土の椀片である。内側の口縁下の段は木理に平行している。45は、7a号竪穴の木製品集中区出土で、椀状のものである。46は、7b号竪穴木製品集中区のIV層出土の椀状の割り物である。口縁部の厚さは薄く3mmほどである。モミ属製。47は、7a号竪穴の木製品集中区のIV層出土の木器片で、口縁部は残存していない。両面ともに面取りされているが、内側は剥離が激しい。

48は、7b号竪穴の木製品集中区のIV層出土である。残存長が90cmほどになる大型槽の一部と考えてよいであろう。厚さは2cmほどである。ヤナギ属製。49は、48の上に載って出土した大型の杓子で、48の槽と対になるものである。柄の先端を欠くが、長さは50cmを測る。皿の部分は被熱と土圧で歪み平らになっている。やはりヤナギ属製。

50・51は、同一個体と考えられる樹皮を丸めた松明である。7a号竪穴の炭化材列外側のIV層出土のものである。52は、床面出土の松明片である。53も樹皮を丸めた松明状のものであるが、サクラの可能性があるので、7b号竪穴の貼床bをめぐる周溝から出土している。54は、7b号竪穴のIV層出土で、コイル状にサクラの皮を巻いている。55は、骨塚a出土で、やはりコイル状の樹皮製品である。56・57は、同じく骨塚a出土であるが、サクラの皮を巻いたものである。58は、骨塚bの出土。59は、7号竪穴の攪乱部から出土した樹皮製品である。60～63・65は、7b号竪穴のIV層出土の樹皮製品。61はこれで完形品のようである。サクラ樹皮製。62もこれで完形品と思われるものである。63は一重の樹皮製品。64は、骨塚a出土のサクラの皮製の樹皮製品。66は、7a号竪穴のIV層出土で、上下と左側縁は人為的に切断されているようである。シラカバ樹皮を使用している。67は、骨塚b出土の樹皮製品であるが、被熱と土圧で歪んでいる。

(宇田川洋)

### 3-5 金属器

#### ① 7a号床面出土 (Fig.58-1)

1は貼床aの東側の炭化材列から出土した刀子である。刃部のみで区や茎の形態は不明である。刀子の鋒を両刃にして、若干反らせたものであり、ヤリガンナのような使い方をしたものと考えられる。

#### ② 7a号骨塚a出土 (Fig.58-2)

2は骨塚aから出土した青銅製の装飾具である。十字形を呈しており、断面形は凸形で極めて薄い。裏面の中央部には脚が付けられている。なお、極めて小さいため図化していないが、この2のほかに骨塚aからは青銅製品の薄片が出土している。

#### ③ 7b号床面出土 (Fig.58-3～5)

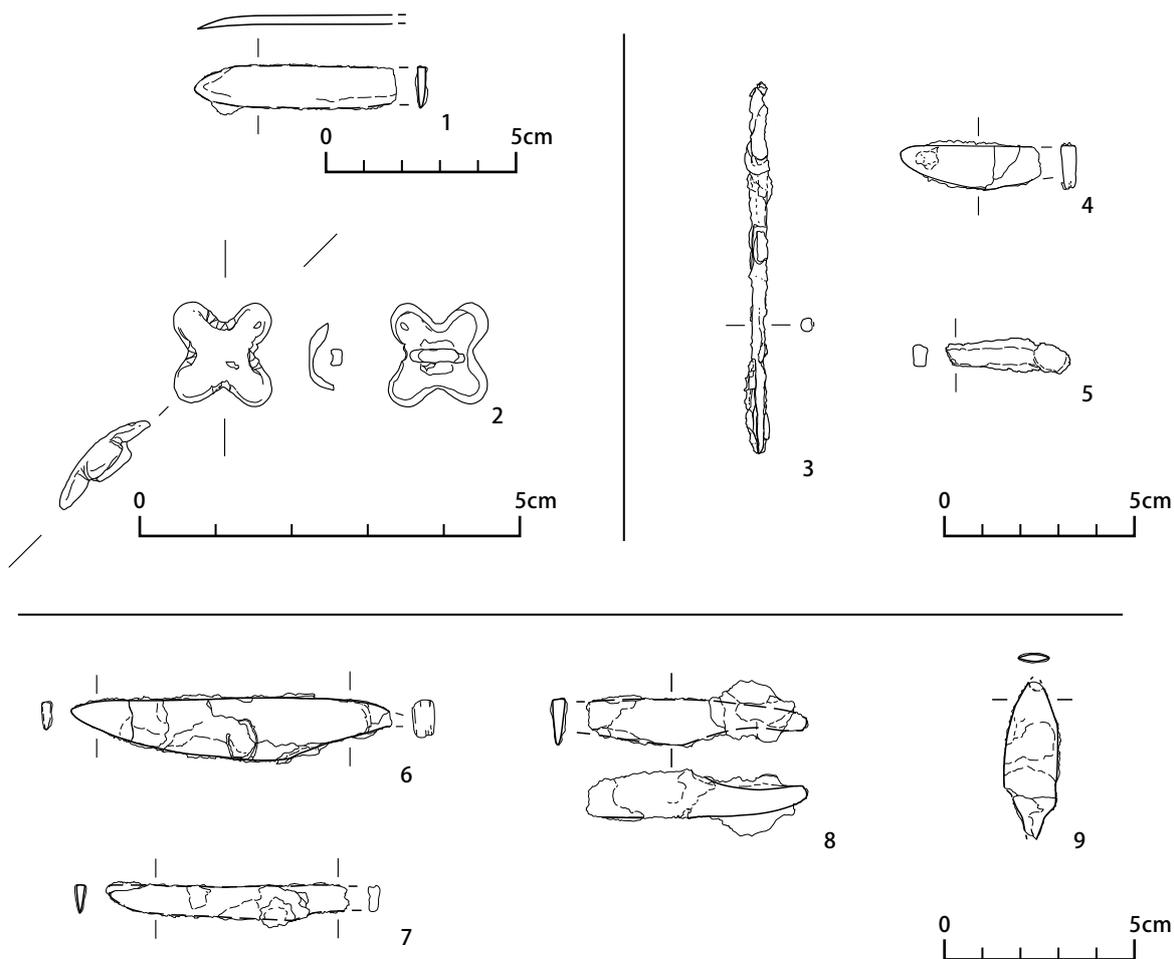


Fig. 58 7号竪穴出土の金属器（1：7a号床面、2：7a号骨塚a、3～5：7b号床面、6～9：7号埋土）

3は7b号床面から出土した針である。錆膨れが著しいため、不明な部分が多く、両端の遺存状態は良く分からない。断面は歪な円形である。4は7b号の炭化材列（エ・オ区）から出土した刀子である。刃部だけの破片である。刃部の厚みは薄く、鉄鏃の可能性も考えられるが、左右のバランスの悪い点、基部がはっきりしない点などから刀子であると判断した。5は周溝内（エ・オ区）から出土した鉄製品である。断面は方形である。8号竪穴の資料（Fig.96-11）を参考にすれば、刀子の茎の可能性はあるものの、特徴の少ない資料であるため、その器種を特定することは困難である。

#### ④ 7号竪穴埋土（Fig.58-6～9）

6はIV層出土（エ・オ区）の曲手刀子である。茎の基部を欠くものの、ほぼ完形に近い。全体的に錆膨れがひどいため、本来の厚さを推定することは困難である。7はIV層出土（カ区）の片区刀子である。茎部分を半ば欠く。オホーツク文化の刀子にしては細身である。8はIV層出土（ウ区）の曲手刀子である。刃部を半ば欠く。錆膨れが著しいものの、茎尻の形態の分かる資料である。9はIV層出土（カ区）の有

茎鏃である。両先端をわずかに欠く。一見すると広根柳葉式の鉄鏃に分類されるが、左右のバランスが良くないことから、小型の刀子を再加工した可能性が考えられる。

(笹田朋孝)

#### 4 小括

7号竪穴では、大小2軒(7a号・7b号)の竪穴住居が入れ子状に重複していた。周溝の切り合いや炭化材の遺存状況などから判断すると外側の7a号が古く、その内部に7b号を縮小して構築し直しているが、床面の高さは同じレベルであった。7b号竪穴では構築後、さらにもう一度改築がおこなわれた様子が確認されているが、それは南壁をわずかに縮小し、支柱穴の位置を変更して長軸をわずかに東側へとずらし、それにあわせて貼床の一部を削り直すという小規模な改変であった(7b'号)。7a号と7b号はどちらも廃絶時に火を受けている焼失住居であり、出土土器から判断すると竪穴の時期は両者ともにオホーツク文化貼付文期に属する。この7号竪穴のように、入れ子状に竪穴を縮小すること、廃絶時に火を受けていることは本遺跡のオホーツク文化の竪穴住居に多く認められる特徴であり、なかでも本竪穴における比較的単純な建て替えのあり方は、その特徴を最も端的・典型的に示している例といえる。

7a号および7b号竪穴の遺構で特に注目されるのは次の2点であろう。1つ目は壁際の周溝内や開口部側の支柱穴などの柱穴内に炭化材が良好な状態で遺存していたことである。炭化材の様相からは、樹皮と木材を組み合わせた壁の構造や、細い柱を束ねて支柱としていたこと、壁際にベンチ状の構造物を作り付けてその下部に木製品を収納していたこと、貼床や炉の周囲に木枠を作っていたことなどが確認できた。壁の構造については後述の8号～10号竪穴でもほぼ同様のものが確認されているが、支柱の構造やベンチ状構造物が確認できた点は7a号竪穴での大きな成果といえよう。なお、出土した炭化材の樹種については第三章第七節を参照されたい。遺構の特徴の2つ目は骨塚aの規模が極めて大きく、110個体分ものヒグマの遺体が残されていたことである。動物遺体の内容等については第三章第九節を参照いただきたいが、道内最大といえる出土量の多さに加えて、ヒグマ頭骨が4列に配置されていたこと、骨塚下面の板張りや傾斜による祭壇状の構造、後北C<sub>2</sub>・D式注口土器の採集行為と奉納などにも注目しておきたい。

また、出土遺物が極めて豊富である点も7号竪穴の特徴である。特に、炭化木製品と骨角器の出土量と内容は他の8号～10号竪穴と比べても群を抜いている。これらの木製品と骨角器については第三章第三節と第五節の考察を参照されたい。加えて大陸系や擦文文化経由とみられる外来の遺物が多く出土している点も注目される。大陸系の遺物としてはまず十字形の青銅製装飾具(Fig.58-2)がある。これの由来については、同様の資料(ただし本例とはやや異なり表面に筋状の凹凸文様を有する例を含む)がロシア極東のトロイツコエ(Деревянка 1977: Табл. L IV -1)、コルサコフ(Медведев 1982: Табл. X V -3 ~ 13, Табл. L VIII -2 ~ 4, Табл. L X X IV -11 ~ 15・19 ~ 21, Табл. L X X X VIII -16, Табл. X C II -40, Табл. X C IV -12, Медведев 1991: Табл. IX -9, Табл. L X -19, Табл. L X X II -17, Табл. L X X X V

-15)、ボロニ湖 (Медведев 1977: Табл. L VI -24・26) 等の鞅鞅系の遺跡から出土しており、本例はこれらの鞅鞅系遺物がもたらされたものとして評価できよう。ほかに注意すべきものとしては磨製石鏃がある (Fig.37-17)。管見では道内には類例がなく、周辺地域では、オホーツク文化期より古く位置づけられるようであるがサハリンでの出土例がある (木村 1984)。ロシア極東ではポリツェ文化の類例はあるが、鞅鞅系の鏃は鉄製か骨製に限られるようであり、オホーツク文化併行期の類例は確認できていない。その意味でこの磨製石鏃を「大陸系」とすることには問題があるが、模倣品の可能性も含めて大陸系の可能性が高いものと考えておきたい。一方、擦文文化経由の遺物としては木製の櫛が注目されよう (Fig.51-9)。この櫛の位置づけについては第三章第五節で考察されているが、本州系の遺物と考えられる。ほかに擦文文化経由の遺物としては完形に近い擦文土器が出土しているが、この土器については第三章第二節で考察されているのでそちらを参照されたい。

本竪穴出土のオホーツク貼付文系土器の型式学的特徴を見ると、骨塚 a から出土した完形土器の大半が、文様の単位が 1 本単独の貼付文のみで構成されている個体であることが注目される。このような文様の構成は、貼付文系土器の中では型式学的に古いものと位置づけることができる。本遺跡群のオホーツク文化の各竪穴に伴った土器群でこのような古手の文様構成の個体が目立つ例としては、1 号外側竪穴、2 号竪穴、9a 号竪穴、9b 号竪穴の床面出土土器群をあげることができるが、これらの資料と比較しても 7a 骨塚の出土土器群は 1 本単独の貼付文のみの個体が主体となる比較的単純な型式学的様相を有していると言えよう。その意味で、7a 号竪穴は本遺跡群内でこれまで調査されたオホーツク文化の竪穴のなかでも最も古手の時期に属する竪穴と考えられよう。骨塚や出土遺物の内容が本遺跡群の中で最も充実している 7a 号竪穴が本遺跡群の中でも初期に建てられた (正確には廃絶された) オホーツク文化の竪穴住居であるという点は、本遺跡群におけるオホーツク文化の集落構造を考える上で興味深いといえる。

(熊木俊朗)

註

- 1) 7b 号 → 7b' 号という段階を設定した場合、本文で「7b 号」に伴うとした遺物は、正確にはほぼ全て「7b' 号」に伴うと表現するのが妥当であるし、廃絶時に火を受けていたのも正確には「7b' 号」であって、7b 号から 7b' 号への改築の際にも火を受けていたか否かは、7b 号の奥壁側の周溝内に明確な形で炭化材が遺存していなかったこともあってはっきりしない。しかしながら本文でも述べるように 7b 号と 7b' 号の新旧関係や変遷過程には不明確な部分も多いため、以下の本文では「7b' 号」という改築の存在自体は認めるものの、遺構の内部構造や出土遺物の記述に際しては「7b 号」と「7b' 号」とを厳密には区別せず、単に「7b 号」に伴うものと表現する。
- 2) この 3 基のピットは、本文で述べたように層位的には炉 b や骨塚 b より下層に位置するため、7b 号よりは古く 7a 号の時期に位置づけられる可能性が高い。しかし平面的な位置関係をみると、これらのピットの位置は 7a 号の長軸上からやや外れており、むしろ 7b 号の長軸上に位置している。その点からすると 7b 号の貼床 b の時期に北側の炉 b とこれらの柱穴が機能し、貼床 b' の時期には柱穴が埋められて南側の炉 b と骨塚 b がつくられた

などという想定も成り立つ。しかしそのように考えると貼床bの段階における炉や骨塚のあり方には疑問が残るため、先に述べたようにこれらのピットは7b号に伴うのではなく、7a号に伴うものと判断した。

#### 引用文献

木村信六 1984 「樺太の磨製石鏃」『千島・樺太の文化誌』北海道出版企画センター：26-35

Деревянко Е. И. 1977 Троицкий могильник. Новосибирск.

Медведев В. Е. 1977 Культура амурских чжурчжэней: Конец X – X I век. Новосибирск.

Медведев В. Е. 1982 Средневековые памятники острова Усурийского. Новосибирск.

Медведев В. Е. 1991 Корсаковский могильник: хронология и материалы. Новосибирск.